

International Joint Research Programs Discussion Paper Series
国際共同研究推進事業

「大学における教育研究の生産性向上に関する国際共同研究」

ディスカッションペーパーシリーズ No. 12

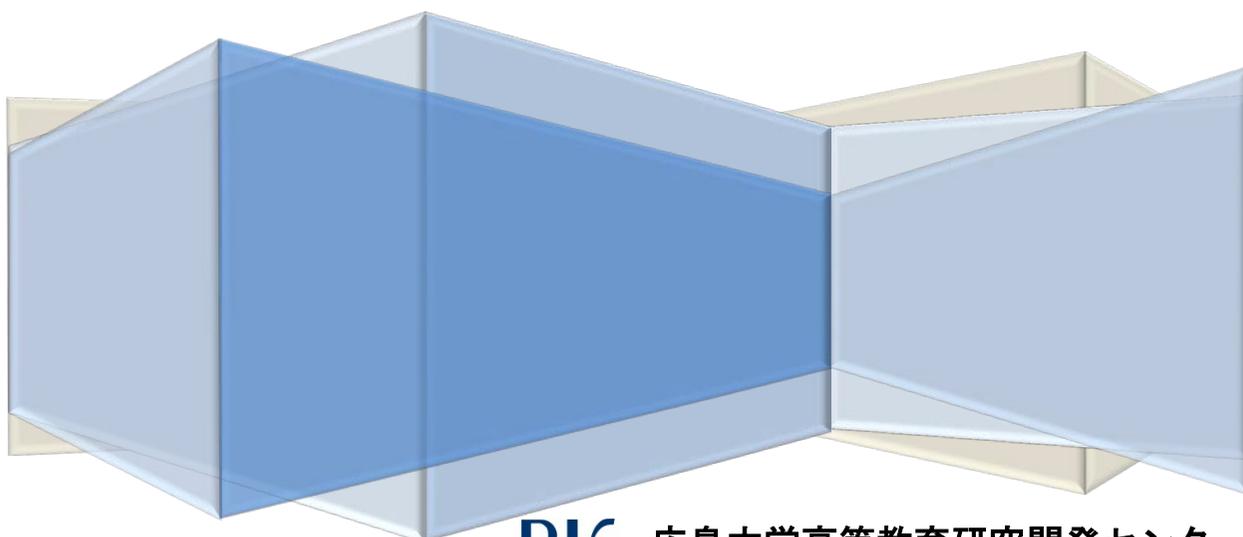
戦略的研究プロジェクトシリーズ XI

「21世紀知識基盤社会における大学・大学院の改革の具体的方策に関する研究」

ボーダーフリー大学における
学士課程教育の質保証の実現可能性
—学部長調査報告書—

Quality Assurance for Undergraduate Programs
at Low-prestige Universities

葛城 浩一 編



RICE 広島大学高等教育研究開発センター

はじめに

「ボーダーフリー大学」とは、「受験すれば必ず合格するような大学，すなわち，事実上の全入状態にある大学」のことである。こうした大学は，入試による選抜機能が働かないため，基礎学力や学習習慣，学習への動機づけの欠如といった，早ければ小学校段階から先送りされてきた学習面での問題を抱えている学生を多く受け入れている。学生が入学時点でそうした学習面での問題を抱えていることを前提としている分，ボーダーフリー大学で学士課程教育の質を保証すること（以下，教育の質保証）は容易なことではない。

だからこそ，国際的にも教育の質保証が求められている現状において，日本の高等教育の裾野に位置するボーダーフリー大学における教育の質保証について考えることは，極めて重要である。さらには，ボーダーフリー大学には日本の高等教育（特に大学）が抱えている問題が凝縮されて顕在化していることに鑑みれば，ボーダーフリー大学における教育の質保証について考えることは，日本の高等教育における教育の質保証について問い直すことになるという意味においても，極めて重要である。なお，保証すべき質の対象には様々な要素があると考えられるが，本稿ではそれを「学生の学習の水準」であると定義する。すなわち，本稿でいう教育の質保証とは，「学習成果として定めた知識の理解度や技能の習得度を，一定以上確保すること」（川嶋，2013，10頁）を意味する。

このように，ボーダーフリー大学における教育の質保証について考えることは極めて重要であるが，そこに焦点を当てた研究は管見の限り葛城の一連の研究のみである（葛城，2017等）。そもそもボーダーフリー大学自体，これまで研究対象として扱われることはほとんどなかった。山田（2009）も指摘するように，「[日本の] 大学研究の視点は，旧来のエリート大学，すなわち現在の研究大学を中心にしたもの」（33頁，角括弧内は筆者）なのである。近年，ボーダーフリー大学を研究対象とした先行研究も散見されるようになってきてはいるが，「その限られた研究成果は就職活動を含めた職業選択と大学生活に関するものに大別できる」（三宅，2014，9頁）という指摘からもうかがえるように，その先行研究の多くはそこに所属する学生を分析対象としたものである。すなわち，教育を提供される学生側の意識・実態に関する知見は蓄積されつつあるが，教育を提供する大学側の意識・実態に関する知見はあまり蓄積されていない。ボーダーフリー大学における教育の質保証について考える上でも，特に後者の知見の蓄積は非常に重要である。

そこで本研究では，これまであまり研究対象とされてこなかったボーダーフリー大学の，さらに教育を提供する大学側に焦点を当て，ボーダーフリー大学における教育の質保証の実現可能性について明らかにすべく，検討を行った。具体的には，ボーダーフリー大学における教育の質保証のための各種取組の進捗状況等の把握を主目的とする，学部長を対象としたアンケート調査に基づき，ボーダーフリー大学における教育の質保証の実態につい

て明らかにした上で、その実現を促進あるいは阻害する要因についての検討を行った。

まず第1章「学部長調査からみえる教育の質保証の実態」では、ボーダーフリー大学に相当するのが定員割れしている大学であることから定員充足率に着目し、ボーダーフリー大学における教育の質保証の実態が定員充足率によってどの程度異なるのか明らかにした。また、第2章「学部系統による教育の質保証の実態の差異」では、第1章で得られた結果にも少なからず影響を与えていると考えられる学部系統による差異に着目し、ボーダーフリー大学における教育の質保証の実態が学部系統によってどの程度異なるのか明らかにした。そして、第3章「教育の質保証の実現を促進する要因についての検討」では、教育の質保証の実現状況に対する学部長の認識を手がかりとして、ボーダーフリー大学における教育の質保証の実現を促進する要因について明らかにした。また、第4章「教育の質保証の実現を阻害する要因についての検討」では、教育の質保証の実現の妨げになっていることについての自由記述欄のデータをもとに、ボーダーフリー大学における教育の質保証の実現を阻害する可能性のある要因について試行的に整理を試みた。

なお、第1章から第3章は、既に公表している論稿に最低限の加筆修正を施したものである。そのため、冒頭の部分は内容が重複しているが、この点はどうかご容赦願いたい。また、唯一の書下ろしである第4章は、研究協力者である宇田響氏（広島大学大学院）に執筆いただいた。宇田氏には資料編の基礎集計表の作成をはじめとして、本研究に尽力いただいている。この場を借りて感謝の意を表したい。

最後に、本研究は、平成29～31年度科学研究費補助金基盤研究（C）「ユニバーサル化時代における学士課程教育の質保証の実現可能性に関する研究」（研究代表者：葛城浩一）による研究成果の一部でもある。調査にご協力いただいた皆様に心より感謝いたします。

初出一覧

- 第1章 葛城浩一（2019）「ボーダーフリー大学における学士課程教育の質保証の実現可能性—学部長調査からみえる教育の質保証の実態」『大学論集』第51集
- 第2章 葛城浩一（2019）「ボーダーフリー大学における学士課程教育の質保証の実現可能性—学部系統による教育の質保証の実態の差異」『香川大学教育研究』第16号
- 第3章 葛城浩一（2019）「ボーダーフリー大学における学士課程教育の質保証の実現可能性—実現を促進する要因についての検討」『大学教育学会誌』第40巻第2号

目次

はじめに

第1章 学部長調査からみえる教育の質保証の実態	1
第2章 学部系統による教育の質保証の実態の差異	16
第3章 教育の質保証の実現を促進する要因についての検討	31
第4章 教育の質保証の実現を阻害する要因についての検討 ー自由記述に基づく試行的分析ー	46
参考文献	55

資料編

調査票「ユニバーサル化時代における学士課程教育の質保証に関する調査」
基礎集計表

第1章 学部長調査からみえる教育の質保証の実態

葛城 浩一
(香川大学)

1. はじめに

「ボーダーフリー大学」とは、「受験すれば必ず合格するような大学、すなわち、事実上の全入状態にある大学」のことである¹⁾。こうした大学は、入試による選抜機能が働かないため、基礎学力や学習習慣、学習への動機づけの欠如といった、早ければ小学校段階から先送りされてきた学習面での問題を抱えている学生を多く受け入れている。学生が入学時点でそうした学習面での問題を抱えていることを前提としている分、ボーダーフリー大学で学士課程教育の質を保証すること（以下、教育の質保証）は容易なことではない。

だからこそ、国際的にも教育の質保証が求められている現状において、日本の高等教育の裾野に位置するボーダーフリー大学における教育の質保証について考えることは、極めて重要である。さらには、ボーダーフリー大学には日本の高等教育（特に大学）が抱えている問題が凝縮されて顕在化している²⁾ことに鑑みれば、ボーダーフリー大学における教育の質保証について考えることは、日本の高等教育における教育の質保証について問い直すことになるという意味においても、極めて重要である。なお、保証すべき質の対象には様々な要素があると考えられるが、本稿ではそれを「学生の学習の水準」とであると定義する。すなわち、本稿でいう教育の質保証とは、「学習成果として定めた知識の理解度や技能の習得度を、一定以上確保すること」（川嶋，2013，10頁）を意味する。

このように、ボーダーフリー大学における教育の質保証について考えることは極めて重要であるが、そこに焦点を当てた研究は管見の限り葛城の一連の研究のみである（葛城，2017等）。そもそもボーダーフリー大学自体、これまで研究対象として扱われることはほとんどなかった。山田（2009）も指摘するように、「[日本の] 大学研究の視点は、旧来のエリート大学、すなわち現在の研究大学を中心にしたもの」（33頁，角括弧内は筆者）なのである。近年、ボーダーフリー大学を研究対象とした先行研究も散見されるようになってきてはいるが、「その限られた研究成果は就職活動を含めた職業選択と大学生活に関するものに大別できる」（三宅，2014，9頁）という指摘からもうかがえるように、その先行研究の多くはそこに所属する学生（以下、ボーダーフリー大学生）を分析対象としたものである。すなわち、教育を提供される学生側の意識・実態に関する知見は蓄積されつつあるが、教育を提供する大学側の意識・実態に関する知見はあまり蓄積されていない。ボーダーフリー大学における教育の質保証について考える上でも、特に後者の知見の蓄積は非常

に重要である。

そこで本稿では、これまであまり研究対象とされてこなかったボーダーフリー大学に焦点を当て、教育を提供する大学側の教育の質保証の実態について明らかにする。具体的には、ボーダーフリー大学における教育の質保証のための各種取組の進捗状況等の把握を主目的とする、学部長を対象としたアンケート調査に基づき、ボーダーフリー大学における教育の質保証の実態について明らかにする。それらを通して、ボーダーフリー大学における教育の質保証に資する実践的な施策に寄与しうる知見を提供したいと考える。

2. 調査の方法

本稿で使用するデータは、平成 29～31 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 「ユニバーサル化時代における学士課程教育の質保証の実現可能性に関する研究」(研究代表者:葛城浩一) 及び広島大学高等教育研究開発センターの研究プロジェクト「大衆化大学における学士課程教育の質保証のあり方に関する総合的研究」(研究代表者:葛城浩一) の一環として実施した「ユニバーサル化時代における学士課程教育の質保証に関する調査」である。

この調査は、中堅以下の大学(学部)の学部長(具体的には、『2018 年版 大学ランキング』(朝日新聞出版)に基づく偏差値 50 未満の学部の学部長)を対象として、2017 年 11 月から 2018 年 3 月にかけて実施した。回答者数は 350 名であり、配布数を母数とした回答率は 25.3%であった。

さて、本稿では、ボーダーフリー大学を、「受験すれば必ず合格するような大学、すなわち、事実上の全入状態にある大学」と定義しているから、それに相当するのは定員割れしている大学ということになる。そこで本稿では、定員充足率³⁾に着目し、「80%未満」群、「80%以上 100%未満」群、「100%以上」群の 3 群に分類して群間比較を行うこととする。なお、ボーダーフリー大学に該当するのは、定員割れしている「80%未満」群と「80%以上 100%未満」群となる。各群のサンプル数は、「80%未満」群が 69 名、「80%以上 100%未満」群が 58 名、「100%以上」群が 222 名である。

各群の基本的属性(開設時期、偏差値、学部系統)は表 1 に示す通りである⁴⁾。ボーダーフリー大学に該当する 2 群と比較すると、「80%未満」群は「80%以上 100%未満」群に比べ、開設時期については大差はないものの、偏差値については「BF」のサンプルが多い一方で「42.5」以上のサンプルはない。また、学部系統については、「人文科学系」のサンプルが多いのに対し「保健系」のサンプルがやや少ない。なお、回答状況はこうした基本的属性によって少なからず異なることは想像に難くないが、本章ではまず、それらを問わず定員充足率に基づく回答状況を把握することから始めたいと考える。それらによる差異に着目した分析は別稿に譲ることとしたい。

表 1 各群の基本的属性

	全体	開設時期				偏差値							
		急増期以前	抑制期	臨定期	再抑制期	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5	
80%未満	69	22	8	33	6	34	23	8	4	0	0	0	
		31.9%	11.6%	47.8%	8.7%	49.3%	33.3%	11.6%	5.8%	0.0%	0.0%	0.0%	
80%以上 100%未満	58	21	7	26	4	17	23	9	2	7	0	0	
		36.2%	12.1%	44.8%	6.9%	29.3%	39.7%	15.5%	3.4%	12.1%	0.0%	0.0%	
100%以上	222	132	19	55	16	13	27	44	38	44	30	26	
		59.5%	8.6%	24.8%	7.2%	5.9%	12.2%	19.8%	17.1%	19.8%	13.5%	11.7%	
学部系統													
		歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
80%未満	2	2	6	6	0	18	19	4	4	0	2	6	
		2.9%	2.9%	8.7%	8.7%	0.0%	26.1%	27.5%	5.8%	0.0%	2.9%	8.7%	
80%以上 100%未満	0	3	10	7	1	4	19	2	3	0	2	7	
		0.0%	5.2%	17.2%	12.1%	1.7%	6.9%	32.8%	3.4%	5.2%	0.0%	3.4%	12.1%
100%以上	1	5	46	22	1	29	65	7	15	2	3	26	
		0.5%	2.3%	20.7%	9.9%	0.5%	13.1%	29.3%	3.2%	6.8%	0.9%	1.4%	11.7%

注：上段は実数，下段は当該群全体に占める割合。

3. 学習面での多様性の問題の実態

(1) 学習面での問題を抱えている学生の実態

まず本節では、ボーダーフリー大学が抱えている学習面での多様性の問題の実態についてみていきたい。先述のように、ボーダーフリー大学は、基礎学力や学習習慣、学習への動機づけの欠如といった、学習面での問題を抱えている学生を多く受け入れている。そこで本調査では、「貴学部では、以下のような学習面での問題を抱えている入学者をどの程度受け入れておられますか。印象で結構ですので、貴学部の入学者全体に占めるおおよその割合をお書きください」とたずね、以下に示す項目のそれぞれについて、実数での回答を求めた。その結果を示したのが表2である。

これをみると、いずれの項目についても、ボーダーフリー大学に該当する2群ではその平均値は2割程度と「100%以上」群よりも高く、統計的に有意な差も確認できる。

表 2 以下のような学習面での問題を抱えている入学者をどの程度受け入れているか

	全体	80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	
所属学部で学ぶ上で必要となる 基礎学力の著しい欠如	12.6%	17.8%	17.8%	9.5%	***
学習習慣や学習レディネスの著しい欠如	17.4%	21.2%	23.8%	14.6%	***
学習への動機づけの著しい欠如	15.9%	19.5%	21.5%	13.3%	***

注：***は $p < 0.001$ ，**は $p < 0.01$ ，*は $p < 0.05$ 。以下同様⁵⁾。値は平均値。

さて、こうした学習面での問題の背景には、障害等の理由が疑われるような学生も一定数存在していると考えられる。そこで本調査では、「問1（上記の問い）のような学習面での問題の背景に、障害等の理由が疑われるような学生はどの程度おられますか。印象で結構ですので、貴学部の入学者全体に占めるおおよその割合をお答えください」とたずね、以下に示す選択肢の中から回答を求めた⁶⁾。その結果を示したのが表3である。

これをみると、ボーダーフリー大学に該当する2群のうち「80%未満」群では高い割合の選択肢での回答が多く、11%以上との回答は2割近くにまで及んでいることがわかる。一方の「80%以上100%未満」群、そして「100%以上」群ではその半数にも及んでおらず、有意な差も確認できる。

表3 学習面での問題の背景に、障害等の理由が疑われるような学生はどの程度いるか

	全体	80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	
0%	7.4%	4.5%	3.5%	9.4%	**
1～5%	68.5%	57.6%	73.7%	70.8%	
6～10%	17.3%	18.2%	15.8%	17.0%	
11～15%	3.6%	9.1%	3.5%	1.9%	
16～20%	1.2%	4.5%	0.0%	0.5%	
21～25%	0.9%	3.0%	0.0%	0.5%	
26%～	1.2%	3.0%	3.5%	0.0%	

このように、学習面での問題を抱えている入学生の割合は、定員割れしているか否かによって大きく変わってくるものの、定員割れが深刻か否かによっては大きくは変わらないようである。しかし、学習面での問題の背景に障害等の理由が疑われるような学生の割合は、定員割れが深刻か否かによって大きく変わってくるようであり、定員割れが深刻なほど高くなるようである。この点に鑑みれば、学習面での問題を抱えている入学生は、定員割れが深刻か否かによって量的には大きくは変わらないのだとしても、質的には大きく変わってくるのではないかと考えられる。

(2) 学習面での多様性の問題への対応の実態

さて、ボーダーフリー大学には（程度差はあれ）学習面での問題を抱えている学生ばかりが集まっているようなイメージを持ちがちであるが、現実はそのようではない。ボーダーフリー大学にそうした学生が集まっていることは確かであるが、そこには学習面で比較的優秀な学生も少なからず存在している。そのため、ボーダーフリー大学では、学習面での問題を抱えている学生から学習面で比較的優秀な学生にいたるまで、学習面での多様性の問題への対応が求められる。そこで本調査では、「貴学部では、基礎学力等の学習面での多様性の問題に対応するために、以下のような取組を行っていますか」とたずね、以下に示す

項目のそれぞれについて、「行っていない」と「行っている」の選択肢の中から回答を求めた。その結果を示したのが表4である。

これをみると、「行っている」との回答の割合は、「学習面で優秀な学生が対象／主対象」の「授業」や「プログラム（正課外を含む）」については、ボーダーフリー大学に該当する2群では前者が2割台、後者が4割程度であるが、「100%以上」群でも大差はないことが確認できる。一方、「学習面で問題を抱えている学生が対象／主対象」の「補習授業（単位あり）」については、ボーダーフリー大学に該当する2群では3割程度と「100%以上」群よりも高く、有意な差も確認できる。一方、「授業（補習授業以外）」についても有意な差が確認できるのだが、その傾向はそれとは異なっており、ボーダーフリー大学に該当する2群のうち「80%以上 100%未満」群では5割ともしっかり高いのだが、一方の「80%未満」群ではその半数にも及んでいない。なお、こうした結果に基本的属性が影響しているか検討してみたが、偏差値や学部系統による大きな影響は確認できなかった⁷⁾。こうした結果は、定員割れが深刻なほど、学習面での問題を抱えている学生への対応として授業（補習授業以外）を行うことが容易ではない可能性を示唆している。

このように、学習面で優秀な学生への対応は、定員割れしているか否か、定員割れが深刻か否かによって大きくは変わらないようである。一方、学習面での問題を抱えている学生への対応は、定員割れしているか否か、定員割れが深刻か否かによって大きく変わってくるものもあるが、定員割れが深刻なほど行っているわけでは必ずしもないようである。

表4 学習面での多様性の問題に対応するために、以下のような取組を行っているか

		全体	80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	
学習面で問題を 抱えている学生 が対象／主対象	授業(補習授業以外)	32.4%	23.2%	50.9%	30.1%	**
	補習授業(単位あり)	20.6%	29.0%	31.6%	15.1%	**
	プログラム (正課外を含む)	37.8%	43.5%	46.4%	34.0%	
学習面で優秀な学生 が対象／主対象	授業	25.0%	25.0%	28.6%	23.7%	
	プログラム (正課外を含む)	36.2%	38.2%	42.9%	33.5%	

注：値は「行っている」の割合。

(3) 学習面での問題を克服できないまま卒業する学生の実態

以上みてきたように、ボーダーフリー大学では、学習面での問題を抱えている学生を多く受け入れており、そうした学生が対象／主対象の取組を行っているようであるが、早ければ小学校段階から先送りされてきた学習面での問題を克服させるのは容易なことではな

い。そこで本調査では、「貴学部では、以下のような学習面での問題を克服できないまま卒業する学生はどの程度おられますか。印象で結構ですので、貴学部の入学者全体に占めるおおよその割合をお書きください」とたずね、以下に示す項目のそれぞれについて、実数での回答を求めた。その結果を示したのが表5である。

これをみると、いずれの項目についても、ボーダーフリー大学に該当する2群ではその平均値は1割程度と「100%以上」群よりも高く、有意な差も確認できる。

このように、学習面での問題を克服できないまま卒業する学生の割合は、定員割れしているか否かによって大きく変わってくるものの、定員割れが深刻か否かによっては大きくは変わらないようである。先に示した学習面での問題を抱えている入学者を受け入れている割合に鑑みれば、ボーダーフリー大学では、学習面での問題を抱えている入学者の半数程度がそれを克服できないまま卒業していることになるのではないかと考えられる。

表5 以下のような学習面での問題を克服できないまま卒業する学生はどの程度いるか

	全体	80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	
所属学部で学ぶ上で必要となる 基礎学力の著しい欠如	7.0%	9.4%	10.6%	5.2%	***
学習習慣や学習レディネスの著しい欠如	8.7%	10.7%	12.9%	6.9%	**

注：値は平均値。

4. 教育の質保証の取組の実態

(1) 教育の質保証の取組状況と実現状況の差異

次に本節では、教育の質保証の取組の実態についてみていきたい。先述のように、学生が入学時点で学習面での問題を抱えていることを前提としている分、ボーダーフリー大学における教育の質保証は容易なことではない。そうした状況下にあって、ボーダーフリー大学は教育の質保証にどの程度積極的に取り組んでいるのだろうか。本調査では、「貴学部では、教育の質保証にどの程度積極的に取り組んでおられますか」とたずね、「積極的に取り組んでいない」から「積極的に取り組んでいる」までの4つの選択肢の中から回答を求めた。

その結果をみると、ボーダーフリー大学に該当する2群では「積極的に取り組んでいる」に「どちらかといえば積極的に取り組んでいる」を合わせた肯定的な回答の割合は7割台であるが、「100%以上」群でも大差はないことが確認できた（「80%未満」群：77.9%、「80%以上100%未満」群：70.7%、「100%以上」群：73.4%、 $p>0.05$ ）。

それでは、ボーダーフリー大学では教育の質保証はどの程度実現できているのだろうか。

本調査では、「貴学部では、教育の質保証がどの程度実現できているとお考えですか」とたずね、「かなり実現できていない」から「かなり実現できている」までの4つの選択肢の中から回答を求めた。

その結果をみると、ボーダーフリー大学に該当する2群のうち「80%以上 100%未満」群では「かなり実現できている」に「どちらかといえば実現できている」を合わせた肯定的な回答の割合は6割と最も高いのだが、一方の「80%未満」群では3割台に留まっており、有意な差も確認できた（「80%未満」群：35.3%、「80%以上 100%未満」群：61.4%、「100%以上」群：56.2%、 $p < 0.05$ ）。

このように、教育の質保証に積極的に取り組んでいるか否かは、定員割れしているか否か、定員割れが深刻か否かによって大きくは変わらないようである。しかし、教育の質保証が実現できているか否かは、定員割れしているか否かではなく、定員割れが深刻か否かによって大きく変わってくるようであり、定員割れが深刻なほど実現できていないようである。なお、こうした結果に基本的属性が影響しているか検討してみたが、偏差値や学部系統による大きな影響は確認できなかった⁷⁾。こうした結果は、定員割れが深刻なほど、教育の質保証の難易度が高まることを示唆している。

(2) 教育の質保証に対する意識

このような教育の質保証の取組の実態は、当該学部における教育の質保証に対する意識を少なからず反映しているのではないかと考えられる。そこで本調査では、「大衆化した大学における教育の質保証に関する以下のような意見について、どのようにお考えになりますか。貴学部における教育の質保証の現状等をふまえた上でお答えください」とたずね、「反対」から「賛成」までの4つの選択肢の中から回答を求めた。その結果を示したのが表6である。

これをみると、ボーダーフリー大学に該当する2群では、「教育の質保証に積極的に取り組まなければならない」といういわゆる総論については、「賛成」に「どちらかといえば賛成」を合わせた肯定的な回答の割合が9割台後半にまで及んでいるが、各論については「教育の質保証を実現するためには、出口管理の強化を行うべきである」でその割合が8割程度であることを除けば、半数にも満たないものがほとんどであることが確認できる。

また、多くの項目については「100%以上」群でも大差はないが、「教育の質保証を実現するためには、教員の研究にけるエフォートはできる限り小さくすべきである」と「教育の質保証を実現するためには、教育活動のみを職務とする教育専従教員が必要である」については有意な差が確認できる。すなわち、前者については、ボーダーフリー大学に該当する2群では3割程度と「100%以上」群よりも高く、後者については、それに該当する2群のうち「80%未満」群では6割を超え最も高く、一方の「80%以上 100%未満」群、そして「100%以上」群より2割も高い。

このように、教育の質保証に対する意識のありようは、いわゆる総論については定員割れしているか否か、定員割れが深刻か否かによって大きくは変わらないようである。しかし、教員のエフォート管理に対する賛否や教育専従教員の必要性に対する賛否といった各論については、それらによって大きく変わってくるようである。

表 6 教育の質保証に関する以下のような意見について、どのように考えるか

	全体	80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	
教育の質保証に積極的に 取り組まなければならない	95.0%	95.6%	98.2%	94.0%	
教育の質保証を実現するためには、 出口管理の強化を行うべきである	79.5%	79.4%	85.7%	77.9%	
教育の質保証を実現するためには、 第三者機関によって「何を」「どこまで」 というような基準が定められるべきである	34.9%	23.9%	50.0%	34.1%	
教育の質保証を実現するためには、 大学の種別化・機能分化を行うべきである	25.7%	25.0%	36.4%	22.8%	
教育の質保証を実現するためには、 教員の研究にかけるエフォートは できる限り小さくすべきである	19.9%	25.8%	30.4%	15.6%	**
教育の質保証を実現するためには、 教育活動のみを職務とする 教育専従教員が必要である	48.8%	65.7%	44.6%	45.0%	**
十分な支援を行ったとしても一定の基準を 満たせない学生は出てしまうため、 教育の質保証は厳格に考えるべきではない	39.1%	38.8%	27.3%	42.4%	

注：値は肯定的な回答の割合。

5. 教育の質保証の実現に資する各種取組の実態

(1) 明確で具体的な到達目標の設定とその教員間での共有の実態

次に本節では、教育の質保証の実現に資すると考えられる各種取組の実態についてみていきたい。ボーダーフリー大学は学習面での問題を抱えている学生を多く受け入れている関係もあり、卒業時における到達目標についての「何を」「どこまで」というような共通のイメージが教員間で共有されにくい状況にある（葛城，2015）。そうしたイメージが教員間で共有されていなければ、教育の質保証の実現に資する各種取組を行ったとしても、その教育効果が最大化されることはないだろう。この点に鑑みれば、ボーダーフリー大学にお

ける教育の質保証を実現する上での大前提として、卒業時における明確で具体的な到達目標を設定した上で、それが教員間で共有されていることは、非常に重要であると考える。

そこで本調査では、「貴学部では、卒業生に最低限身につけさせるべき知識・技能・態度等について、明確で具体的な基準（例えば、建学の精神や教育理念、DP 等の内容をより明確で具体的なレベルにまで落とし込んだような基準）が学内向けに⁸⁾設定されていますか」とたずね、以下に示す項目のそれぞれについて、「設定されていない」と「設定されている」の選択肢の中から回答を求めた。また、「設定されている」と回答した回答者に対し、「それはどの程度の教員に共有されていますか。印象で結構ですので、貴学部の教員全体に占めるおおよその割合をお書きください」とたずね、実数での回答を求めた。その結果を示したのが表7・8である。

まず表7をみると、ボーダーフリー大学に該当する2群では「所属学部で学ぶ上で必要となる基礎学力」、「基礎的な教養・知識・技能」、「専門分野の基礎的な知識・技能」については「設定されている」との回答の割合は総じて4割台後半から5割台と相対的に高いのに対し、「学習習慣や学習レディネス」、「社会に出しても恥ずかしくない態度」についてはその割合は総じて4割程度と相対的に低いことが確認できる。ただし、いずれの項目についても「100%以上」群でも大差はない。

また表8をみると、ボーダーフリー大学に該当する2群のうち「80%以上100%未満」群では平均値が8割程度であるのに対し、一方の「80%未満」群では総じて6割台に留まっており、特に「専門分野の基礎的な知識・技能」、「学習習慣や学習レディネス」、「社会に出しても恥ずかしくない態度」では有意な差も確認できる。なお、こうした結果に基本的属性が影響しているか検討してみたが、偏差値や学部系統による大きな影響は確認できなかった⁷⁾。こうした結果は、定員割れが深刻なほど、卒業時における明確で具体的な到達目標（特に学習習慣や学習レディネス、社会に出しても恥ずかしくない態度等）を教員間で共有することが容易ではない可能性を示唆している。

このように、卒業生に最低限身につけさせるべき知識・技能・態度等について、明確で具体的な基準が学内向けに設定されているか否かは、定員割れしているか否か、定員割れが深刻か否かによって大きくは変わらないようである。しかし、そうした基準が設定されている場合、それが教員間で共有されている割合は、専門分野の基礎的な知識・技能、学習習慣や学習レディネス、社会に出しても恥ずかしくない態度については、定員割れが深刻か否かによって大きく変わってくるようであるが、定員割れが深刻なほど共有されていないようである。

表7 卒業生に最低限身につけさせるべき知識・技能・態度等について、
明確で具体的な基準が学内向けに設定されているか

	全体	80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	
所属学部で学ぶ上で必要となる基礎学力	51.5%	45.6%	59.6%	50.9%	
基礎的な教養・知識・技能	51.7%	47.1%	59.6%	50.9%	
専門分野の基礎的な知識・技能	57.6%	52.9%	68.4%	56.0%	
学習習慣や学習レディネス	32.9%	38.8%	40.4%	28.8%	
社会に出しても恥ずかしくない態度	36.8%	36.8%	45.6%	34.1%	

注：値は「設定されている」の割合。

表8 設定されている場合、それはどの程度の教員に共有されているか

	全体	80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	
所属学部で学ぶ上で必要となる基礎学力	75.1%	73.0%	78.6%	74.7%	
基礎的な教養・知識・技能	74.2%	68.7%	78.5%	74.5%	
専門分野の基礎的な知識・技能	75.9%	68.9%	83.4%	75.6%	*
学習習慣や学習レディネス	71.4%	61.9%	78.6%	72.8%	*
社会に出しても恥ずかしくない態度	77.8%	64.4%	85.4%	79.8%	***

注：値は平均値。

(2) 到達目標の達成に有効な取組を促す教員への働きかけの実態

さて、卒業時における明確で具体的な到達目標を設定した上で、それが教員間で共有されてさえいれば、後は各教員がそれを意識しながら自発的に教育活動に積極的に取り組んでくれるというわけでは必ずしもない。すなわち、設定した到達目標を達成する上で有効な取組を行うよう、教員に働きかける必要がある。ボーダーフリー大学では学習面での問題を抱えている学生を多く受け入れていることに鑑みれば、そうした学生でも学習するように促す取組は、設定した到達目標を達成する上で有効な取組として特に重要であると考えられる。そこで本調査では、「貴学部では、教員に対して以下のような取組を行うよう、どの程度働きかけていますか」とたずね、学習面での問題を抱えているボーダーフリー大学生でも学習するように促すためのポイント（葛城，2015）⁹⁾を考慮した上で設定した以下に示す項目のそれぞれについて、「働きかけていない」から「働きかけている」までの4つの選択肢の中から回答を求めた。その結果を示したのが表9である。

これをみると、ボーダーフリー大学に該当する2群では、「働きかけている」に「どちらかといえば働きかけている」を合わせた肯定的な回答の割合は総じて7割台後半から8割台であるが、「100%以上」群でも大差はないことが確認できる。ただし、「学生が授業中に自分の意見や考えを述べる機会を積極的に設けること」については、ボーダーフリー大学

に該当する 2 群のうち「80%未満」群では 9 割近くにまで及んでおり、これは一方の「80%以上 100%未満」群、そして「100%以上」群より 1 割ほど高く、有意な差も確認できる。

このように、学習面での問題を抱えている学生でも学習するように促す取組を行うよう教員に働きかけているか否かは、学生が授業中に自分の意見や考えを述べる機会を積極的に設ける取組については、定員割れしているか否かではなく、定員割れが深刻か否かによって大きく変わってくるようであり、定員割れが深刻なほど働きかけているようである。

表 9 教員に対して以下のような取組を行うよう、どの程度働きかけているか

	全体	80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	
各授業での学びが学生にとって どのような意味があるのか十分説明すること	81.0%	83.8%	82.5%	79.6%	
学生が授業中に自分の意見や考えを 述べる機会を積極的に設けること	81.9%	88.4%	77.6%	80.9%	*
学生が授業に参加するグループワーク などの機会を積極的に設けること	83.9%	85.5%	78.9%	84.6%	
学生の授業外学修を促進する機会 (課題など)を積極的に設けること	84.1%	85.5%	85.7%	83.3%	
適切なコメントを付して課題などの 提出物を返却すること	69.7%	78.3%	66.7%	67.7%	
一定の知識・技能等が身につけているか どうかに基づき成績評価すること	85.6%	87.0%	91.2%	83.7%	

注：値は肯定的な回答の割合。

(3) 教員の教育活動への動機づけを高める取組の実態

ここで留意しておきたいのは、学習面での問題を抱えている学生でも学習するように促す取組を行うよう教員に働きかけることは、教員の負担増にも直結する話であるということである（葛城，2018）。このことは、ただでさえ教育活動に多くの時間を費やしており、多忙を極めていくボーダーフリー大学に所属する教員に対し、さらに教育活動に積極的に取り組むよう期待することを意味する。それを期待するのであれば、教員の教育活動への動機づけを高める取組を行う必要があるだろう。以下では、①教員の教育活動に対する評価の重視、②教員の教育にかけるエフォート管理、③待遇上の直接的な配慮、といった 3 つの取組を取り上げる。

①教員の教育活動に対する評価の重視の実態

教員の教育活動に対する評価の重視については、本調査では、「貴学部では、教員の活動を評価する際に、もっとも重視されるのはどのような活動ですか」とたずね、以下に示す項目のそれぞれについて、「教育活動」、「研究活動」、「大学管理・運営に関する活動」、「社会貢献・連携に関する活動」の選択肢の中から回答を求めた。その結果を示したのが表 10

である。

これをみると、ボーダーフリー大学に該当する2群でも、「採用の際」、「任期更新／昇任人事の際」には、「教育活動」よりも「研究活動」の方が重視されているが、「一定期間ごとの評価の際」には、「研究活動」よりも「教育活動」の方が重視されていることが確認できる。ただし、いずれの項目についても「100%以上」群でも大差はない。

表 10 教員の活動を評価する際に、もっとも重視されるのはどのような活動か

		全体	80%未満	80%以上 100%未満	100%以上
採用の際	教育活動	30.5%	31.6%	45.8%	26.1%
	研究活動	68.8%	68.4%	54.2%	72.7%
任期更新／昇任人事の際	教育活動	25.6%	25.9%	37.8%	22.5%
	研究活動	70.7%	68.5%	62.2%	73.4%
一定期間ごとの評価の際	教育活動	46.7%	53.1%	59.1%	41.3%
	研究活動	39.3%	28.6%	29.5%	45.3%

注：値は「教育活動」と「研究活動」の割合。

②教員の教育にかかるエフォート管理の実態

教員の教育にかかるエフォート管理については、本調査では、「貴学部では、教員の教育にかかるエフォートに一定の基準を設けていますか」とたずね、「設けていない」と「設けている」の選択肢の中から回答を求めた。

その結果をみると、ボーダーフリー大学に該当する2群では「設けている」との回答の割合はかなり低いのだが（特に「80%未満」群）、「100%以上」群でも大差はないことが確認できた（「80%未満」群：1.4%、「80%以上 100%未満」群：12.3%、「100%以上」群：7.3%、 $p>0.05$ ）。

なお、教員の教育にかかるエフォートが100%の教員、すなわち、教育活動のみを職務とする教育専任教員のことについても触れておこう。本調査では、「貴学部には、教育活動のみを職務とする教育専任教員（講師以上）はおられますか」とたずね、「いない」と「いる」の選択肢の中から回答を求めた。

その結果をみると、ボーダーフリー大学に該当する2群では「いる」との回答の割合は2割程度であるが、「100%以上」群でも大差はないことが確認できた（「80%未満」群：17.4%、「80%以上 100%未満」群：24.1%、「100%以上」群：12.2%、 $p>0.05$ ）。

③待遇上の直接的な配慮の実態

待遇上の直接的な配慮については、本調査では、「貴学部では、教員の教育活動への積極的な取組を促すために、以下のような取組を行っていますか」とたずね、「行っていない」と「行っている」の選択肢の中から回答を求めた。その結果を示したのが表11である。

これをみると、ボーダーフリー大学に該当する2群のうち「80%以上 100%未満」群で

は「給与（賞与等含む）の増額／減額」と「個人研究費の増額／減額」を「行っている」との回答の割合が3割程度と最も高いのに対し、一方の「80%未満」群，そして「100%以上」群ではその半数にも及ばず，有意な差が確認できる。なお，こうした結果に基本的属性が影響しているか検討してみたが，偏差値や学部系統による大きな影響は確認できなかった⁷⁾。こうした結果は，定員割れが深刻なほど，待遇上の直接的な配慮として給与や個人研究費の増額／減額を行うことが容易ではない可能性を示唆している。

表 11 教員の教育活動への積極的な取組を促すために，以下のような取組を行っているか

	全体	80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	
給与(賞与等含む)の増額／減額	16.3%	13.0%	32.1%	13.3%	**
個人研究費の増額／減額	16.9%	10.3%	30.9%	15.1%	**
業務の負担減／負担増	16.7%	17.6%	16.4%	16.5%	

注：値は「行っている」の割合。

このように，教員の教育活動への動機づけを高める取組を行っているか否かは，教員の教育活動に対する評価の重視や教員の教育にかけるエフォート管理については，定員割れしているか否か，定員割れが深刻か否かによって大きくは変わらないようである。しかし，待遇上の直接的な配慮のうち，給与や個人研究費の増額／減額については，定員割れしているか否かではなく，定員割れが深刻か否かによって大きく変わってくるようであるが，定員割れが深刻なほど行っていないようである。

6. おわりに

本稿では，ボーダーフリー大学における教育の質保証のための各種取組の進捗状況等の把握を主目的とする，学部長を対象としたアンケート調査に基づき，ボーダーフリー大学における教育の質保証の実態について検討を行ってきた。本稿で得られた主要な知見は以下の通りである。

第一に，学習面での問題を抱えている入学生の割合は，定員割れが深刻か否かによって大きくは変わらないようであるが，学習面での問題の背景に障害等の理由が疑われるような学生の割合は，それが深刻か否かによって大きく変わってくるようであり，深刻なほど高くなることが確認された。

第二に，教育の質保証に積極的に取り組んでいるか否かは，定員割れが深刻か否かによって大きくは変わらないようであるが，教育の質保証が実現できているか否かは，それが深刻か否かによって大きく変わってくるようであり，深刻なほど実現できていないことが確認された。

第三に、教育の質保証の実現に資する各種取組を行っているか否かは、定員割れが深刻か否かによって大きくは変わらない取組も多く、それが深刻か否かによって大きく変わってくるような取組があっても、深刻なほどそれを行っているわけでは必ずしもないことが確認された。

これらの知見のうち、定員割れが深刻なほど教育の質保証の実現に資する各種取組を行っているわけでは必ずしもないという第三の知見は非常に興味深い。この知見からは、定員割れが深刻なボーダーフリー大学では、そうした取組を行うことが容易ではない可能性がうかがえる。それは、そうした取組を行う必要性が認識されていないからなのか。それとも、必要性が認識されていたとしても、それを行うだけの余力はもはや残されていないからなのか、あるいは、目先の課題に追われてそれどころではないからなのか。本稿の分析からその判断はできかねるので、この点については今後の検討課題にしたいと考える。

最後に、本稿で示した結果を解釈する際に留意すべき点を挙げて、本稿を締め括ることとしたい。もっとも留意すべき点は、本稿で示した結果が実態よりも上振れしている可能性があるという点である。すなわち、本調査票にはデータ整理の関係から ID を付記していたのだが、これが回答者に実態以上によりよくみせようという心理を働かせてしまった可能性は否定できない。また、回答率が3割に満たず、教育の質保証に関心がない学部やそれに積極的に取り組んでいない学部はそもそも回答していない可能性も否定できない。

しかし、先述のように、ボーダーフリー大学はこれまであまり研究対象とされておらず、教育を提供する大学側の意識・実態に関する知見があまり蓄積されていない現状に鑑みれば、本稿で示した結果には一定の意義があるだろう。上記の点に十分留意した上で今後の分析を進め、ボーダーフリー大学における教育の質保証に資する実践的な施策に寄与する知見を提供できればと考える。

【注】

- 1) 「ボーダーフリー大学」という用語自体は、そもそも河合塾による大学の格付けにおいて、通常の入試難易度がつけられない大学の意味で用いられている。
- 2) 居神（2013）も、「「マージナル大学」[ボーダーフリー大学に概ね相当すると考えられる分類概念]という「周辺」分野に生じている現象こそが、そもそも「大学とは何か」という「中心的」かつ「本質的」課題を象徴的に示している」（100-101頁、角括弧内は筆者）と指摘している。
- 3) 定員充足率は、『大学の真の実力 情報公開 BOOK』（旺文社）に掲載されている1年次入試における学部の入学定員数を、同じ冊子に掲載されている1年次入試における学部の入学者総数で除することで、単年度の定員充足率を算出している。単年度の定員充足率は変動しやすいため、2017年度用の同冊子で2016年度の定員充足率を、2018年度

用の同冊子で2017年度の定員充足率を算出し、その平均値を用いている。なお、80%を基準にしているのは、経営上の採算ラインの目安とされているからである。

- 4) 開設時期については、小川(2016)に基づき分類している。なお、「急増期以前」は1968年以前、「抑制期」は1969～1985年、「臨定期」は1986～2005年、「再抑制期」は2006年以後である。偏差値については、『2018年版 大学ランキング』に基づき分類している。なお、表中の「BF」は「ボーダー・フリー」の意であるが、本稿で定義するボーダーフリー大学と同義でないことには留意されたい。学部系統については、『今日の私学財政』(日本私立学校振興・共済事業団広報)を参考に分類している。
- 5) 実数での回答を求めた問いについては平均値の差の検定、選択肢の中から回答を求めた問いについてはカイ二乗検定による。
- 6) 上記の問いのように実数での回答を求めなかったのは、特に障害等の理由が疑われるような学生については、概数であれ実数での回答の方が難しいと判断したからである。
- 7) 具体的には、偏差値については、ボーダーフリー大学に該当する2群で差の大きな「BF」のサンプルのみで同様の分析を行った。また、「42.5」以上のサンプルを除いて同様の分析を行った。学部系統については、両群で差の大きな「人文科学系」と「保健系」のサンプルを交互に除いて同様の分析を行った。しかし、いずれについても、ボーダーフリー大学に該当する2群においては、本文で示した結果と概ね同様の傾向がみられた。
- 8) 「学内向けに」としたのは、学外にも公表されるような基準では、いわゆる「大学」らしからぬ基準を設定することが難しいと考えたからである。
- 9) 葛城(2015)は、ボーダーフリー大学生の授業外学習時間を規定する要因に関する先行研究の知見に基づき、学習面での問題を抱えている当該大学生でも学習するように促すためのポイントとして、学習習慣や学習レディネスをしっかりと身につけさせるべく意識的に取り組むこと、「相互作用型授業」を積極的に取り入れること、授業の意味を学生に十分認識させること、の3点を挙げている。

第2章 学部系統による教育の質保証の実態の差異

葛城 浩一
(香川大学)

1. はじめに

「ボーダーフリー大学」とは、「受験すれば必ず合格するような大学、すなわち、事実上の全入状態にある大学」のことである¹⁾。こうした大学は、入試による選抜機能が働かないため、基礎学力や学習習慣、学習への動機づけの欠如といった、早ければ小学校段階から先送りされてきた学習面での問題を抱えている学生を多く受け入れている。学生が入学時点でそうした学習面での問題を抱えていることを前提としている分、ボーダーフリー大学で学士課程教育の質を保証すること（以下、教育の質保証）は容易なことではない。

だからこそ、国際的にも教育の質保証が求められている現状において、日本の高等教育の裾野に位置するボーダーフリー大学における教育の質保証について考えることは、極めて重要である。さらには、ボーダーフリー大学には日本の高等教育（特に大学）が抱えている問題が凝縮されて顕在化している²⁾ことに鑑みれば、ボーダーフリー大学における教育の質保証について考えることは、日本の高等教育における教育の質保証について問い直すことになるという意味においても、極めて重要である。なお、保証すべき質の対象には様々な要素があると考えられるが、本稿ではそれを「学生の学習の水準」とであると定義する。すなわち、本稿でいう教育の質保証とは、「学習成果として定めた知識の理解度や技能の習得度を、一定以上確保すること」（川嶋，2013，10頁）を意味する。

このように、ボーダーフリー大学における教育の質保証について考えることは極めて重要であるが、そこに焦点を当てた研究は管見の限り葛城の一連の研究のみである（葛城，2017等）。そもそもボーダーフリー大学自体、これまで研究対象として扱われることはほとんどなかった。山田（2009）も指摘するように、「[日本の] 大学研究の視点は、旧来のエリート大学、すなわち現在の研究大学を中心にしたもの」（33頁、角括弧内は筆者）なのである。近年、ボーダーフリー大学を研究対象とした先行研究も散見されるようになってきてはいるが、「その限られた研究成果は就職活動を含めた職業選択と大学生活に関するものに大別できる」（三宅，2014，9頁）という指摘からもうかがえるように、その先行研究の多くはそこに所属する学生（以下、ボーダーフリー大学生）を分析対象としたものである。すなわち、教育を提供される学生側の意識・実態に関する知見は蓄積されつつあるが、教育を提供する大学側の意識・実態に関する知見はあまり蓄積されていない。ボーダーフリー大学における教育の質保証について考える上でも、特に後者の知見の蓄積は非常

に重要である。

このような先行研究の現状をふまえた上で、前章では、ボーダーフリー大学における教育の質保証のための各種取組の進捗状況等の把握を主目的とする、学部長を対象としたアンケート調査に基づき、ボーダーフリー大学における教育の質保証の実態について明らかにした。回答状況は学部系統によって少なからず異なることは想像に難しくなく、特に社会科学系はその他の学部系統に比べ、教育の質保証がより困難であることを示唆する知見(葛城, 2013)³⁾も得られている。しかし、前章の目的がまずは定員充足率に基づく回答状況を把握することであったため、そこでは学部系統による差異に着目した分析まで行うことはしなかった。

そこで本稿では、前章と同様の分析を学部系統による差異に着目して行うことで、ボーダーフリー大学における教育の質保証の実態が学部系統によってどの程度異なるのか明らかにする。それらを通して、ボーダーフリー大学における教育の質保証に資する実践的な施策に寄与しうる知見を提供したいと考える。

2. 調査の方法

本稿で使用するデータは、平成 29～31 年度科学研究費補助金基盤研究 (C)「ユニバーサル化時代における学士課程教育の質保証の実現可能性に関する研究」(研究代表者:葛城浩一)及び広島大学高等教育研究開発センターの研究プロジェクト「大衆化大学における学士課程教育の質保証のあり方に関する総合的研究」(研究代表者:葛城浩一)の一環として実施した「ユニバーサル化時代における学士課程教育の質保証に関する調査」である。

この調査は、中堅以下の大学(学部)の学部長(具体的には、『2018 年版 大学ランキング』(朝日新聞出版)に基づく偏差値 50 未満の学部の学部長)を対象として、2017 年 11 月から 2018 年 3 月にかけて実施した。回答者数は 350 名であり、配布数を母数とした回答率は 25.3%であった。分析対象者の概要は表 1 に示す通りである⁴⁾。

表 1 分析対象者の概要

	全体	定員充足率				偏差値						
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100% 以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5
回答者数	350	10	59	58	222	64	73	61	44	51	30	26
回答率	25.3%	27.8%	28.9%	23.1%	24.9%	30.0%	27.8%	24.5%	22.6%	26.6%	21.6%	19.7%
学部系統												
	歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
回答者数	3	10	62	35	2	51	103	13	22	2	7	39
回答率	23.1%	27.8%	33.5%	32.1%	18.2%	27.3%	25.1%	18.6%	27.8%	20.0%	12.5%	18.1%

さて、本稿では、学部系統による差異に着目するわけであるが、表1からもわかるように、サンプルが一定数確保されているのは限られた学部系統しかない。そこで本稿では、ボーダーフリー大学に相当する定員充足率 100%未満の学部が相対的に多く⁵⁾、かつサンプル数が十分とはいえないまでも相対的に多く得られている社会科学系に着目して分析を行う。なお、先述のように、社会科学系ではその他の学部系統に比べ、教育の質保証がより困難であることを示唆する知見（葛城，2013）も得られている。また、社会科学系の相対的な特徴を明らかにするために、サンプルが一定数確保されている、保健系、理・工学系、人文科学系といった学部系統との群間比較を行う。

できることなら定員割れの状況まで考慮した分析を行いたいところではあるが、ただでさえ十分とはいえないサンプルを定員充足率によって細分化して分析を行うことには限界がある。そのため本稿では、定員充足率 100%未満⁶⁾のサンプルを一括りにして分析を行うこととする。各群のサンプル数は、社会科学系が 38 名（うち、定員充足率 80%未満 19 名）、保健系が 16 名（うち、定員充足率 80%未満 6 名）、理・工学系が 13 名（うち、定員充足率 80%未満 6 名）、人文科学系が 22 名（うち、定員充足率 80%未満 18 名）である。特に人文科学系のサンプルには定員割れが深刻なものが多く含まれていることには留意したい。

3. 学習面での多様性の問題の実態

(1) 学習面での問題を抱えている学生の実態

まず本節では、ボーダーフリー大学が抱えている学習面での多様性の問題の実態についてみていきたい。先述のように、ボーダーフリー大学は、基礎学力や学習習慣、学習への動機づけの欠如といった、学習面での問題を抱えている学生を多く受け入れている。そこで本調査では、「貴学部では、以下のような学習面での問題を抱えている入学者をどの程度受け入れておられますか。印象で結構です⁷⁾ので、貴学部の入学者全体に占めるおおよその割合をお書きください」とたずね、以下に示す項目のそれぞれについて、実数での回答を求めた。その結果を学部系統別に示したのが表2である。

これをみると、社会科学系ではその平均値は「所属学部で学ぶ上で必要となる基礎学力の著しい欠如」については2割程度、「学習習慣や学習レディネスの著しい欠如」と「学習への動機づけの著しい欠如」については3割程度であることが確認できる。また、他の学部系統と比較すると、社会科学系の値は相対的に高く、「学習への動機づけの著しい欠如」については有意傾向が見受けられる。しかし、「所属学部で学ぶ上で必要となる基礎学力の著しい欠如」と「学習習慣や学習レディネスの著しい欠如」についてはそれも見受けられないことから、学部系統による大きな差はないと考えられる。

表2 以下のような学習面での問題を抱えている入学者をどの程度受け入れているか

	社会科学系	保健系	理・工学系	人文科学系	
所属学部で学ぶ上で必要となる基礎学力の著しい欠如	19.1%	17.5%	18.8%	18.1%	
学習習慣や学習レディネスの著しい欠如	28.8%	19.1%	20.8%	20.8%	
学習への動機づけの著しい欠如	28.9%	18.1%	21.4%	15.3%	†

注：***は $p < 0.001$ ，**は $p < 0.01$ ，*は $p < 0.05$ ，†は $p < 0.1$ 。以下同様⁷⁾。値は平均値。

さて、こうした学習面での問題の背景には、障害等の理由が疑われるような学生も一定数存在していると考えられる。そこで本調査では、「問1（上記の問い）のような学習面での問題の背景に、障害等の理由が疑われるような学生はどの程度おられますか。印象で結構ですので、貴学部の入学者全体に占めるおおよその割合をお答えください」とたずね、以下に示す選択肢の中から回答を求めた⁸⁾。その結果を学部系統別に示したのが表3である。

これをみると、社会科学系では高い割合の選択肢での回答が多く、11%以上との回答は2割を超えていることが確認できる。しかし、他の学部系統と比較すると、社会科学系の回答は高い割合の選択肢で相対的に多いものの、有意傾向すら見受けられないことから、学部系統による大きな差はないと考えられる。

表3 学習面での問題の背景に、障害等の理由が疑われるような学生はどの程度いるか

	社会科学系	保健系	理・工学系	人文科学系	
0%	2.7%	6.7%	7.7%	4.5%	
1～5%	56.8%	66.7%	69.2%	63.6%	
6～10%	18.9%	6.7%	15.4%	22.7%	
11～15%	5.4%	13.3%	7.7%	4.5%	
16～20%	5.4%	0.0%	0.0%	4.5%	
21～25%	2.7%	6.7%	0.0%	0.0%	
26%～	8.1%	0.0%	0.0%	0.0%	

このように、学習への動機づけが著しく欠如している入学生の割合は、学部系統によって大きく異なる可能性があり、特に社会科学系では多く受け入れている可能性がある。しかし、所属学部で学ぶ上で必要となる基礎学力や、学習習慣や学習レディネスが著しく欠如している入学生の割合や、学習面での問題の背景に障害等の理由が疑われるような学生の割合は、学部系統によって大きくは異ならないようである。

(2) 学習面での多様性の問題への対応の実態

さて、ボーダーフリー大学には（程度差はあれ）学習面での問題を抱えている学生ばかりが集まっているようなイメージを持ちがちであるが、現実はそのようではない。ボーダーフリー大学にそうした学生が集まっていることは確かであるが、そこには学習面で比較的優秀な学生も少なからず存在している。そのため、ボーダーフリー大学では、学習面での問題を抱えている学生から学習面で比較的優秀な学生にいたるまで、学習面での多様性の問題への対応が求められる。そこで本調査では、「貴学部では、基礎学力等の学習面での多様性の問題に対応するために、以下のような取組を行っていますか」とたずね、以下に示す項目のそれぞれについて、「行っていない」と「行っている」の選択肢の中から回答を求めた。その結果を学部系統別に示したのが表4である。

これをみると、社会科学系では「学習面で問題を抱えている学生が対象／主対象」の取組よりも「学習面で優秀な学生が対象／主対象」の取組の方が行われていることが確認できる。すなわち、「行っている」との回答の割合は、前者については、「授業（補習授業以外）」と「プログラム（正課外を含む）」が3割台前半、「補習授業（単位あり）」が2割台後半であるのに対し、後者については、「授業」が3割台後半、「プログラム（正課外を含む）」が4割台後半に及んでいる。また、他の学部系統と比較すると、（社会科学系よりも）理・工学系の値は高く、「学習面で問題を抱えている学生が対象／主対象」の「授業（補習授業以外）」、「学習面で優秀な学生が対象／主対象」の「授業」と「プログラム（正課外を含む）」については有意な差が確認できる。しかし、「学習面で問題を抱えている学生が対象／主対象」の「補習授業（単位あり）」と「プログラム（正課外を含む）」については有意傾向すら見受けられないことから、学部系統による大きな差はないと考えられる。

このように、学習面で問題を抱えている学生への対応のうち、授業については学部系統によって大きく異なるようであり、特に理・工学系では多く行われているようである（補

表4 学習面での多様性の問題に対応するために、以下のような取組を行っているか

		社会科学系	保健系	理・工学系	人文科学系	
学習面で問題を抱えている学生が対象／主対象	授業（補習授業以外）	34.2%	40.0%	61.5%	9.1%	*
	補習授業（単位あり）	26.3%	33.3%	53.8%	18.2%	
	プログラム（正課外を含む）	32.4%	46.7%	46.2%	31.8%	
学習面で優秀な学生が対象／主対象	授業	36.8%	0.0%	38.5%	18.2%	*
	プログラム（正課外を含む）	47.4%	7.1%	61.5%	31.8%	*

注：値は「行っている」の割合。

習授業やプログラムについては学部系統によって大きくは異なるようである)。一方、学習面で優秀な学生への対応は、学部系統によって大きく異なるようであり、こちらについても特に理・工学系では多く行われているようである。

(3) 学習面での問題を克服できないまま卒業する学生の実態

以上みてきたように、ボーダーフリー大学では、学習面での問題を抱えている学生を多く受け入れており、そうした学生が対象／主対象の取組を行っているようであるが、早ければ小学校段階から先送りされてきた学習面での問題を克服させるのは容易なことではない。そこで本調査では、「貴学部では、以下のような学習面での問題を克服できないまま卒業する学生はどの程度おられますか。印象で結構です」ので、貴学部の入学者全体に占めるおおよその割合をお書きください」とたずね、以下に示す項目のそれぞれについて、実数での回答を求めた。その結果を学部系統別に示したのが表5である。

これをみると、社会科学系ではその平均値は「所属学部で学ぶ上で必要となる基礎学力の著しい欠如」については1割台前半、「学習習慣や学習レディネスの著しい欠如」については1割台後半であることが確認できる。しかし、他の学部系統と比較すると、社会科学系の値は相対的に高いものの、いずれの項目についても有意傾向すら見受けられないことから、学部系統による大きな差はないと考えられる。

このように、学習面での問題を克服できないまま卒業する学生の割合は、学部系統によって大きくは異なるようである。

表5 以下のような学習面での問題を克服できないまま卒業する学生はどの程度いるか

	社会科学系	保健系	理・工学系	人文科学系	
所属学部で学ぶ上で必要となる 基礎学力の著しい欠如	13.2%	12.4%	8.2%	10.9%	
学習習慣や学習レディネスの著しい欠如	17.6%	13.3%	11.1%	11.1%	

注：値は平均値。

4. 教育の質保証の取組の実態

(1) 教育の質保証の取組状況と実現状況の実態

次に本節では、教育の質保証の取組の実態についてみていきたい。先述のように、学生が入学時点で学習面での問題を抱えていることを前提としている分、ボーダーフリー大学における教育の質保証は容易なことではない。そうした状況下にあって、ボーダーフリー大学は教育の質保証にどの程度積極的に取り組んでいるのだろうか。本調査では、「貴学部では、教育の質保証にどの程度積極的に取り組んでおられますか」とたずね、「積極的に取り組んでいない」から「積極的に取り組んでいる」までの4つの選択肢の中から回答を求

めた。

その結果をみると、社会科学系では「積極的に取り組んでいる」に「どちらかといえば積極的に取り組んでいる」を合わせた肯定的な回答の割合は7割台前半に及んでいることが確認できた(73.0%)。しかし、他の学部系統と比較すると、社会科学系の割合は相対的に高い方ではあるものの、有意傾向すら見受けられなかった(保健系:75.0%, 理・工学系:38.5%, 人文科学系:63.6%, $p>0.1$)ことから、学部系統による大きな差はないと考えられる。

それでは、ボーダーフリー大学では教育の質保証はどの程度実現できているのだろうか。本調査では、「貴学部では、教育の質保証がどの程度実現できているとお考えですか」とたずね、「かなり実現できていない」から「かなり実現できている」までの4つの選択肢の中から回答を求めた。

その結果をみると、社会科学系では「かなり実現できている」に「どちらかといえば実現できている」を合わせた肯定的な回答の割合は4割にも満たないことが確認できた(39.5%)。また、他の学部系統と比較すると、社会科学系の割合は相対的に高いものの、有意傾向すら見受けられなかった(保健系:35.7%, 理・工学系:38.5%, 人文科学系:36.4%, $p>0.1$)ことから、学部系統による大きな差はないと考えられる。

このように、教育の質保証に積極的に取り組んでいるか否か、また、教育の質保証が実現できているか否かは、学部系統によって大きくは異なるようである。

(2) 教育の質保証に対する意識

このような実態は、当該学部における教育の質保証に対する意識を少なからず反映しているのではないかと考えられる。そこで本調査では、「大衆化した大学における教育の質保証に関する以下のような意見について、どのようにお考えになりますか。貴学部における教育の質保証の現状等をふまえた上でお答えください」とたずね、「反対」から「賛成」までの4つの選択肢の中から回答を求めた。その結果を学部系統別に示したのが表6である。

これをみると、社会科学系では「教育の質保証に積極的に取り組まなければならない」といういわゆる総論については、「賛成」に「どちらかといえば賛成」を合わせた肯定的な回答の割合が9割台後半にまで及んでいるが、各論については「教育の質保証を実現するためには、出口管理の強化を行うべきである」でその割合が8割台後半であることを除けば、半数にも満たないものがほとんどであることが確認できる。また、他の学部系統と比較すると、「教育の質保証を実現するためには、出口管理の強化を行うべきである」については、(社会科学系をはじめ保健系、理・工学系よりも)人文科学系の割合は相対的に低く、有意傾向が見受けられる⁹⁾。しかし、総論を含むそれ以外の項目についてはそれも見受けられないことから、学部系統による大きな差はないと考えられる。

このように、教育の質保証に対する意識のありようは、出口管理の強化に対する賛否のような各論については、学部系統によって大きく異なる可能性があり、特に人文科学系で

は肯定的ではない可能性がある。しかし、総論及び（少なくとも本調査で設定した）その他の各論については、学部系統によって大きくは異ならないようである。

表 6 教育の質保証に関する以下のような意見について、どのように考えるか

	社会科学系	保健系	理・工学系	人文科学系	
教育の質保証に積極的に取り組まなければならない	97.4%	100.0%	91.7%	90.5%	
教育の質保証を実現するためには、出口管理の強化を行うべきである	86.8%	100.0%	83.3%	61.9%	†
教育の質保証を実現するためには、第三者機関によって「何を」「どこまで」というような基準が定められるべきである	31.6%	75.0%	41.7%	33.3%	
教育の質保証を実現するためには、大学の種別化・機能分化を行うべきである	24.3%	43.8%	16.7%	33.3%	
教育の質保証を実現するためには、教員の研究にけるエフォートはできる限り小さくすべきである	27.0%	31.3%	33.3%	33.3%	
教育の質保証を実現するためには、教育活動のみを職務とする教育専従教員が必要である	57.9%	43.8%	66.7%	61.9%	
十分な支援を行ったとしても一定の基準を満たせない学生は出てしまうため、教育の質保証は厳格に考えるべきではない	42.1%	25.0%	18.2%	38.1%	

注：値は肯定的な回答の割合。

5. 教育の質保証の実現に資する各種取組の実態

(1) 明確で具体的な到達目標の設定とその教員間での共有の実態

次に本節では、教育の質保証の実現に資すると考えられる各種取組の実態についてみていきたい。ボーダーフリー大学は学習面での問題を抱えている学生を多く受け入れている関係もあり、卒業時における到達目標についての「何を」「どこまで」というような共通のイメージが教員間で共有されにくい状況にある（葛城，2015）。そうしたイメージが教員間で共有されていなければ、教育の質保証の実現に資する各種取組を行ったとしても、その教育効果が最大化されることはないだろう。この点に鑑みれば、ボーダーフリー大学における教育の質保証を実現する上での大前提として、卒業時における明確で具体的な到達目標を設定した上で、それが教員間で共有されていることは、非常に重要であると考えられる。

そこで本調査では、「貴学部では、卒業生に最低限身につけさせるべき知識・技能・態度

等について、明確で具体的な基準（例えば、建学の精神や教育理念、DP 等の内容をより明確で具体的なレベルにまで落とし込んだような基準）が学内向けに¹⁰設定されていますか」とたずね、以下に示す項目のそれぞれについて、「設定されていない」と「設定されている」の選択肢の中から回答を求めた。また、「設定されている」と回答した回答者に対し、「それはどの程度の教員に共有されていますか。印象で結構ですので、貴学部の教員全体に占めるおおよその割合をお書きください」とたずね、実数での回答を求めた。その結果を学部系統別に示したのが表 7・8 である。

まず表 7 をみると、社会科学系では「設定されている」との回答の割合は、「所属学部で学ぶ上で必要となる基礎学力」、「基礎的な教養・知識・技能」、「専門分野の基礎的な知識・技能」については 4 割台であるのに対し、「学習習慣や学習レディネス」、「社会に出しても恥ずかしくない態度」については 3 割にも満たないことが確認できる。また、他の学部系統と比較すると、（社会科学系よりも）保健系と理・工学系の割合は相対的に高く、「専門分野の基礎的な知識・技能」については有意な差が確認できる。しかし、それ以外の項目については有意傾向すら見受けられないことから、学部系統による大きな差はないと考えられる。

次に表 8 をみると、社会科学系ではその平均値は総じて 7 割台に及んでいることが確認できる。しかし、他の学部系統と比較すると、社会科学系の値は総じて相対的に高い方ではあるものの、いずれの項目についても有意傾向すら見受けられないことから、学部系統による大きな差はないと考えられる。

このように、卒業生に最低限身につけさせるべき知識・技能・態度等について、明確で具体的な基準が学内向けに設定されているか否かは、専門分野の基礎的な知識・技能については、学部系統によって大きく異なるようであり、特に保健系と理・工学系では設定されているようであるが、その他の知識・技能・態度については、学部系統によって大きくは異ならないようである。また、そうした基準が設定されている場合、それが教員間で共有されている割合は、学部系統によって大きくは異ならないようである。

表 7 卒業生に最低限身につけさせるべき知識・技能・態度等について、
明確で具体的な基準が学内向けに設定されているか

	社会科学系	保健系	理・工学系	人文科学系	
所属学部で学ぶ上で必要となる基礎学力	43.2%	66.7%	46.2%	31.8%	
基礎的な教養・知識・技能	43.2%	66.7%	53.8%	27.3%	
専門分野の基礎的な知識・技能	45.9%	73.3%	76.9%	36.4%	*
学習習慣や学習レディネス	27.8%	56.3%	30.8%	27.3%	
社会に出しても恥ずかしくない態度	27.8%	56.3%	38.5%	27.3%	

注：値は「設定されている」の割合。

表 8 設定されている場合、それはどの程度の教員に共有されているか

	社会科学系	保健系	理・工学系	人文科学系	
所属学部で学ぶ上で必要となる基礎学力	76.3%	76.1%	68.3%	75.0%	
基礎的な教養・知識・技能	73.1%	74.4%	67.1%	64.0%	
専門分野の基礎的な知識・技能	73.5%	81.0%	71.0%	75.7%	
学習習慣や学習レディネス	67.0%	66.9%	70.0%	62.0%	
社会に出しても恥ずかしくない態度	73.0%	74.4%	66.0%	66.0%	

注：値は平均値。

(2) 到達目標の達成に有効な取組を促す教員への働きかけの実態

さて、卒業時における明確で具体的な到達目標を設定した上で、それが教員間で共有されてさえいれば、後は各教員がそれを意識しながら自発的に教育活動に積極的に取り組んでくれるというわけでは必ずしもない。すなわち、設定した到達目標を達成する上で有効な取組を行うよう、教員に働きかける必要がある。ボーダーフリー大学では学習面での問題を抱えている学生を多く受け入れていることに鑑みれば、そうした学生でも学習するように促す取組は、設定した到達目標を達成する上で有効な取組として特に重要であると考えられる。そこで本調査では、「貴学部では、教員に対して以下のような取組を行うよう、どの程度働きかけていますか」とたずね、学習面での問題を抱えているボーダーフリー大学生でも学習するように促すためのポイント（葛城，2015）¹¹⁾を考慮した上で設定した以下に示す項目のそれぞれについて、「働きかけていない」から「働きかけている」までの4つの選択肢の中から回答を求めた。その結果を学部系統別に示したのが表9である。

これをみると、社会科学系では「働きかけている」に「どちらかといえば働きかけている」を合わせた肯定的な回答の割合は、「適切なコメントを付して課題などの提出物を返却

表 9 教員に対して以下のような取組を行うよう、どの程度働きかけているか

	社会科学系	保健系	理・工学系	人文科学系	
各授業での学びが学生にとってどのような意味があるのか十分説明すること	81.1%	87.5%	84.6%	77.3%	
学生が授業中に自分の意見や考えを述べる機会を積極的に設けること	86.8%	68.8%	61.5%	86.4%	
学生が授業に参加するグループワークなどの機会を積極的に設けること	86.8%	66.7%	53.8%	81.8%	
学生の授業外学修を促進する機会（課題など）を積極的に設けること	81.1%	80.0%	84.6%	81.8%	
適切なコメントを付して課題などの提出物を返却すること	73.0%	75.0%	61.5%	72.7%	
一定の知識・技能等が身につけているかどうかに基づき成績評価すること	86.5%	93.8%	84.6%	81.8%	

注：値は肯定的な回答の割合。

すること」を除けば8割台に及んでいることが確認できる。しかし、他の学部系統と比較すると、社会科学系の割合は総じて相対的に高い方ではあるものの、いずれの項目についても有意傾向すら見受けられないことから、学部系統による大きな差はないと考えられる。

このように、学習面での問題を抱えている学生でも学習するように促す取組を行うよう教員に働きかけているか否かは、学部系統によって大きくは異なるようである。

(3) 教員の教育活動への動機づけを高める取組の実態

ここで留意しておきたいのは、学習面での問題を抱えている学生でも学習するように促す取組を行うよう教員に働きかけることは、教員の負担増にも直結する話であるということである(葛城, 2018)。このことは、ただでさえ教育活動に多くの時間を費やしており、多忙を極めているボーダーフリー大学に所属する教員に対し、さらに教育活動に積極的に取り組むよう期待することを意味する。それを期待するのであれば、教員の教育活動への動機づけを高める取組を行う必要があるだろう。以下では、①教員の教育活動に対する評価の重視、②教員の教育にかけるエフォート管理、③待遇上の直接的な配慮、といった3つの取組を取り上げる。

①教員の教育活動に対する評価の重視の実態

教員の教育活動に対する評価の重視については、本調査では、「貴学部では、教員の活動を評価する際に、もっとも重視されるのはどのような活動ですか」とたずね、以下に示す項目のそれぞれについて、「教育活動」、「研究活動」、「大学管理・運営に関する活動」、「社会貢献・連携に関する活動」の選択肢の中から回答を求めた。その結果を学部系統別に示したのが表10である。

これをみると、社会科学系では「採用の際」、「任期更新／昇任人事の際」には、「教育活動」よりも「研究活動」の方が重視されているが、「一定期間ごとの評価の際」には、「研究活動」よりも「教育活動」の方が重視されていることが確認できる。しかし、他の学部系統と比較すると、いずれの項目についても有意傾向すら見受けられないことから、学部系統による大きな差はないと考えられる。

表10 教員の活動を評価する際に、もっとも重視されるのはどのような活動か

		社会科学系	保健系	理・工学系	人文科学系
採用の際	教育活動	35.5%	58.3%	27.3%	33.3%
	研究活動	64.5%	41.7%	72.7%	66.7%
任期更新／昇任人事の際	教育活動	32.1%	50.0%	50.0%	11.1%
	研究活動	64.3%	50.0%	50.0%	83.3%
一定期間ごとの評価の際	教育活動	50.0%	50.0%	66.7%	62.5%
	研究活動	38.5%	16.7%	22.2%	31.3%

注：値は「教育活動」と「研究活動」の割合。

②教員の教育にかけるエフォート管理の実態

教員の教育にかけるエフォート管理については、本調査では、「貴学部では、教員の教育にかけるエフォートに一定の基準を設けていますか」とたずね、「設けていない」と「設けている」の選択肢の中から回答を求めた。

その結果をみると、社会科学系では「設けている」との回答の割合はかなり低いことが確認できた（2.6%）。しかし、他の学部系統と比較すると、社会科学系の値は相対的に低い方ではあるものの、有意傾向すら見受けられなかった（保健系：12.5%，理・工学系：15.4%，人文科学系：0.0%， $p>0.1$ ）ことから、学部系統による大きな差はないと考えられる。

なお、教員の教育にかけるエフォートが100%の教員、すなわち、教育活動のみを職務とする教育専従教員のことについても触れておこう。本調査では、「貴学部には、教育活動のみを職務とする教育専従教員（講師以上）はおられますか」とたずね、「いない」と「いる」の選択肢の中から回答を求めた。

その結果をみると、社会科学系では「いる」との回答の割合は2割にも満たないことが確認できた（18.4%）。しかし、他の学部系統と比較すると、有意傾向すら見受けられなかった（保健系：18.8%，理・工学系：15.4%，人文科学系：22.7%， $p>0.1$ ）ことから、学部系統による大きな差はないと考えられる。

③待遇上の直接的な配慮の実態

待遇上の直接的な配慮については、本調査では、「貴学部では、教員の教育活動への積極的な取組を促すために、以下のような取組を行っていますか」とたずね、「行っていない」と「行っている」の選択肢の中から回答を求めた。その結果を学部系統別に示したのが表11である。

これをみると、社会科学系では「行っている」との回答の割合が高い「個人研究費の増額／減額」でも2割台前半であり、「給与（賞与等含む）の増額／減額」では1割台前半に過ぎないことが確認できる。しかし、他の学部系統と比較すると、いずれの項目についても有意傾向すら見受けられないことから、学部系統による大きな差はないと考えられる。

表11 教員の教育活動への積極的な取組を促すために、以下のような取組を行っているか

	社会科学系	保健系	理・工学系	人文科学系	
給与(賞与等含む)の増額／減額	13.2%	18.8%	25.0%	9.1%	
個人研究費の増額／減額	23.7%	18.8%	18.2%	9.1%	
業務の負担減／負担増	18.4%	18.8%	25.0%	9.1%	

注：値は「行っている」の割合。

このように、教員の教育活動への動機づけを高める取組を行っているか否かは、教員の教育活動に対する評価の重視にせよ、教員の教育にかけるエフォート管理にせよ、待遇上の直接的な配慮にせよ、学部系統によって大きくは異ならないようである。

6. おわりに

本稿では、ボーダーフリー大学における教育の質保証の実態について明らかにした前章と同様の分析を学部系統による差異に着目して行うことで、ボーダーフリー大学における教育の質保証の実態が学部系統によってどの程度異なるのか検討を行ってきた。

本稿の分析から、学部系統による差異が顕著にみられたのは学習面での多様性の問題への対応であることが明らかになった。すなわち、特に理・工学系では、学習面で問題を抱えている学生への対応（特に授業）のみならず、学習面で優秀な学生への対応も多く行われていることが明らかになった。理・工学系で、学習面で問題を抱えている学生への対応（特に授業）が多く行われているのは、積み上げ型のカリキュラムを担保するためにはそうした学生への対応が（その他の学部系統よりも）避けられないことに加え、その一環としてのリメディアル教育の内容が比較的明確であるがゆえに行いやすいからであろうと推察される。しかし、学習面で優秀な学生への対応が多く行われているのはなぜだろうか、十分納得できる理由が見当たらない。この点については今後の検討課題にしたいと考える。

また、こうした学習面での多様性の問題への対応を除けば、学部系統による差異は（顕著には）みられないことが明らかになった。先述のように、社会科学系ではその他の学部系統に比べ、教育の質保証がより困難であることを示唆する知見（葛城、2013）も得られているため、こうした結果は少々意外であった。本稿の分析結果をふまえるならば、ボーダーフリー大学における教育の質保証の実態について考える場合には、「必要以上には」学部系統による差異を考慮しなくてもよいということなのかもしれない。

ただし、留意しておきたいのは、本稿の分析結果は必ずしも十分とはいえないサンプルに基づいた分析から得られたものであるという点である。十分なサンプルに基づいた分析であれば、本稿とは異なる分析結果が得られる可能性は低くはないだろうし、その上で本稿では断念した定員割れの状況まで考慮した分析を行うことができれば、その可能性はさらに高まることだろう。今後そうした機会があれば本稿の分析結果を検証したいと考える。

【注】

- 1) 「ボーダーフリー大学」という用語自体は、そもそも河合塾による大学の格付けにおいて、通常の入試難易度がつけられない大学の意味で用いられている。
- 2) 居神（2013）も、「「マージナル大学」[ボーダーフリー大学に概ね相当すると考えられ

る分類概念]という「周辺」分野に生じている現象こそが、そもそも「大学とは何か」という「中心的」かつ「本質的」課題を象徴的に示している」(100-101頁、角括弧内は筆者による)と指摘している。

- 3) 葛城(2013)は、学科長を対象としたアンケート調査に基づき、一定の学修時間を担保する教育の質保証の枠組みには学部系統による差異がみられ、特に社会科学系ではそれが十分に機能していないことを明らかにしている。
- 4) 定員充足率については、『大学の真の実力 情報公開 BOOK』(旺文社)に基づき算出し、分類している(算出の詳細は注6を参照)。なお、50%と80%を基準にしているのは、前者は経常費補助金の全額不交付のラインだからであり、後者は経営上の採算ラインの目安とされているからである。偏差値については、『2018年版 大学ランキング』に基づき分類している。なお、表中の「BF」は「ボーダー・フリー」の意であるが、本稿で定義するボーダーフリー大学と同義でないことには留意されたい。学部系統については、『今日の私学財政』(日本私立学校振興・共済事業団広報)を参考に分類している。
- 5) 本調査の対象学部のうち、定員充足率100%未満の学部は491学部であるが、社会科学系の学部はもっとも多くその3割近く(135学部)を占めている。
- 6) 定員充足率は、『大学の真の実力 情報公開 BOOK』に掲載されている1年次入試における学部の入学定員数を、同じ冊子に掲載されている1年次入試における学部の入学者総数で除することで、単年度の定員充足率を算出している。単年度の定員充足率は変動しやすいため、2017年度用の同冊子で2016年度の定員充足率を、2018年度用の同冊子で2017年度の定員充足率を算出し、その平均値を用いている。なお、同冊子に1年次入試における学部の入学定員数、あるいは入学者総数が掲載されていない場合には、大学のホームページ等に掲載されている値を用いている。
- 7) 実数での回答を求めた問いについては平均値の差の検定、選択肢の中から回答を求めた問いについてはカイ二乗検定による。
- 8) 上記の問いのように実数での回答を求めなかったのは、特に障害等の理由が疑われるような学生については、概数であれ実数での回答の方が難しいと判断したからである。
- 9) こうした分析結果には、特に人文科学系のサンプルに定員割れが深刻なものが多く含まれていることが影響していることも考えられる。しかし、定員充足率80%未満のサンプルのみで同様の分析を行っても、本文で示した結果と概ね同様の傾向がみられた。
- 10) 「学内向けに」としたのは、学外にも公表されるような基準では、いわゆる「大学」らしからぬ基準を設定することが難しいと考えたからである。
- 11) 葛城(2015)は、ボーダーフリー大学生の授業外学習時間を規定する要因に関する先行研究の知見に基づき、学習面での問題を抱えている当該大学生でも学習するように促すためのポイントとして、学習習慣や学習レディネスをしっかりと身につけさせるべく意識的に取り組むこと、「相互作用型授業」を積極的に取り入れること、授業の意味を学

生に十分認識させること，の3点を挙げている。

第3章 教育の質保証の実現を促進する要因についての検討

葛城 浩一
(香川大学)

1. はじめに

「ボーダーフリー大学」とは、「受験すれば必ず合格するような大学、すなわち、事実上の全入状態にある大学」のことである¹⁾。こうした大学は、入試による選抜機能が働かないため、基礎学力や学習習慣、学習への動機づけの欠如といった、早ければ小学校段階から先送りされてきた学習面での問題を抱えている学生を多く受け入れている。学生が入学時点でそうした学習面での問題を抱えていることを前提としている分、ボーダーフリー大学で学士課程教育の質を保証すること（以下、教育の質保証）は容易なことではない。

だからこそ、国際的にも教育の質保証が求められている現状において、日本の高等教育の裾野に位置するボーダーフリー大学における教育の質保証について考えることは、極めて重要である。さらには、ボーダーフリー大学には日本の高等教育（特に大学）が抱えている問題（例えば、学生の学習面での多様化）が凝縮されて顕在化している²⁾ことに鑑みれば、ボーダーフリー大学における教育の質保証について考えることは、日本の高等教育における教育の質保証について問い直すことになるという意味においても、極めて重要である。なお、保証すべき質の対象には様々な要素があると考えられるが、本稿ではそれを「学生の学習の水準」として定義する。すなわち、本稿でいう教育の質保証とは、「学習成果として定めた知識の理解度や技能の習得度を、一定以上確保すること」（川嶋、2013、10頁）を意味する。

このように、ボーダーフリー大学における教育の質保証について考えることは極めて重要であるが、そこに焦点を当てた研究は管見の限り葛城の一連の研究のみである（葛城、2016、2017等）。そもそもボーダーフリー大学自体、これまで研究対象として扱われることはほとんどなかった。山田（2009）も指摘するように、「[日本の] 大学研究の視点は、旧来のエリート大学、すなわち現在の研究大学を中心にしたもの」（33頁、角括弧内は筆者による）なのである。近年、ボーダーフリー大学を研究対象とした先行研究も散見されるようになってきてはいるが、「その限られた研究成果は就職活動を含めた職業選択と大学生活に関するものに大別できる」（三宅、2014、9頁）という指摘からもうかがえるように、その先行研究の多くはそこに所属する学生（以下、ボーダーフリー大学生）を分析対象としたものである。すなわち、教育を提供される学生側の意識・実態に関する知見は蓄積されつつあるが、教育を提供する大学側の意識・実態に関する知見はあまり蓄積されていない

い。ボーダーフリー大学における教育の質保証について考える上でも、特に後者の知見の蓄積は非常に重要である。

そこで本稿では、ボーダーフリー大学における教育の質保証のための各種取組の進捗状況等の把握を主目的とする、学部長を対象としたアンケート調査に基づき、ボーダーフリー大学における教育の質保証の実現を促進する要因について明らかにしたい。それらを通して、ボーダーフリー大学における教育の質保証に資する実践的な施策に寄与しうる知見を提供したいと考える。

2. 研究の方法

(1) 分析の枠組み

先述のように、本稿では、ボーダーフリー大学における教育の質保証の実現を促進する要因について検討を行う。検討を行う上で重要なのは、教育の質保証の実現状況について、それを表す指標としてどのような指標を用いるのかという点と、教育の質保証の実現を促進する要因について、どのような要因を想定した上でどのような指標を用いるのかという点である。

①教育の質保証の実現状況について

まず、教育の質保証の実現状況を表す指標については、例えば、教育の質保証のための各種取組の進捗状況をその指標とすることも考えられよう。しかし、教育の質保証のための各種取組とはいえ、そもそもそれらが教育の質保証の実現状況にどの程度の影響を与えているのかが明らかでない以上、それらを教育の質保証の実現状況を表す代理指標とすることは適切ではないだろう。

そこで本稿では、教育の質保証の実現状況に対する学部長の認識をその指標とすることにした。具体的には、「貴学部では、教育の質保証がどの程度実現できているとお考えですか」とたずね、「かなり実現できていない」から「かなり実現できている」までの4つの選択肢の中から回答を求めることにした³⁾。

ここで留意しておきたいのは、組織の長としての回答には一定のバイアスが生じる可能性が低くはない（回答学部が特定できる本調査ではなおさら）という点である。この点に鑑みれば、教育の質保証の実現状況に対する学部長の認識をその指標とすることは、必ずしも適切ではないかもしれない。しかし、現時点では他に適切な指標もないため、上記の点に十分留意した上であれば、検討に値する指標であると考えて。すなわち、分析の結果得られる知見はあくまで、教育の質保証の実現状況に対する学部長の認識の根拠となっている要因であるため、それを教育の質保証の実現を促進する要因と断定することはできないまでも、その可能性があることを示唆することはできると考えるからである。研究蓄積が十分でない現状にあってその意義は決して小さくないだろう。

また、この指標を用いた分析は、教育の質保証のための各種取組のうちどのような取組

が、教育の質保証の実現状況を表す代理指標として適切なのかを把握するための試行的な研究としても位置づけることができる。その意味においても、検討に値する指標であると考ええる。

②教育の質保証の実現を促進する要因について

一方、教育の質保証の実現を促進する要因については、様々な要因が想定できよう。本稿では、ボーダーフリー大学が、基礎学力や学習習慣、学習への動機づけの欠如といった、学習面での問題を抱えている学生を多く受け入れていることが、教育の質保証の実現を阻害する要因となっていると仮定した上で、そうした学生への対応とも関係する取組がその実現を促進する要因となるのではないかと考え、以下の要因を想定することにした。すなわち、(1) 学習面での問題を抱える学生のための特別な機会、(2) (卒業時における) 明確で具体的な到達目標の設定と教員間での共有、(3) (到達目標の達成に) 有効な取組を促す教員への働きかけ、(4) 教員の教育活動への動機づけを高める取組、という4つの要因である。以下では、その理由について説明する。

学習面での問題を抱えている学生への対応としてまず考えられるのが、そうした学生を対象とした特別な機会を設けることであろう(要因(1) 学習面での問題を抱える学生のための特別な機会)。ただ、そうした特別な機会だけでの対応には限界もあるだろうから、そうではない機会(通常の授業等)においてどのような取組を行うかも非常に重要になってくる。

そうした取組を行う上での大前提となるのは、卒業時における明確で具体的な到達目標を設定した上で、それが教員間で共有されていることではないだろうか(要因(2) (卒業時における) 明確で具体的な到達目標の設定と教員間での共有)。特にボーダーフリー大学は学習面での問題を抱えている学生を多く受け入れている関係もあり、卒業時における到達目標についての「何を」「どこまで」というような共通のイメージが教員間で共有されにくい状況にある(葛城, 2015)⁴⁾。そうしたイメージが教員間で共有されていなければ、学習面での問題を抱えている学生への対応を行ったとしても、その教育効果が最大化されないことはいうまでもない。

さて、卒業時における明確で具体的な到達目標を設定した上で、それが教員間で共有されてさえいれば、後は各教員がそれを意識しながら自発的に教育活動に積極的に取り組んでくれるというわけでは必ずしもない。すなわち、設定した到達目標を達成する上で有効な取組を行うよう、教員に働きかける必要がある(要因(3) (到達目標の達成に) 有効な取組を促す教員への働きかけ)。ボーダーフリー大学では学習面での問題を抱えている学生を多く受け入れていることに鑑みれば、そうした学生でも学習するように促す取組は、設定した到達目標を達成する上で有効な取組として特に重要であると考ええる。

ここで留意しておきたいのは、学習面での問題を抱えている学生でも学習するように促す取組を行うよう教員に働きかけることは、教員の負担増にも直結する話であるというこ

とである(葛城, 2018)。このことは、ただでさえ教育活動に多くの時間を費やしており、多忙を極めているボーダーフリー大学に所属する教員(以下、ボーダーフリー大学教員)に対し、さらに教育活動に積極的に取り組むよう期待することを意味する。それを期待するのであれば、教員の教育活動への動機づけを高める取組を行う必要があるだろう(要因(4) 教員の教育活動への動機づけを高める取組)。

以上の要因は、以下のように指標とすることにした。要因(1) 学習面での問題を抱える学生のための特別な機会については、「貴学部では、基礎学力等の学習面での多様性の問題に対応するために、以下のような取組を行っていますか」とたずね、表2に示す項目のそれぞれについて、「行っていない」と「行っている」の選択肢の中から回答を求めることにした。

要因(2) (卒業時における) 明確で具体的な到達目標の設定と教員間での共有については、「貴学部では、卒業生に最低限身につけさせるべき知識・技能・態度等について、明確で具体的な基準(例えば、建学の精神や教育理念、DP等の内容をより明確で具体的なレベルにまで落とし込んだような基準)が学内向けに⁵⁾設定されていますか」とたずね、表3に示す項目のそれぞれについて、「設定されていない」と「設定されている」の選択肢の中から回答を求めることにした。また、「設定されている」と回答した回答者に対し、「それはどの程度の教員に共有されていますか。印象で結構ですので、貴学部の教員全体に占めるおおよその割合をお書きください」とたずね、実数での回答を求めることにした。

要因(3) (到達目標の達成に) 有効な取組を促す教員への働きかけについては、「貴学部では、教員に対して以下のような取組を行うよう、どの程度働きかけていますか」とたずね、学習面での問題を抱えているボーダーフリー大学生でも学習するように促すためのポイント(葛城, 2015)⁶⁾を考慮した上で設定した表5に示す項目のそれぞれについて、「働きかけていない」から「働きかけている」までの4つの選択肢の中から回答を求めることにした。

要因(4) 教員の教育活動への動機づけを高める取組については、①教員の教育活動に対する評価の重視、②教員の教育にかかるエフォート管理、③待遇上の直接的な配慮、といった3つの取組を想定し、指標とすることにした。①教員の教育活動に対する評価の重視については、「貴学部では、教員の活動を評価する際に、もっとも重視されるのはどのような活動ですか」とたずね、表6に示す項目のそれぞれについて、「教育活動」、「研究活動」、「大学管理・運営に関する活動」、「社会貢献・連携に関する活動」の選択肢の中から回答を求めることにした。②教員の教育にかかるエフォート管理については、「貴学部では、教員の教育にかかるエフォートに一定の基準を設けていますか」とたずね、「設けていない」と「設けている」の選択肢の中から回答を求めることにした。③待遇上の直接的な配慮については、「貴学部では、教員の教育活動への積極的な取組を促すために、以下のような取組を行っていますか」とたずね、表7に示す項目のそれぞれについて、「行っていない」と

「行っている」の選択肢の中から回答を求めることにした。

(2) 調査方法と対象

本稿で使用するデータは、平成 29～31 年度科学研究費補助金基盤研究 (C)「ユニバーサル化時代における学士課程教育の質保証の実現可能性に関する研究」(研究代表者：葛城浩一) 及び広島大学高等教育研究開発センターの研究プロジェクト「大衆化大学における学士課程教育の質保証のあり方に関する総合的研究」(研究代表者：葛城浩一) の一環として実施した「ユニバーサル化時代における学士課程教育の質保証に関する調査」である。

この調査は、中堅以下の大学(学部)の学部長(具体的には、『2018 年版 大学ランキング』(朝日新聞出版)に基づく偏差値 50 未満の学部の学部長)を対象として、2017 年 11 月～2018 年 3 月にかけて実施した。回答者数は 350 名(定員充足率⁷⁾100%未満：127 名、100%以上：222 名)であり、配布数を母数とした回答率は 25.3%(100%未満：25.9%、100%以上：24.9%)であった。

3. 教育の質保証の実現状況

教育の質保証の実現を促進する要因についての検討に先立ち、本節ではまず、教育の質保証の実現状況についての回答状況を確認したい。ボーダーフリー大学に相当する定員充足率 100%未満の学部の回答状況をみると、教育の質保証が「かなり実現できている」との回答は極めて少数であり(6 名, 4.8%)、これに「どちらかといえば実現できている」との回答を合わせても半数にも満たなかった(59 名, 47.2%)。なお、残る過半数の大半は、「どちらかといえば実現できていない」との回答であり(61 名, 48.8%)、「かなり実現できていない」との回答もまた極めて少数であった(5 名, 4.0%)。

次節では、こうした回答状況に基づく群間比較を行うことで、教育の質保証を実現できている学部(正確には、学部長がそのように認識している学部、以下同様)とはどのような学部なのか、その特徴について検討する。「かなり実現できている」と回答している学部の特徴を明らかにすることができるのであればそれにこしたことはないのだが、先述のようにそのサンプル数は極めて少数である。そこで次節では、教育の質保証の実現状況に対する肯定的な回答と否定的な回答との比較を重視して、肯定的な回答(「かなり実現できている」+「どちらかといえば実現できている」)をした者を「実現群」、否定的な回答(「どちらかといえば実現できていない」+「かなり実現できていない」)をした者を「非実現群」とし、群間比較を行う。各群のサンプル数は、「実現群」が 59 名、「非実現群」が 66 名である⁸⁾。

なお、できることなら定員割れの状況まで考慮した分析を行いたいところではあるが、ただでさえ十分とはいえないサンプルを定員充足率によって細分化して分析を行うことには限界がある。そのため本稿では、定員充足率 100%未満のサンプルを一括りにして分析

を行うことにしたが、今後十分なサンプルをもとに分析を行う機会があれば本稿の分析結果を検証したいと考える。

4. 教育の質保証を実現できている学部の特徴

本節では、先に示した教育の質保証の実現を促進する要因として想定した4つの要因について、教育の質保証の実現状況に基づく群間比較を行うことで、教育の質保証を実現できている学部の特徴について検討する。先述のように、上記4つの要因は、ボーダーフリー大学が学習面での問題を抱えている学生を多く受け入れていることが、教育の質保証の実現を阻害する要因となっていると仮定した上で想定した要因である。まずはこの仮定の妥当性について検討しておきたい。

本調査では、「貴学部では、以下のような学習面での問題を抱えている入学者をどの程度受け入れておられますか。印象で結構ですので、貴学部の入学者全体に占めるおおよその割合をお書きください」とたずね、以下に示す項目のそれぞれについて、実数での回答を求めている。その回答状況が教育の質保証の実現状況によってどの程度異なるのか、t検定による検討を行った結果を示したのが表1である。

これをみると、いずれの項目についても、「非実現群」は「実現群」に比べその平均値が高く、統計的に有意な差も確認できる。すなわち、学部長の認識によれば、教育の質保証を実現できていない学部は実現できている学部と比べ、学習面での問題を抱えている入学者をより多く受け入れているということである。こうした結果は、学習面での問題を抱えている学生を多く受け入れていることが、教育の質保証の実現を阻害する要因となっているという仮定の妥当性を裏づけるものであるといえよう。

表1 学習面での問題を抱えている学生の受入状況

	実現群	非実現群	
所属学部で学ぶ上で必要となる基礎学力の著しい欠如	11.9%	23.5%	***
学習習慣や学習レディネスの著しい欠如	15.1%	29.2%	***
学習への動機づけの著しい欠如	12.6%	28.1%	***

注：***は $p < 0.001$ ，**は $p < 0.01$ ，*は $p < 0.05$ ，†は $p < 0.1$ 。以下同様。

(1) 学習面での問題を抱える学生のための特別な機会

学習面での問題を抱える学生のための特別な機会については、以下に示す項目のそれぞれについて、「行っていない」と「行っている」の選択肢の中から回答を求めている。その

回答状況が、教育の質保証の実現状況によってどの程度異なるのか、カイ二乗検定による検討を行った結果を示したのが表2である。

これをみると、「学習面で問題を抱えている学生が対象/主対象の授業(補習授業以外)」については、「実現群」は「非実現群」に比べ「行っている」との回答の割合が高いという有意傾向は見受けられるが、その他の項目については見受けられない。すなわち、教育の質保証を実現できている学部は実現できていない学部と比べ、学習面で問題を抱えている学生が対象/主対象の補習授業やプログラムを行っているわけではないということである。

表2 学習面での問題を抱える学生のための特別な機会

	実現群	非実現群	
学習面で問題を抱えている学生が対象/主対象の授業(補習授業以外)	44.1%	28.8%	†
学習面で問題を抱えている学生が対象/主対象の補習授業(単位あり)	32.2%	28.8%	
学習面で問題を抱えている学生が対象/主対象のプログラム(正課外を含む)	43.9%	43.9%	

注：値は「行っている」の割合。

(2) 明確で具体的な到達目標の設定と教員間での共有

(卒業時における)明確で具体的な到達目標の設定と教員間での共有については、以下に示す項目のそれぞれについて、「設定されていない」と「設定されている」の選択肢の中から回答を求めている。その回答状況が、教育の質保証の実現状況によってどの程度異なるのか、カイ二乗検定による検討を行った結果を示したのが表3である。また、「設定されている」と回答した回答者に対し、実数での回答を求めている。その回答状況が、教育の質保証の実現状況によってどの程度異なるのか、t検定による検討を行った結果を示したのが表4である。

まず表3をみると、いずれの項目についても、「実現群」は「非実現群」に比べ「設定されている」との回答の割合が高く、有意な差も確認できる。また表4をみると、いずれの項目についても、「実現群」は「非実現群」に比べその平均値が高く、有意な差も確認できる。すなわち、教育の質保証を実現できている学部は実現できていない学部と比べ、卒業生に最低限身につけさせるべき知識・技能・態度等について、明確で具体的な到達目標を設定しており、設定された到達目標はより多くの教員間で共有されているということである。

表3 明確で具体的な到達目標の設定

	実現群	非実現群	
所属学部で学ぶ上で必要となる基礎学力	70.7%	35.4%	***
基礎的な教養・知識・技能	65.5%	41.5%	**
専門分野の基礎的な知識・技能	70.7%	50.8%	*
学習習慣や学習レディネス	52.6%	29.2%	**
社会に出しても恥ずかしくない態度	50.9%	31.8%	*

注：値は「設定されている」の割合。

表4 設定された到達目標の教員間での共有

	実現群	非実現群	
所属学部で学ぶ上で必要となる基礎学力	82.2%	64.3%	**
基礎的な教養・知識・技能	83.6%	59.6%	***
専門分野の基礎的な知識・技能	84.1%	66.7%	***
学習習慣や学習レディネス	80.0%	55.5%	***
社会に出しても恥ずかしくない態度	85.0%	62.1%	***

(3) 有効な取組を促す教員への働きかけ

(到達目標の達成に) 有効な取組を促す教員への働きかけについては、以下に示す項目のそれぞれについて、「働きかけていない」から「働きかけている」までの4つの選択肢の中から回答を求めている。その回答状況が、教育の質保証の実現状況によってどの程度異なるのか、t検定による検討を行った結果を示したのが表5である。なお、表中の値は、「働きかけていない」=1から「働きかけている」=4で配分された得点の平均値である。

これをみると、いずれの項目についても、「実現群」は「非実現群」に比べ平均値が高く、特に「学生の授業外学修を促進する機会（課題など）を積極的に設けること」については

表5 有効な取組を促す教員への働きかけ

	実現群	非実現群	
各授業での学びが学生にとってどのような意味があるのか十分説明すること	3.37	3.02	†
学生が授業中に自分の意見や考えを述べる機会を積極的に設けること	3.34	3.11	†
学生が授業に参加するグループワークなどの機会を積極的に設けること	3.31	3.18	
学生の授業外学修を促進する機会（課題など）を積極的に設けること	3.50	2.98	***
適切なコメントを付して課題などの提出物を返却すること	3.07	2.80	†
一定の知識・技能等が身についているかどうかに基づき成績評価すること	3.34	3.14	†

有意な差が確認でき、その他の項目についても総じて有意傾向が見受けられる。すなわち、教育の質保証を実現できている学部は実現できていない学部と比べ、特に学生の授業外学修を促進する機会を積極的に設けるような取組については、教員に行うよう働きかけているということである。

(4) 教員の教育活動への動機づけを高める取組

①教員の教育活動に対する評価の重視

教員の教育活動に対する評価の重視については、以下に示す項目のそれぞれについて、「教育活動」、「研究活動」、「大学管理・運営に関する活動」、「社会貢献・連携に関する活動」の選択肢の中から回答を求めている。その回答状況が、教育の質保証の実現状況によってどの程度異なるのか、カイ二乗検定による検討を行った結果を示したのが表6である。

これをみると、いずれの項目についても、「実現群」は「非実現群」に比べ「教育活動」との回答の割合は高いものの、有意傾向すら見受けられない⁹⁾。すなわち、教育の質保証を実現できている学部は実現できていない学部と比べ、教員の活動を評価する際に、教育活動をより重視しているわけではないということである。

表6 教員の教育活動に対する評価の重視

	実現群	非実現群	
採用の際	42.0%	34.0%	
任期更新／昇任人事の際	34.0%	26.0%	
一定期間ごとの評価の際	60.5%	52.1%	

注：値は「教育活動」の割合。

②教員の教育にかかるエフォート管理

教員の教育にかかるエフォート管理については、「設けていない」と「設けている」の選択肢の中から回答を求めている。その回答状況が、教育の質保証の実現状況によってどの程度異なるのか、カイ二乗検定による検討を行った。

その結果をみると、「実現群」は「非実現群」に比べ「設けている」との回答の割合は高いものの、有意傾向すら見受けられなかった（「実現群」：8.6%、「非実現群」：4.5%、 $p > 0.1$ ）。すなわち、教育の質保証が実現できている学部は実現できていない学部と比べ、教員の教育にかかるエフォート管理を行っているわけではないということである。

③待遇上の直接的な配慮

待遇上の直接的な配慮については、以下に示す項目のそれぞれについて、「行っていない」と「行っている」の選択肢の中から回答を求めている。その回答状況が、教育の質保証の実現状況によってどの程度異なるのか、カイ二乗検定による検討を行った結果を示したの

が表7である。

これをみると、いずれの項目についても、「実現群」は「非実現群」に比べ「行っている」との回答の割合が高く、特に「給与（賞与等含む）の増額／減額」については有意な差が確認でき、「個人研究費の増額／減額」については有意傾向が見受けられる。すなわち、教育の質保証が実現できている学部は実現できていない学部と比べ、教員の教育活動への積極的な取組を促すために、特に給与の増額／減額を行っているということである。

表7 待遇上の直接的な配慮

	実現群	非実現群	
給与（賞与等含む）の増額／減額	31.0%	13.8%	*
個人研究費の増額／減額	26.3%	14.1%	†
業務の負担減／負担増	19.6%	13.8%	

注：値は「行っている」の割合。

5. 教育の質保証の実現を促進する要因の検討

前節の分析から、教育の質保証を実現できている学部の特徴をおおよそ明らかにすることができた。しかし、前節の分析では変数相互の影響力が考慮されていないし、その他の変数の影響力も考慮されていない。そこで本節では、これらの影響力を考慮した重回帰分析による検討を行うことで、教育の質保証の実現を促進する要因について明らかにしたい。

従属変数には、「教育の質保証の実現状況」¹⁰⁾を用いる。また、独立変数には、前節の分析において有意な差が確認できた項目、すなわち、「学習面での問題を抱えている学生の受入状況」¹¹⁾、「明確で具体的な到達目標の設定と教員間での共有」¹²⁾、「有効な取組を促す教員への働きかけ」のうち「学生の授業外学修を促進する機会（課題など）を積極的に設けること」（以下、「学生の授業外学修を促進する機会」）¹³⁾、「教員の教育活動への動機づけを高める取組」のうち「給与の増額／減額」（待遇上の直接的な配慮）¹⁴⁾を用いる。また、これらに加え、基本的属性として、「定員充足率」¹⁵⁾も用いる。

重回帰分析を行った結果を示したのが表8である。これをみると、「明確で具体的な到達目標の設定と教員間での共有」と「有効な取組を促す教員への働きかけ（学生の授業外学修を促進する機会）」は有意な正の影響を与えているのに対して（ただし、前者は10%水準である）、「教員の教育活動への動機づけを高める取組（給与の増額／減額）」は有意な（正の）影響を与えていないことがわかる。すなわち、卒業時における明確で具体的な到達目標を設定しており、それをより多くの教員間で共有すること、また、特に学生の授業外学修を促進する機会を積極的に設けるような取組を行うよう教員に働きかけることは、教育の質保証の実現を促進する要因となる可能性があるのに対し、教員の教育活動への動機づ

けを高める取組は、その要因とはならない可能性があるということである。

ここで留意しておきたいのは、「定員充足率」と「学習面での問題を抱えている学生の受入状況」が有意な影響を与えているということである。すなわち、定員充足状況がより深刻なこと、そしてそれとも関係するだろうが、学習面での問題を抱えている学生をより多く受け入れていることは、教育の質保証の実現を阻害する要因となる可能性があるということである。

表 8 教育の質保証の実現状況に関する重回帰分析

定員充足率	0.163 *
学習面での問題を抱えている学生の受入状況	-0.435 ***
学習面での問題を抱える学生のための特別な機会: 要因(1)	—
明確で具体的な到達目標の設定と教員間での共有: 要因(2)	0.143 †
有効な取組を促す教員への働きかけ: 要因(3)	
学生の授業外学修を促進する機会	0.267 ***
教員の教育活動への動機づけを高める取組: 要因(4)	
給与の増額/減額	0.113
調整済みR ²	0.373
F値	14.099 ***

注：値は標準化偏回帰係数。サンプル数は 127 名。

6. おわりに

本稿では、教育の質保証の実現状況に対する学部長の認識を手がかりとして、ボーダーフリー大学における教育の質保証の実現を促進する要因について検討してきた。本稿で得られた知見は以下の通りである。

第一に、教育の質保証の実現を促進する要因として想定した要因のうち、(2) (卒業時における) 明確で具体的な到達目標の設定と教員間での共有、(3) (到達目標の達成に) 有効な取組を促す教員への働きかけは、その要因となる可能性があるが、(1) 学習面での問題を抱える学生のための特別な機会、(4) 教員の教育活動への動機づけを高める取組は、その要因とはならない可能性があることが確認された。

第二に、定員充足状況がより深刻なこと、そしてそれとも関係するだろうが、学習面での問題を抱えている学生をより多く受け入れていることは、教育の質保証の実現を阻害する要因となる可能性があることが確認された。

以上の知見は、教育の質保証を実現するためには、まずは卒業時における明確で具体的な到達目標を設定し、それをより多くの教員間で共有すること、そしてその上で、特に学生の授業外学修を促進する機会を積極的に設けるような取組¹⁶⁾を行うよう教員に働きかけることが有効である可能性があることを示唆するものである。学習面での問題を抱えてい

多くの学生を目の前にして、教育の質保証の実現など到底不可能なことに感じられ、教育の質保証に積極的に取り組む気になれないボーダーフリー大学（学部）もあろうが¹⁷⁾、そうした大学であっても、「これさえできれば」教育の質保証の実現可能性は多少なりとも高まるのではなかろうか。

しかし、ボーダーフリー大学は学習面での問題を抱えている学生を多く受け入れている関係もあり、「何を」「どこまで」というような明確で具体的な到達目標を設定することはそう容易なことではないだろう（目的養成系の学部系統ですらその例外ではない）。また、そうした到達目標を設定することができたとして、それをより多くの教員間で共有するといっても、それがただの知識レベルでの共有（例えば、「そうした到達目標があることは知っている」というようなレベル）ではほとんど意味がないだろう。もっとも望ましいのは、設定した到達目標を達成する上で有効な取組（本稿の分析結果でいえば、学生の授業外学習を促進する機会を積極的に設けるような取組）を行うよう働きかけられた際に、その必要性を「我が事」として認識し、実際の行動に移していくことのできる、行動を伴う認識レベルでの共有だろう。

こうした文脈から、教員の教育活動への動機づけを高める取組が教育の質保証の実現を促進する要因とはならない可能性があるという本稿の分析結果について考えてみると、なぜそうなるのか、その理由が垣間見えてくる。すなわち、こうした行動を伴う認識レベルでの共有ができていない学部からすれば、改めて教育活動への動機づけを高める取組を積極的に行う必要はないからである。

他方、行動を伴う認識レベルでの共有は勿論、ただの知識レベルでの共有すらできていない学部にしてみれば、教育活動への動機づけを高める取組を積極的に行ったとしても、その効果は極めて限定的なものとなる可能性が大いにある。小川（2016）の言葉になぞらえていえば¹⁸⁾、高齢教員は自分たちの定年までは「持つだろう」と考えるし、また、若手教員は「腰かけ」のつもりだから、教育活動への動機づけを高める取組の有無にかかわらず、教育活動に積極的に取り組むつもりなどさらさらしない者は決して少なくないだろう。もっとも動機づけを高めてほしい教員にそうした取組が機能しえないという現実がそこには存在している。

はたして、卒業時における明確で具体的な到達目標を設定し、それを行動を伴う認識レベルで共有するためにはどうしたらよいのだろうか。そのために有効な方策はありうるのだろうか。こうした点については、現在実施中の注目すべき取組を実践している大学への訪問調査及びボーダーフリー大学教員を主対象としたアンケート調査をもとに今後検討したいと考える。

最後に、本稿の問題関心は個々のボーダーフリー大学における教育の質保証にあったため、それと日本の高等教育（特に大学）における教育の質保証との関係性についてまで論じることはできなかった。すなわち、本稿の知見に照らせば、個々のボーダーフリー大学

において卒業時における明確で具体的な到達目標を設定することは重要であると考えられるが、それらが（4年制）大学、あるいは当該学部系統からみて妥当なものであるかどうか、というような点についてまで論じることはできなかった。こうした点についての議論は、「大学とは何か」あるいは「大学（あるいは当該学部系統）で教えられるべき固有の知識・技能とは何か」といった根源的な問いに抵触する可能性がある。こうした点については一部論じてきたところではあるが（葛城，2016）、本稿の知見をふまえた上で今後改めて論じてみたいと考える。

【注】

- 1) 「ボーダーフリー大学」という用語自体は、そもそも河合塾による大学の格付けにおいて、通常の入試難易度がつけられない大学の意味で用いられている。
- 2) 居神（2013）も、「「マージナル大学」[ボーダーフリー大学に概ね相当すると考えられる分類概念]という「周辺」分野に生じている現象こそが、そもそも「大学とは何か」という「中心的」かつ「本質的」課題を象徴的に示している」（100-101頁、角括弧内は筆者による）と指摘している。
- 3) 本調査で使用する「教育の質保証」とは、「学習成果として定めた知識の理解度や技能の習得度を、一定以上確保すること」を意味するものであることを、調査趣意書及び調査票の該当部分に重ねて記載している。
- 4) 葛城（2015）は、同じ大学に所属している教員間でも当該大学の卒業生に最低限身につけさせるべきだと考える知識・技能・態度等のイメージが大きく異なっていることを明らかにしている。
- 5) 「学内向けに」としたのは、学外にも公表されるような基準では、いわゆる「大学」らしからぬ基準を設定することが難しいと考えたからである。
- 6) 葛城（2015）は、ボーダーフリー大学生の授業外学習時間を規定する要因に関する先行研究の知見に基づき、学習面での問題を抱えている当該大学生でも学習するように促すためのポイントとして、学習習慣や学習レディネスをしっかりと身につけさせるべく意識的に取り組むこと、「相互作用型授業」を積極的に取り入れること、授業の意味を学生に十分認識させること、の3点を挙げている。
- 7) 定員充足率は、『大学の真の実力 情報公開 BOOK』（旺文社）に掲載されている1年次入試における学部の入学定員数を、同じ冊子に掲載されている1年次入試における学部の入学者総数で除することで、単年度の定員充足率を算出している。単年度の定員充足率は変動しやすいため、2017年度用の同冊子で2016年度の定員充足率を、2018年度用の同冊子で2017年度の定員充足率を算出し、その平均値を用いている。
- 8) 以降の分析では、項目によっては欠損値が多少みられるため、ここで示しているサンプル

ル数とは若干異なるものもある（多くても3名減）。例外は表6に示す項目であるが、詳細については注9で示す。

- 9) 留意しておきたいのは、この項目では欠損値が少なくないため、各群のサンプル数がこれまでの分析とは少なからず異なっているという点である（「採用の際」では「実現群」が50名、「非実現群」が53名、「任期更新／昇任人事の際」では「実現群」が47名、「非実現群」が50名、「一定期間ごとの評価の際」では「実現群」が43名、「非実現群」が48名）。この項目で欠損値が少なくないのは、「教育活動」、「研究活動」、「大学管理・運営に関する活動」、「社会貢献・連携に関する活動」の選択肢の中からひとつの回答を想定していたのだが、複数回答している回答者が少なくなかったからである。なお、複数回答を、「教育活動がもっとも重視されているわけではない」と解釈するならば、表6に示した値が大きく変わることはない。
- 10) 「かなり実現できていない」=1から、「かなり実現できている」=4までの得点を配分している。
- 11) 表1に示す3項目を用いて主成分分析を行った結果得られた主成分得点を用いている。すなわち、主成分得点が高いほど、学習面での問題を抱えている学生を多く受け入れていることになる。
- 12) 「設定されていない」なら1、「設定されている」のうち、教員間で共有されている割合が80%未満なら2、80%以上なら3の得点を配分した上で、表3・4に示す5項目を用いて主成分分析を行った結果得られた主成分得点を用いている。すなわち、主成分得点が高いほど、明確で具体的な到達目標が教員間で共有されていることになる。なお、80%を基準としたのは、回答を二分するのが総じてそのラインだったからである。
- 13) 「働きかけていない」=1から、「働きかけている」=4までの得点を配分している。
- 14) 「行っている」なら1、「行っていない」なら0のダミー変数を用いている。
- 15) 2016年度と2017年度の単年度の定員充足率の平均値を用いている。詳細は注7を参照。
- 16) 学生の授業外学修を促進する機会を積極的に設けるような取組は、各大学・学部の実状に応じて多様なアプローチがあつてしかるべきである。本調査では、「教育の質保証の実現のためにどのような取組を行っていますか。特に効果的な取組について具体的にお書きください」という自由記述の問いを設けている。そこには、いずれの授業においても授業外で取り組む課題を半期5回以上求めるように取り決めている学部（定員充足率100%未満、社会科学系）も確認できた。
- 17) 本調査では、「貴学部では、教育の質保証にどの程度積極的に取り組んでおられますか」とたずね、「積極的に取り組んでいない」から「積極的に取り組んでいる」までの4つの選択肢の中から回答を求めている。定員充足率100%未満の学部の回答状況をみると、否定的な回答（「積極的に取り組んでいない」+「どちらかといえば積極的に取り組んで

いない)の割合は2割台半ばに及ぶ(25.4%)。こうした学部は教育の質保証に積極的に取り組む気になれないのかもしれない。

- 18) 原文は以下の通りである。「高齢教員たちは、自分たちの定年までは「持つだろう」と考え、あえて摩擦を起こしてまで改革に取り組むつもりはない。若手は「腰かけ」のつもりだから、所属する大学の将来のあり方を考えるつもりはない。」(小川, 2016, 119頁)。

第4章 教育の質保証の実現を阻害する要因についての検討 —自由記述に基づく試行的分析—

宇田 響
(広島大学大学院)

1. はじめに

第3章では、ボーダーフリー大学が、基礎学力や学習習慣、学習への動機づけの欠如といった、学習面での問題を抱えている学生を多く受け入れていることが、教育の質保証の実現を阻害する要因となっていると仮定した上で、そうした学生への対応とも関係する取組がその実現を促進する要因となるのではないかと考え、重回帰分析による検討を行った。検討の結果、教育の質保証の実現を促進する要因として想定した要因のうち、(卒業時における)明確で具体的な到達目標の設定と教員間での共有、(到達目標の達成に)有効な取組を促す教員への働きかけは、その要因となる可能性があるが、学習面での問題を抱える学生のための特別な機会、教員の教育活動への動機づけを高める取組は、その要因とはならない可能性があることが確認された。また、定員充足状況がより深刻なことで、そしてそれとも関係するだろうが、学習面での問題を抱えている学生をより多く受け入れていることは、教育の質保証の実現を阻害する要因となる可能性があることが確認された。

これらの知見がボーダーフリー大学における教育の質保証の実現可能性について考える上で極めて重要なものであることはいうまでもない。しかしながら、その分析が事前に設定した分析枠組みに基づく仮説検証型のアプローチであるがゆえの限界については意識しておく必要があるだろう。すなわち、先行研究を十分にふまえた上で設定した分析枠組みではあろうが、そこに無視できない要因が盛り込まれていない可能性もあると考えられる。ボーダーフリー大学における教育の質保証を実現あるいは阻害する要因について考える上では、仮説探索型のアプローチの一環として、まずはその可能性のある要因を網羅的に整理することも非常に重要であると考えられる。

そこで本稿では、ボーダーフリー大学における教育の質保証の実現の妨げになっていることについての自由記述欄のデータをもとに、ボーダーフリー大学における教育の質保証の実現を阻害する可能性のある要因について試行的に整理したい。本稿の知見を通して、ボーダーフリー大学における教育の質保証の実現を促進あるいは阻害する可能性のある要因を網羅的に整理することに寄与しうる知見を提供したいと考える。

2. 研究の方法

(1) 調査方法と対象

本稿で使用するデータは、平成 29～31 年度科学研究費補助金基盤研究 (C)「ユニバーサル化時代における学士課程教育の質保証の実現可能性に関する研究」(研究代表者:葛城浩一)及び広島大学高等教育研究開発センターの研究プロジェクト「大衆化大学における学士課程教育の質保証のあり方に関する総合的研究」(研究代表者:葛城浩一)の一環として実施した「ユニバーサル化時代における学士課程教育の質保証に関する調査」である。

この調査は、中堅以下の大学(学部)の学部長(具体的には、『2018 年版 大学ランキング』(朝日新聞出版)に基づく偏差値 50 未満の学部の学部長)を対象として、2017 年 11 月から 2018 年 3 月にかけて実施した。回答者数は 350 名(定員充足率 100%未満:127 名, 100%以上:222 名)であり、配布数を母数とした回答率は 25.3%(100%未満:25.9%, 100%以上:24.9%)であった。

(2) 分析の手続きと枠組み

本稿の分析では、「貴学部において、教育の質保証の実現の妨げになっているのはどのようなことですか。どのようなことでも結構ですので率直にお書きください」という問いから得られた自由記述のデータを用いることとする。これらのデータをもとに、ボーダーフリー大学における教育の質保証の実現を阻害する可能性のある要因について試行的に整理したい。勿論、できることなら定員割れの状況や学部系統による差異まで考慮した分析を行いたいところではあるが、自由記述欄のデータという性質上、ただでさえ十分とはいえないサンプルを定員充足率や学部系統によって細分化して分析を行うことには限界がある。そのため本稿では、ボーダーフリー大学に相当する定員充足率 100%未満のサンプルを一括りにし、それらのサンプルのみを対象として分析を行うこととする。

さて、上述の問いには、定員充足率 100%未満の学部から 74 件(58.3%)の回答があった。しかしながら、これらの回答の中には、教育の質保証の実現を阻害する可能性のある要因についての記述と判別することができないものがあったため、それに該当する 12 件の回答を分析対象から除外することとした¹⁾。よって、62 件の回答が分析対象となるのであるが、これらの回答の中には、複数の内容に分類されるものも少なくないため、内容ベースで分類した結果、82 件のデータが得られた。このデータをもとに、KJ 法を用いて分類を行った。具体的には、学生側に起因する要因、教員側に起因する要因、大学側に起因する要因といった 3 つの観点で分類を行った後、さらにそれぞれについて内容を吟味し、キーワードによる下位分類を行った。そうした作業を経て、最終的に、学生側に起因する要因には 15 件のデータ、教員側に起因する要因には 27 件のデータ、大学側に起因する要因には 32 件のデータを分類することができた。なお、残りの 8 件のうち 6 件のデータは、定員充足状況に関するものであった²⁾。先述のように、第 3 章の分析では、定員充足状況が

より深刻なことが教育の質保証の実現を阻害する要因となる可能性が確認されているが、これは上述の観点のいずれかに含まれるものというよりは、いずれの前提にもなっているものだと整理することができるかと判断した。また、残る2件のデータは、上述の観点のいずれにも分類することのできないものであったため、分析対象から除外することとした³⁾。

以上を踏まえて、次節以降では、ボーダーフリー大学における教育の質保証の実現を阻害する可能性のある要因について、学生側に起因する要因(①)、教員側に起因する要因(②)、大学側に起因する要因(③)といった3つの観点から分析を行うこととする。分析の枠組みについては、図1を参照されたい。

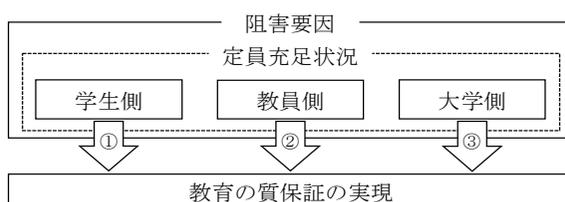


図1 分析の枠組み

3. 学生側に起因する要因

まず本節では、学生側に起因する要因についてみていきたい。自由記述の内容を整理した結果、これに該当する要因については、「学習面での問題を抱えている学生の存在」、「学生の学習面での多様性」といった要因を抽出することができた。以下では、ボーダーフリー大学の学部長の実際の記述を引用しながら、それぞれについてみていきたい。なお、以降の自由記述は、すべて原文ママで掲載している。

(1) 学習面での問題を抱えている学生の存在

まず、「学習面での問題を抱えている学生の存在」という要因に該当するのが、以下に示した自由記述である。

- ・ 入学の段階で、決定的に学力、学習するのに必要な意欲、身体性を十分に持ち合わせない学生が多い。（50%以上 80%未満, BF, 教育学）
- ・ 基礎学力（高校迄）が確保されていない。（80%以上 100%未満, 40, 社会科学系）

「決定的に学力、学習するのに必要な意欲、身体性を十分に持ち合わせない学生が多い」、「基礎学力（高校迄）が確保されていない」といった記述からは、大学で学ぶために最低限必要な基礎学力、学習習慣や学習レディネスが欠如した状態の学生を多く受け入れている

るボーダーフリー大学（学部）の姿がうかがえる。このような「学習面での問題を抱えている学生の存在」がボーダーフリー大学における教育の質保証の実現を阻害する要因の一つとなっている可能性がある。なお、先述のように、第3章の分析では、学習面での問題を抱えている学生をより多く受け入れていることが、教育の質保証の実現を阻害する要因となる可能性が確認されている。

（2）学生の学習面での多様性

本調査の結果からも確認できるように、学習面での問題を抱えている学生を多く受け入れているボーダーフリー大学（学部）は決して少なくない（基礎集計表の間1を参照）。しかしながら、ここで留意しておかなければならないのは、学生が抱えている学習面での問題は「一様」ではないということである。すなわち、学生によって学習面での問題をどの程度抱えているのかは大きく異なっているのである。そうした「学生の学習面での多様性」という要因に該当するのが、以下に示した自由記述である。

- ・ 学生の質が管理が難しいくらいに分散している。（50%以上 80%未満，BF，社会科学系）
- ・ 学生の学力や態度が多様化し、差異が大きい。（80%以上 100%未満，BF，社会科学系）
- ・ 学生のレベルの差が激しいこと（80%以上 100%未満，42.5，理・工学系）

「学生の質が管理が難しいくらいに分散している」、「学生の学力や態度が多様化し、差異が大きい」、「学生のレベルの差が激しい」といった記述からは、基礎学力、学習習慣や学習レディネスの欠如の程度が異なる様々な学生を受け入れているボーダーフリー大学（学部）の姿がうかがえる。このような「学生の学習面での多様性」がボーダーフリー大学における教育の質保証の実現を阻害する要因の一つとなっている可能性がある。

以上みてきたように、「学習面での問題を抱えている学生の存在」、「学生の学習面での多様性」といった学生側に起因する要因が、ボーダーフリー大学における教育の質保証の実現を阻害する要因となっている可能性がある。特に「学生の学習面での多様性」という要因については、第3章の分析枠組みでは考慮されていなかったが、教育の質保証の実現を阻害しうる留意しておきたい要因であると考えられる。

4. 教員側に起因する要因

続いて本節では、教員側に起因する要因についてみていきたい。自由記述の内容を整理した結果、これに該当する要因については、「教員間の認識の隔たりの大きさ」、「一部教員の質保証の必要性に対する認識不足」、「明確で具体的な到達目標の未設定」といった要因を抽出することができた。以下では、ボーダーフリー大学の学部長の実際の記述を引用しながら、それぞれについてみていきたい。

(1) 教員間の認識の隔たりの大きさ

まず、「教員間の認識の隔たりの大きさ」という要因に該当するのが、以下に示した自由記述である。

- ・ 教員の考え方がバラバラ、コンセンサスがとれない。(80%以上 100%未満, BF, 理・工学系)
- ・ 教員間の意見の相違。(80%以上 100%未満, BF, 社会科学系)
- ・ 教員間の意識の差があること。(80%以上 100%未満, BF, その他)

「教員の考え方がバラバラ、コンセンサスがとれない」、「教員間の意見の相違」、「教員間の意識の差がある」といった記述からは、同じ学部所属であっても教員間の認識に大きな隔たりがあるボーダーフリー大学(学部)の姿がうかがえる。このような「教員間の認識の隔たりの大きさ」がボーダーフリー大学における教育の質保証の実現を阻害する要因の一つとなっている可能性がある。

(2) 一部教員の質保証の必要性に対する認識不足

教員間の認識の大きな隔たりは、教育の質保証の必要性に対する認識についても例外ではない。そうした「一部教員の質保証の必要性に対する認識不足」という要因に該当するのが、以下に示した自由記述である。

- ・ 教員の中にもこのような問題に対する関心が低く協力を得ることが難しい者が多い。(50%以上 80%未満, 35, 社会科学系)
- ・ 質保証の必要性に関する認識のちが(低い教員も若干存在する)による学部としての不統一。(80%以上 100%未満, BF, その他)

「教員の中にもこのような問題に対する関心が低く協力を得ることが難しい者が多い」、「質保証の必要性に関する認識のちが(低い教員も若干存在する)」といった記述からは、教育の質保証の必要性すら十分に認識していないボーダーフリー大学教員の姿がうかがえる。このような「一部教員の質保証の必要性に対する認識不足」がボーダーフリー大学における教育の質保証の実現を阻害する要因の一つとなっている可能性がある。

(3) 明確で具体的な到達目標の未設定

先述の「教員間の認識の隔たりの大きさ」と「一部教員の質保証の必要性に対する認識不足」が教員個人に起因する要因であるのに対して、教員集団に起因する「明確で具体的な到達目標の未設定」という要因に該当するのが、以下に示した自由記述である。

- ・ 担当者個々に委ねられているため、統一的な具体的なものの構築が未完となっている。

(50%未満, BF, その他)

- ・ 基準の未設定 (50%以上 80%未満, 35, 社会科学系)
- ・ 各授業科目で, 何をどこまで理解 (あるいは技術を身に付けたら) できたら, 質保証されるのかの基準が, 明確に定められていないのが妨げの要因。 (50%以上 80%未満, 37.5, 理・工学系)

「統一的な具体的なものの構築が未完となっている」, 「基準の未設定」といった記述からは, そもそも何を保証するのかといった指標が設定されていないボーダーフリー大学(学部)の姿がうかがえる。だからこそ, 「各授業科目で, 何をどこまで理解 (あるいは技術を身に付けたら) できたら, 質保証されるのかの基準が, 明確に定められていない」ことにもなるのであろう。このような「明確で具体的な到達目標の未設定」がボーダーフリー大学における教育の質保証の実現を阻害する要因の一つとなっている可能性がある。なお, 先述のように, 第3章の分析では, (卒業時における) 明確で具体的な到達目標の設定と教員間での共有が, 教育の質保証の実現を促進する要因となる可能性が確認されている。

以上みてきたように, 「教員間の認識の隔たりの大きさ」, 「一部教員の質保証の必要性に対する認識不足」, 「明確で具体的な到達目標の未設定」といった教員側に起因する要因が, ボーダーフリー大学における教育の質保証の実現を阻害する要因となっている可能性がある。特に「教員間の認識の隔たりの大きさ」, 「一部教員の質保証の必要性に対する認識不足」といった要因については, 第3章の分析枠組みでは考慮されていなかったが, 教育の質保証の実現を阻害しうる留意しておきたい要因であると考えられる。

5. 大学側に起因する要因

最後に本節では, 大学側に起因する要因についてみていきたい。自由記述の内容を整理した結果, これに該当する要因については, 「人件費の削減による教員数の不足」, 「多忙化による教育活動に対する時間的制約」, 「経営陣の質保証の必要性に対する認識不足」といった要因を抽出することができた。以下では, ボーダーフリー大学の学部長の実際の記述を引用しながら, それぞれについてみていきたい。

(1) 人件費の削減による教員数の不足

まず, 「人件費の削減による教員数の不足」という要因に該当するのが, 以下に示した自由記述である。

- ・ 人件費削減による教員不足。 (80%以上 100%未満, 35, 人文科学系)
- ・ 教員の絶対数の不足 (50%以上 80%未満, BF, 社会科学系)
- ・ MAN POWER 不足 (80%以上 100%未満, BF, 社会科学系)

「人件費削減による教員不足」,「教員の絶対数の不足」,「MAN POWER 不足」といった記述からは,教育の質保証の実現はおろか,日々の教育活動に必要な教員数すら十分に確保することができていないボーダーフリー大学(学部)の姿がうかがえる。経営の安定化のための人件費の削減はボーダーフリー大学に限らず生じているわけであるが,とりわけボーダーフリー大学では深刻な状況にあるものと推察される。このような「人件費の削減による教員数の不足」がボーダーフリー大学における教育の質保証の実現を阻害する要因の一つとなっている可能性がある。

(2) 多忙化による教育活動に対する時間的制約

たとえ日々の教育活動に必要な教員数を確保することができていたとしても,教員は業務内容の拡大により多忙化しており,教育活動に対して十分なエフォートを割くことができなくなっている。そうした「多忙化による教育活動に対する時間的制約」という要因に該当するのが,以下に示した自由記述である。

- ・ 「教員」の職務内容とは考えられない業務分担が多いこと。(80%以上 100%未満, BF, その他)
- ・ 教育・研究以外の業務の増加 (80%以上 100%未満, 35, 芸術系)
- ・ 教員の大学運営業務が多く,手が回らない。評価や報告書の作成義務が年々増加,十分に教育の質保証にまで十分な時間と労力を割けない。(50%以上 80%未満, BF, 人文科学系)

「「教員」の職務内容とは考えられない業務分担が多い」,「教育・研究以外の業務の増加」といった記述からは,業務内容の拡大により多忙化しており,教育活動に対して十分なエフォートを割くことができなくなっているボーダーフリー大学教員の姿がうかがえる。そうした状況では,「十分に教育の質保証にまで十分な時間と労力を割けない」のは無理もないだろう。このような「多忙化による教育活動に対する時間的制約」がボーダーフリー大学における教育の質保証の実現を阻害する要因の一つとなっている可能性がある。

(3) 経営陣の質保証の必要性に対する認識不足

たとえ日々の教育活動に必要な教員数すら確保することができていなかったとしても,また,業務内容の拡大により多忙化しており,教育活動に対して十分なエフォートを割くことができなくなっていたとしても,教育の質保証の実現のために積極的に取り組みたいと考えるボーダーフリー大学教員は少なくないだろう⁴⁾。そうした「やる気」に水を差す「経営陣の質保証の必要性に対する認識不足」という要因に該当するのが,以下に示した自由記述である。

- ・ 教育の質に関して経営陣の関心が薄く,学部長の権限が制約されている。(50%以上 80

未満, 35, 社会科学系)

「教育の質に関して経営陣の関心が薄く」といった記述からは、教育の質保証の必要性すら十分に認識していないボーダーフリー大学の経営陣の姿がうかがえる。このような「経営陣の質保証の必要性に対する認識不足」がボーダーフリー大学における教育の質保証の実現を阻害する要因の一つとなっている可能性がある。

以上みてきたように、「人件費の削減による教員数の不足」、「多忙化による教育活動に対する時間的制約」、「経営陣の質保証の必要性に対する認識不足」といった大学側に起因する要因が、ボーダーフリー大学における教育の質保証の実現を阻害する要因となっている可能性がある。いずれも第3章の分析枠組みでは考慮されていなかったが、特に「経営陣の質保証の必要性に対する認識不足」という要因は、教員の「やる気」に水を差すだけに、教育の質保証の実現を阻害しうる留意しておきたい要因であると考えられる。

6. おわりに

本稿では、ボーダーフリー大学における教育の質保証の実現の妨げになっていることについての自由記述欄のデータをもとに、ボーダーフリー大学における教育の質保証の実現を阻害する可能性のある要因について試行的に整理を試みた。本稿で得られた主要な知見は以下の通りである。

第一に、「学習面での問題を抱えている学生の存在」、「学生の学習面での多様性」といった学生側に起因する要因が、教育の質保証の実現を阻害する要因となっている可能性があることが確認された。

第二に、「教員間の認識の隔たりの大きさ」、「一部教員の質保証の必要性に対する認識不足」、「明確で具体的な到達目標の未設定」といった教員側に起因する要因が、教育の質保証の実現を阻害する要因となっている可能性があることが確認された。

第三に、「人件費の削減による教員数の不足」、「多忙化による教育活動に対する時間的制約」、「経営陣の質保証の必要性に対する認識不足」といった大学側に起因する要因が、教育の質保証の実現を阻害する要因となっている可能性があることが確認された。

これらの知見には、第3章の仮説検証型のアプローチでは考慮されていなかった要因も複数ある。それらがすべて「目から鱗」の知見というわけではないものの、一定の枠組みに基づき意識的に明文化したことには一定の意義はあるだろう。仮説探索型のアプローチの一環として、ボーダーフリー大学における教育の質保証の実現を阻害する可能性のある要因について試行的に整理するという本稿の目的は一定程度果たされたといえよう。

その先に目指すのは、ボーダーフリー大学における教育の質保証を実現あるいは阻害する可能性のある要因を網羅的に整理することである。今後は、ボーダーフリー大学教員を

主対象として実施したアンケート調査（2018年9月下旬から2019年1月上旬にかけて実施）に設けている同様の自由記述欄のデータも用いることでそれを目指したいと考える。なお、本稿では、ボーダーフリー大学に相当する定員充足率100%未満のサンプルのみを分析対象としているため、本稿で得られた知見がボーダーフリー大学特有のものなのかどうか判別することができないという分析手法上の問題を抱えている。今後は、定員充足率100%以上のサンプルを比較対象に据えて、ボーダーフリー大学特有の知見を抽出していく作業も必要だと考える。

【注】

- 1) この時点で分析対象から除外した自由記述は、例えば以下のようなものである。
 - ・教員の意識はある程度あるが、授業の成果や学生への様々な対応の効果に結びついていない面があります。（50%以上 80%未満, 35, 人文科学系）
 - ・来年度から全学的に積極的に取り組む予定。（80%以上 100%未満, 35, 理・工学系）
- 2) 定員充足状況に関する自由記述は、例えば以下のようなものである。
 - ・根本的には定員を満たしていないため。（50%以上 80%未満, BF, 教育学）
 - ・学生の確保が優先～定員割れ（50%以上 80%未満, 35, 人文科学系）
- 3) この時点で分析対象から除外した自由記述は、以下のものである。
 - ・高校での指導不足（50%以上 80%未満, BF, 家政学）
 - ・指定校推薦で明らかに学力や学ぶ姿勢に問題がある生徒を推薦してくる高校があること。（50%以上 80%未満, BF, 教育学）
- 4) ボーダーフリー大学教員を主対象として実施したアンケート調査（2018年9月下旬から2019年1月上旬にかけて実施）では、教育の質保証に「積極的に取り組んでいる」あるいは「どちらかといえば積極的に取り組んでいる」ボーダーフリー大学教員は9割近くに及んでいるという結果が得られた。

参考文献

- 居神浩（2013）「マージナル大学における教学改革の可能性」濱中淳子（代表）『大衆化する大学－学生の多様化をどうみるか』岩波書店，75-103 頁。
- 川嶋太津夫（2013）「今，大学に求められる高等教育の質保証」濱名篤ほか編『大学改革を成功に導くキーワード 30－「大学冬の時代」を生き抜くために』学事出版，8-14 頁。
- 葛城浩一（2013）「ボーダーフリー大学における学士課程教育の質保証－一定の学修時間を担保する質保証の枠組みに着目して」『KSU 高等教育研究』第 2 号，21-32 頁。
- 葛城浩一（2015）「ボーダーフリー大学生が学習面で抱えている問題－実態と克服の途」居神浩編『ノンエリートのためのキャリア教育論－適応と抵抗そして承認と参加』法律文化社，29-49 頁。
- 葛城浩一（2016）「ボーダーフリー大学における学士課程教育の質保証－当該大学教員の意識に着目して」『大学教育研究』第 24 号，53-66 頁。
- 葛城浩一（2017）「ボーダーフリー大学教員の学士課程教育の質保証に対する意識」『大学論集』第 49 集，53-68 頁。
- 葛城浩一（2018）「多様化した学生に対する大学と教員－「ボーダーフリー大学」に着目して」『高等教育研究』第 21 集，107-125 頁。
- 三宅義和（2014）「大学の選抜性とは」三宅義和・居神浩・遠藤竜馬ほか『大学教育の変貌を考える』ミネルヴァ書房，1-25 頁。
- 小川洋（2016）『消えゆく「限界大学」－私立大学定員割れの構造』白水社。
- 山田浩之（2009）「ボーダーフリー大学における学生調査の意義と課題」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第三部第 58 号，27-35 頁。

資料編

調査票

「ユニバーサル化時代における
学士課程教育の質保証に関する調査」

基礎集計表

問7. 大衆化した大学における教育の質保証に関する以下のような意見について、貴学部にも所属する教員としての立場からどのようにお考えになりますか。

	反対	←	→	賛成
1) 教育の質保証に積極的に取り組まなければならない	①	②	③	④
2) 教育の質保証を実現するためには、出口管理の強化を行うべきである	①	②	③	④
3) 教育の質保証を実現するためには、第三者機関によって「何を」「どこまで」というような基準が定められるべきである	①	②	③	④
4) 教育の質保証を実現するためには、大学の種別化・機能分化を行うべきである(例えば、第一種大学/第二種大学、など)	①	②	③	④
5) 教育の質保証を実現するためには、教員の研究にかけるエフォートはできる限り小さくすべきである	①	②	③	④
6) 教育の質保証を実現するためには、教育活動のみを職務とする教育専従教員が必要である	①	②	③	④
7) 十分な支援を行ったとしても一定の基準を満たせない学生は出てきてしまうため、教育の質保証は厳格に考えるべきではない	①	②	③	④

II. 貴大学（あるいは学部）における教員評価（一定期間ごとの評価）についてうかがいます。

問8. 貴大学(学部) では、教員評価は行われていますか。

- ①行われており、教育活動も評価の対象である
- ②行われていない、あるいは、行われているが、教育活動は評価の対象外である(問13へ)

問9. 貴大学(学部) における教員評価では、あなたの教育活動はどのような評価をされることが多いですか。

- ①相対的に高い評価(例えば5段階評価だと5や4に相当)
- ②相対的に中程度の評価(例えば5段階評価だと3に相当)
- ③相対的に低い評価(例えば5段階評価だと2や1に相当)
- ④教育活動のみの評価はわからない、あるいは、まだ評価をされたことがない(問13へ)

問10. 貴大学(学部) における教員評価において、教育活動に対する評価が高い教員(例えば5段階評価だと5)と中程度の教員(例えば5段階評価だと3)とでは、処遇(例えば、給与(賞与等含む)や個人研究費の増額、業務の負担減など)にどの程度の差が生じますか(あるいは、生じると思われますか)。

- ①大きな差が生じる
- ②どちらかといえば大きな差が生じる
- ③どちらかといえば大きな差は生じない(問12へ)
- ④大きな差は生じない(問12へ)

問11. 問10で「①大きな差が生じる」「②どちらかといえば大きな差が生じる」と回答された方にお尋ねします。その差とはどのようなものですか(あるいは、どのようなものだと思いますか)。具体的にお書きください。

例) 教育活動に対する評価が高い教員は中程度の教員よりも、年俸が〇万円ほど高い。

- 問12. 貴大学(学部)における教員評価において、教育活動に対する評価が低い教員(例えば5段階評価だと1)には、処遇にどのような影響が生じますか(あるいは、生じると思いますか)。(あてはまるものすべてを選択)
- ①職を失う恐れがある
 - ②昇進や任期更新ができない恐れがある
 - ③所属教員としての肩身が狭くなる恐れがある
 - ④給与(賞与等含む)や個人研究費が著しく減額される恐れがある
 - ⑤業務の負担が著しく増加する恐れがある
 - ⑥その他()

- 問13. 貴大学(学部)における教員評価において、教育活動に対する評価の高低によって処遇に(より)大きな差が生じるとした場合、あなたの教育活動への取り組み方は変わりますか。
- ①評価を意識せずこれまで通りに取り組む(そう熱心に取り組むわけではない)
 - ②評価を意識せずこれまで通りに熱心に取り組む(問15へ)
 - ③評価を意識してこれまで以上に熱心に取り組む(問15へ)

問14. 問13で「①評価を意識せずこれまで通りに取り組む」と回答された方にお尋ねします。

教育活動に対する評価の高低によって処遇に(より)大きな差が生じたとしても、あなたの教育活動への取り組み方が変わらないのはなぜですか。その理由を具体的にお書きください。

例) 教育活動に対する学内での評価よりも、研究活動に対する学外での評価を重視しているため。

Ⅲ. あなたの教育・研究活動等についてうかがいます。

問15. あなたの教育と研究に対する関心はどの程度高いですか。

- 教育:①関心が低い ②どちらかといえば関心が低い ③どちらかといえば関心が高い ④関心が高い
 研究:①関心が低い ②どちらかといえば関心が低い ③どちらかといえば関心が高い ④関心が高い

問16. あなたが平均的な1週間に仕事をする時間を100と考え、各領域にどのくらいの時間を割いているか、学期中と休暇中に分けて、その割合を記入してください。

		学期中	休暇中
所属している大学での業務	教育	()%	()%
	研究	()%	()%
	大学管理・運営	()%	()%
	社会貢献・連携	()%	()%
所属している大学以外での業務		()%	()%
合計		100%	100%

問17. あなたは、以下のような教育活動をどの程度行っていますか。

	行っていない	←	→	行っている
1) 各授業での学びが学生にとってどのような意味があるのか十分説明すること	①	②	③	④
2) 学生が授業中に自分の意見や考えを述べる機会を積極的に設けること	①	②	③	④
3) 学生が授業に参加するグループワークなどの機会を積極的に設けること	①	②	③	④
4) 学生の授業外学修を促進する機会(課題など)を積極的に設けること	①	②	③	④
5) 適切なコメントを付して課題などの提出物を返却すること	①	②	③	④
6) 一定の知識・技能等が身についているかどうかに基づき成績評価すること	①	②	③	④

問18. あなたは、過去3年間に以下のような研究成果をどの程度あげましたか。

- 1) 学会等での発表 ①ない ②3回以内 ③4~6回 ④7回以上
 2) 学術書、学術雑誌に発表した論文(第一筆者) ①ない ②3本以内 ③4~6本 ④7本以上
 3) 学会誌相当のレフリー論文(第一筆者) ①ない ②1本 ③2本 ④3本以上
 4) 科学研究費の採択 ①ない ②ある(分担者) ③ある(代表者) ④ある(代表者及び分担者)

IV. 最後に、あなた自身のことについてうかがいます。

問19. あなたの基本的属性について教えてください。

- 1) 年齢 ①20~40代前半 ②40代後半 ③50代前半 ④50代後半 ⑤60代~
 2) 最高学位 ①学士 ②修士 ③博士 ④その他()
 3) 現在の職階 ①講師 ②准教授 ③教授 ④特任教員等()

問20. あなたは、以下のような教員に該当しますか。

- 1) 貴学部(あるいは大学)における教育に責任を負う教員(例えば教務委員など) ①該当しない ②該当する
 2) 職務として研究活動が求められない教員(例えば教育専任教員や実務家教員など) ①該当しない ②該当する

問21. あなたは、これから5年以内に、他の大学等に異動あるいは退職する予定がありますか。

- ①異動あるいは退職する予定はないし、そうしたいとも考えていない
 ②異動あるいは退職する予定はないが、できればそうしたいと考えている
 ③異動あるいは退職せざるを得ない(例えば、任期付雇用で継続雇用の見通しが無いため、定年のため、など)
 ④異動あるいは退職する予定がある(③以外)

問22. あなたは、今の仕事や教育・研究活動等についてどのように感じていますか。

	あてはまらない	←	→	あてはまる
1) 私は今の仕事に対して全般的に満足している	①	②	③	④
2) 私は今の教育活動に対して全般的に満足している	①	②	③	④
3) 私は今の研究活動に対して全般的に満足している	①	②	③	④
4) 教育と研究との両立は非常に難しい	①	②	③	④

問23. あなたには、貴大学・学部の経営状態や定員充足状況等についての危機意識はどの程度ありますか。

- ①まったくない ②どちらかといえばない ③どちらかといえばある ④かなりある

アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。

回答者の概要

	全体	定員充足率				偏差値							
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5	
回答率	25.3%	27.8%	28.9%	23.1%	24.9%	30.0%	27.8%	24.5%	22.6%	26.6%	21.6%	19.7%	
N	350	10	59	58	222	64	73	61	44	51	30	26	
		学部系統											
		歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
回答率	23.1%	27.8%	33.5%	32.1%	18.2%	27.3%	25.1%	18.6%	27.8%	20.0%	12.5%	18.1%	
N	3	10	62	35	2	51	103	13	22	2	7	39	

注：定員充足率については『大学の真の実力 情報公開BOOK』（旺文社）に基づき、2016年度の単年度定員充足率と2017年度の単年度定員充足率を算出し、その平均値を用いて分類している。以下同様。

偏差値については『2018年版 大学ランキング』（朝日新聞出版）に基づき分類している。以下同様。

学部系統については『今日の私学財政』（日本私立学校振興・共済事業団広報）を参考に分類している。以下同様。

I. 学習面での多様性の問題についてうかがいます。

問1. 貴学部では、以下のような学習面での問題を抱えている入学者をどの程度受け入れておられますか。印象で結構ですので、貴学部の入学者全体に占めるおおよその割合をお書きください。

1) 所属学部で学ぶ上で必要となる基礎学力の著しい欠如(例えば、義務教育レベル)

	全体	定員充足率				偏差値							
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5	
平均値	12.6%	11.3%	18.9%	17.8%	9.5%	20.4%	15.4%	9.3%	12.8%	7.1%	8.9%	7.2%	
中央値	10.0%	9.0%	10.0%	10.0%	5.0%	10.0%	10.0%	5.0%	10.0%	5.0%	7.5%	4.0%	
最小値	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
最大値	80.0%	40.0%	80.0%	80.0%	50.0%	80.0%	60.0%	40.0%	50.0%	30.0%	40.0%	30.0%	
標準偏差	14.5	11.8	19.1	19.2	10.4	20.9	14.0	9.3	15.3	7.8	10.0	9.2	
N	342	10	57	56	218	63	71	59	43	51	28	26	
		学部系統											
		歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
平均値	2.7%	12.7%	10.3%	12.4%	4.0%	12.3%	14.2%	13.7%	13.0%	7.5%	11.1%	13.1%	
中央値	0.0%	12.5%	10.0%	10.0%	4.0%	5.0%	10.0%	10.0%	5.0%	7.5%	5.0%	10.0%	
最小値	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	3.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	5.0%	3.0%	0.0%	
最大値	8.0%	30.0%	60.0%	50.0%	5.0%	80.0%	80.0%	40.0%	80.0%	10.0%	30.0%	60.0%	
標準偏差	4.6	9.2	11.1	14.7	1.4	17.2	15.3	12.9	20.2	3.5	10.1	13.2	
N	3	10	61	33	2	49	101	13	21	2	7	39	

2) 学習習慣や学習レディネスの著しい欠如

	全体	定員充足率				偏差値						
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5
平均値	17.4%	13.5%	22.6%	23.8%	14.6%	25.8%	20.0%	14.5%	19.4%	13.6%	11.8%	7.0%
中央値	10.0%	10.0%	20.0%	20.0%	10.0%	20.0%	15.0%	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%	5.0%
最小値	0.0%	5.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
最大値	90.0%	30.0%	80.0%	80.0%	90.0%	90.0%	60.0%	50.0%	80.0%	60.0%	40.0%	25.0%
標準偏差	17.2	10.0	20.9	20.6	14.7	21.9	16.7	13.7	19.7	14.7	10.1	7.6
N	341	10	56	57	217	62	72	60	42	51	27	26
		学部系統										
	歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
平均値	3.3%	16.8%	13.1%	15.8%	4.0%	15.6%	22.3%	14.8%	17.0%	7.5%	8.6%	19.9%
中央値	5.0%	10.0%	10.0%	10.0%	4.0%	10.0%	20.0%	10.0%	6.0%	7.5%	5.0%	20.0%
最小値	0.0%	3.0%	0.0%	0.0%	3.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	5.0%	2.0%	0.0%
最大値	5.0%	60.0%	50.0%	70.0%	5.0%	80.0%	90.0%	40.0%	80.0%	10.0%	30.0%	60.0%
標準偏差	2.9	16.4	11.5	16.5	1.4	17.3	20.1	12.2	23.1	3.5	9.8	14.7
N	3	10	59	33	2	50	101	13	21	2	7	39

3) 学習への動機づけの著しい欠如

	全体	定員充足率				偏差値						
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5
平均値	15.9%	11.0%	21.1%	21.5%	13.3%	23.4%	19.7%	11.7%	15.6%	13.7%	10.8%	7.6%
中央値	10.0%	10.0%	10.0%	15.0%	10.0%	20.0%	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%	5.0%
最小値	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
最大値	80.0%	20.0%	80.0%	80.0%	80.0%	80.0%	80.0%	50.0%	80.0%	80.0%	40.0%	30.0%
標準偏差	16.7	7.4	20.3	19.9	14.4	19.3	18.5	11.6	17.7	17.0	10.5	7.1
N	339	10	55	56	217	61	71	60	42	51	27	26
		学部系統										
	歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
平均値	2.7%	10.5%	11.5%	15.3%	4.0%	13.3%	22.2%	11.4%	13.2%	7.5%	9.0%	17.5%
中央値	3.0%	10.0%	10.0%	10.0%	4.0%	10.0%	15.0%	10.0%	6.0%	7.5%	5.0%	10.0%
最小値	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	3.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	5.0%	0.0%	0.0%
最大値	5.0%	20.0%	50.0%	70.0%	5.0%	50.0%	80.0%	30.0%	80.0%	10.0%	40.0%	70.0%
標準偏差	2.5	7.2	10.9	16.3	1.4	13.4	21.0	10.4	19.1	3.5	13.8	14.7
N	3	10	59	32	2	49	101	13	21	2	7	39

問2. 問1のような学習面での問題の背景に、障害等の理由が疑われるような学生はどの程度おられますか。印象で結構ですので、貴学部の入学者全体に占めるおおよその割合をお答えください。

	全体	定員充足率				偏差値						
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5
①0%	7.4%	20.0%	1.8%	3.5%	9.4%	0.0%	1.4%	8.6%	14.6%	8.3%	17.9%	16.0%
②1～5%	68.5%	60.0%	57.1%	73.7%	70.8%	63.5%	70.8%	74.1%	58.5%	77.1%	64.3%	68.0%
③6～10%	17.3%	20.0%	17.9%	15.8%	17.0%	20.6%	16.7%	12.1%	24.4%	12.5%	17.9%	16.0%
④11～15%	3.6%	0.0%	10.7%	3.5%	1.9%	6.3%	8.3%	1.7%	0.0%	2.1%	0.0%	0.0%
⑤16～20%	1.2%	0.0%	5.4%	0.0%	0.5%	3.2%	1.4%	1.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
⑥21～25%	0.9%	0.0%	3.6%	0.0%	0.5%	3.2%	0.0%	0.0%	2.4%	0.0%	0.0%	0.0%
⑦26%～	1.2%	0.0%	3.6%	3.5%	0.0%	3.2%	1.4%	1.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
N	336	10	56	57	212	63	72	58	41	48	28	25
		学部系統										
	歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
①0%	0.0%	10.0%	13.8%	11.4%	0.0%	6.1%	4.0%	7.7%	5.0%	50.0%	0.0%	5.4%
②1～5%	100.0%	90.0%	63.8%	62.9%	50.0%	65.3%	72.0%	76.9%	75.0%	50.0%	71.4%	64.9%
③6～10%	0.0%	0.0%	15.5%	22.9%	50.0%	20.4%	15.0%	7.7%	20.0%	0.0%	28.6%	18.9%
④11～15%	0.0%	0.0%	5.2%	2.9%	0.0%	6.1%	3.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	5.4%
⑤16～20%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2.0%	2.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2.7%
⑥21～25%	0.0%	0.0%	1.7%	0.0%	0.0%	0.0%	1.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2.7%
⑦26%～	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	3.0%	7.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
N	2	10	58	35	2	49	100	13	20	2	7	37

問3. 貴学部では、基礎学力等の学習面での多様性の問題に対応するために、以下のような取組を行っていますか。

学習面で問題を抱えている学生のみが対象、あるいはそうした学生が主対象の取組

1) 学習面で問題を抱えている学生が対象／主対象の授業(補習授業以外)

	全体	定員充足率				偏差値						
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5
①行っていない	67.6%	80.0%	76.3%	49.1%	69.9%	66.7%	63.4%	68.3%	65.1%	70.0%	70.0%	80.0%
②行っている	32.4%	20.0%	23.7%	50.9%	30.1%	33.3%	36.6%	31.7%	34.9%	30.0%	30.0%	20.0%
N	343	10	59	57	216	63	71	60	43	50	30	25
		学部系統										
	歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
①行っていない	33.3%	60.0%	64.4%	47.1%	50.0%	78.4%	73.3%	61.5%	68.2%	50.0%	57.1%	73.7%
②行っている	66.7%	40.0%	35.6%	52.9%	50.0%	21.6%	26.7%	38.5%	31.8%	50.0%	42.9%	26.3%
N	3	10	59	34	2	51	101	13	22	2	7	38

2) 学習面で問題を抱えている学生が対象／主対象の補習授業(単位あり)

	全体	定員充足率				偏差値						
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5
①行っていない	79.4%	70.0%	71.2%	68.4%	84.9%	81.3%	67.6%	85.0%	86.0%	76.5%	76.7%	92.0%
②行っている	20.6%	30.0%	28.8%	31.6%	15.1%	18.8%	32.4%	15.0%	14.0%	23.5%	23.3%	8.0%
N	345	10	59	57	218	64	71	60	43	51	30	25
学部系統												
	歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
①行っていない	33.3%	60.0%	83.3%	58.8%	100.0%	84.3%	86.3%	69.2%	90.9%	50.0%	42.9%	78.9%
②行っている	66.7%	40.0%	16.7%	41.2%	0.0%	15.7%	13.7%	30.8%	9.1%	50.0%	57.1%	21.1%
N	3	10	60	34	2	51	102	13	22	2	7	38

3) 学習面で問題を抱えている学生が対象／主対象のプログラム(正課外を含む)

	全体	定員充足率				偏差値						
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5
①行っていない	62.2%	70.0%	54.2%	53.6%	66.0%	63.5%	62.0%	51.7%	65.1%	73.5%	48.3%	72.0%
②行っている	37.8%	30.0%	45.8%	46.4%	34.0%	36.5%	38.0%	48.3%	34.9%	26.5%	51.7%	28.0%
N	341	10	59	56	215	63	71	60	43	49	29	25
学部系統												
	歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
①行っていない	66.7%	30.0%	54.1%	54.3%	50.0%	68.6%	77.0%	53.8%	55.0%	50.0%	71.4%	47.2%
②行っている	33.3%	70.0%	45.9%	45.7%	50.0%	31.4%	23.0%	46.2%	45.0%	50.0%	28.6%	52.8%
N	3	10	61	35	2	51	100	13	20	2	7	36

学習面で優秀な学生のみが対象、あるいはそうした学生が主対象の取組

1) 学習面で優秀な学生が対象／主対象の授業

	全体	定員充足率				偏差値						
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5
①行っていない	75.0%	40.0%	81.0%	71.4%	76.3%	67.2%	74.3%	72.9%	81.0%	76.0%	75.9%	92.0%
②行っている	25.0%	60.0%	19.0%	28.6%	23.7%	32.8%	25.7%	27.1%	19.0%	24.0%	24.1%	8.0%
N	340	10	58	56	215	64	70	59	42	50	29	25
学部系統												
	歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
①行っていない	100.0%	88.9%	93.1%	73.5%	50.0%	80.4%	64.4%	66.7%	77.3%	100.0%	57.1%	71.1%
②行っている	0.0%	11.1%	6.9%	26.5%	50.0%	19.6%	35.6%	33.3%	22.7%	0.0%	42.9%	28.9%
N	3	9	58	34	2	51	101	12	22	2	7	38

2) 学習面で優秀な学生が対象／主対象のプログラム(正課外を含む)

	全体	定員充足率				偏差値						
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5
①行っていない	63.8%	30.0%	67.2%	57.1%	66.5%	50.0%	57.1%	66.1%	62.8%	73.5%	72.4%	88.0%
②行っている	36.2%	70.0%	32.8%	42.9%	33.5%	50.0%	42.9%	33.9%	37.2%	26.5%	27.6%	12.0%
N	340	10	58	56	215	64	70	59	43	49	29	25
		学部系統										
	歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
①行っていない	100.0%	75.0%	86.4%	61.8%	50.0%	68.6%	54.5%	66.7%	68.2%	100.0%	42.9%	44.7%
②行っている	0.0%	25.0%	13.6%	38.2%	50.0%	31.4%	45.5%	33.3%	31.8%	0.0%	57.1%	55.3%
N	3	8	59	34	2	51	101	12	22	2	7	38

問4. 貴学部では、以下のような学習面での問題を克服できないまま卒業する学生はどの程度おられますか。印象で結構ですので、貴学部の入学者全体に占めるおおよその割合をお書きください。

1) 所属学部で学ぶ上で必要となる基礎学力の著しい欠如

	全体	定員充足率				偏差値						
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5
平均値	7.0%	6.5%	9.8%	10.6%	5.2%	11.0%	8.5%	5.0%	7.5%	3.8%	4.9%	4.1%
中央値	5.0%	5.0%	10.0%	5.0%	3.0%	10.0%	5.0%	3.0%	5.0%	1.0%	2.0%	1.0%
最小値	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
最大値	80.0%	20.0%	40.0%	80.0%	40.0%	70.0%	60.0%	30.0%	80.0%	30.0%	30.0%	30.0%
標準偏差	10.1	6.7	9.3	16.8	7.4	11.5	10.8	7.1	14.2	6.4	6.9	6.9
N	327	8	57	54	207	63	69	55	41	49	25	24
		学部系統										
	歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
平均値	1.0%	0.6%	5.3%	5.8%	1.8%	6.9%	9.6%	5.4%	4.5%	6.0%	7.9%	7.5%
中央値	0.0%	0.0%	2.5%	5.0%	1.8%	5.0%	5.0%	4.0%	2.5%	6.0%	5.0%	5.0%
最小値	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2.0%	2.0%	0.0%
最大値	3.0%	5.0%	60.0%	30.0%	2.5%	40.0%	80.0%	20.0%	20.0%	10.0%	20.0%	40.0%
標準偏差	1.7	1.6	9.4	7.7	1.1	8.5	13.2	6.1	5.3	5.7	6.8	9.4
N	3	10	54	33	2	46	99	12	20	2	7	38

2) 学習習慣や学習レディネスの著しい欠如

	全体	定員充足率				偏差値						
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5
平均値	8.7%	5.9%	11.4%	12.9%	6.9%	14.0%	10.5%	6.4%	8.7%	5.0%	6.2%	4.4%
中央値	5.0%	7.5%	10.0%	5.0%	5.0%	10.0%	5.0%	5.0%	5.0%	2.5%	3.0%	2.0%
最小値	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
最大値	80.0%	10.0%	50.0%	80.0%	80.0%	80.0%	80.0%	30.0%	80.0%	50.0%	30.0%	30.0%
標準偏差	12.2	4.6	11.1	19.5	9.6	15.8	13.2	8.0	14.6	8.3	7.6	6.7
N	326	8	57	54	206	63	69	55	40	49	25	24
		学部系統										
	歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
平均値	0.7%	1.2%	6.1%	7.0%	1.8%	8.4%	13.4%	4.8%	4.5%	6.0%	9.3%	8.2%
中央値	0.0%	0.0%	5.0%	5.0%	1.8%	5.0%	10.0%	4.0%	5.0%	6.0%	5.0%	5.0%
最小値	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2.0%	2.0%	0.0%
最大値	2.0%	5.0%	50.0%	50.0%	2.5%	40.0%	80.0%	10.0%	10.0%	10.0%	30.0%	30.0%
標準偏差	1.2	2.0	8.8	9.6	1.1	8.8	17.5	4.2	3.8	5.7	10.1	8.4
N	3	10	53	33	2	46	99	12	20	2	7	38

II. 教員への対応等についておたずねします。

問5. 貴学部では、教員に対して以下のような取組を行うよう、どの程度働きかけていますか。

1) 各授業での学びが学生にとってどのような意味があるのか十分説明すること

	全体	定員充足率				偏差値						
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5
①働きかけていない	4.0%	10.0%	1.7%	5.3%	4.1%	3.2%	2.7%	0.0%	4.7%	7.8%	10.0%	3.8%
②どちらかといえば働きかけていない	15.0%	10.0%	13.8%	12.3%	16.3%	19.4%	9.6%	16.4%	9.3%	15.7%	16.7%	23.1%
③どちらかといえば働きかけている	40.6%	20.0%	44.8%	47.4%	38.5%	51.6%	49.3%	42.6%	27.9%	25.5%	43.3%	30.8%
④働きかけている	40.3%	60.0%	39.7%	35.1%	41.2%	25.8%	38.4%	41.0%	58.1%	51.0%	30.0%	42.3%
N	347	10	58	57	221	62	73	61	43	51	30	26
		学部系統										
	歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
①働きかけていない	0.0%	0.0%	3.3%	0.0%	0.0%	7.8%	5.9%	7.7%	0.0%	50.0%	0.0%	0.0%
②どちらかといえば働きかけていない	0.0%	10.0%	8.2%	14.3%	0.0%	27.5%	13.7%	23.1%	9.1%	0.0%	42.9%	13.2%
③どちらかといえば働きかけている	0.0%	30.0%	32.8%	37.1%	50.0%	33.3%	52.9%	38.5%	31.8%	0.0%	14.3%	50.0%
④働きかけている	100.0%	60.0%	55.7%	48.6%	50.0%	31.4%	27.5%	30.8%	59.1%	50.0%	42.9%	36.8%
N	3	10	61	35	2	51	102	13	22	2	7	38

2) 学生が授業中に自分の意見や考えを述べる機会を積極的に設けること

	全体	定員充足率				偏差値							
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5	
①働きかけていない	2.9%	0.0%	0.0%	0.0%	4.5%	1.6%	0.0%	0.0%	7.0%	5.9%	6.7%	3.8%	
②どちらかといえば働きかけていない	15.2%	30.0%	8.5%	22.4%	14.5%	12.7%	15.1%	21.3%	4.7%	21.6%	20.0%	7.7%	
③どちらかといえば働きかけている	48.3%	30.0%	44.1%	48.3%	50.0%	36.5%	54.8%	47.5%	58.1%	39.2%	53.3%	53.8%	
④働きかけている	33.6%	40.0%	47.5%	29.3%	30.9%	49.2%	30.1%	31.1%	30.2%	33.3%	20.0%	34.6%	
N	348	10	59	58	220	63	73	61	43	51	30	26	
		学部系統											
		歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
①働きかけていない	0.0%	0.0%	1.6%	0.0%	0.0%	2.0%	5.9%	0.0%	0.0%	50.0%	0.0%	2.6%	
②どちらかといえば働きかけていない	0.0%	40.0%	18.0%	31.4%	0.0%	15.7%	9.8%	7.7%	4.5%	0.0%	42.9%	10.3%	
③どちらかといえば働きかけている	33.3%	40.0%	42.6%	37.1%	100.0%	47.1%	51.0%	76.9%	59.1%	50.0%	42.9%	46.2%	
④働きかけている	66.7%	20.0%	37.7%	31.4%	0.0%	35.3%	33.3%	15.4%	36.4%	0.0%	14.3%	41.0%	
N	3	10	61	35	2	51	102	13	22	2	7	39	

3) 学生が授業に参加するグループワークなどの機会を積極的に設けること

	全体	定員充足率				偏差値							
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5	
①働きかけていない	3.4%	0.0%	3.4%	3.5%	3.6%	3.1%	2.7%	0.0%	4.7%	5.9%	6.7%	3.8%	
②どちらかといえば働きかけていない	12.6%	40.0%	6.8%	17.5%	11.8%	14.1%	12.3%	13.3%	11.6%	11.8%	16.7%	7.7%	
③どちらかといえば働きかけている	42.2%	20.0%	40.7%	38.6%	44.8%	37.5%	45.2%	45.0%	37.2%	41.2%	46.7%	46.2%	
④働きかけている	41.7%	40.0%	49.2%	40.4%	39.8%	45.3%	39.7%	41.7%	46.5%	41.2%	30.0%	42.3%	
N	348	10	59	57	221	64	73	60	43	51	30	26	
		学部系統											
		歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
①働きかけていない	0.0%	0.0%	3.3%	2.9%	0.0%	3.9%	4.9%	0.0%	0.0%	50.0%	14.3%	0.0%	
②どちらかといえば働きかけていない	0.0%	10.0%	13.3%	31.4%	0.0%	15.7%	9.7%	7.7%	0.0%	0.0%	28.6%	7.7%	
③どちらかといえば働きかけている	33.3%	50.0%	36.7%	40.0%	100.0%	47.1%	44.7%	46.2%	40.9%	50.0%	57.1%	33.3%	
④働きかけている	66.7%	40.0%	46.7%	25.7%	0.0%	33.3%	40.8%	46.2%	59.1%	0.0%	0.0%	59.0%	
N	3	10	60	35	2	51	103	13	22	2	7	39	

4) 学生の授業外学修を促進する機会(課題など)を積極的に設けること

	全体	定員充足率				偏差値						
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5
①働きかけていない	2.3%	0.0%	3.4%	0.0%	2.7%	4.8%	0.0%	0.0%	2.3%	2.0%	10.0%	0.0%
②どちらかといえば働きかけていない	13.5%	20.0%	10.2%	14.3%	14.0%	15.9%	8.2%	13.1%	18.6%	20.0%	10.0%	7.7%
③どちらかといえば働きかけている	48.7%	60.0%	40.7%	48.2%	50.2%	41.3%	53.4%	47.5%	32.6%	56.0%	50.0%	65.4%
④働きかけている	35.4%	20.0%	45.8%	37.5%	33.0%	38.1%	38.4%	39.3%	46.5%	22.0%	30.0%	26.9%
N	347	10	59	56	221	63	73	61	43	50	30	26
		学部系統										
	歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
①働きかけていない	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2.0%	4.9%	0.0%	0.0%	50.0%	0.0%	2.6%
②どちらかといえば働きかけていない	0.0%	0.0%	20.0%	8.6%	0.0%	15.7%	16.7%	15.4%	0.0%	0.0%	28.6%	7.7%
③どちらかといえば働きかけている	33.3%	70.0%	41.7%	54.3%	50.0%	41.2%	52.0%	46.2%	50.0%	50.0%	57.1%	48.7%
④働きかけている	66.7%	30.0%	38.3%	37.1%	50.0%	41.2%	26.5%	38.5%	50.0%	0.0%	14.3%	41.0%
N	3	10	60	35	2	51	102	13	22	2	7	39

5) 適切なコメントを付して課題などの提出物を返却すること

	全体	定員充足率				偏差値						
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5
①働きかけていない	6.6%	0.0%	8.5%	5.3%	6.8%	9.5%	9.6%	1.6%	4.7%	6.0%	6.7%	7.7%
②どちらかといえば働きかけていない	23.6%	10.0%	15.3%	28.1%	25.5%	15.9%	26.0%	34.4%	20.9%	22.0%	30.0%	11.5%
③どちらかといえば働きかけている	44.7%	50.0%	50.8%	40.4%	43.6%	49.2%	45.2%	44.3%	37.2%	50.0%	46.7%	30.8%
④働きかけている	25.1%	40.0%	25.4%	26.3%	24.1%	25.4%	19.2%	19.7%	37.2%	22.0%	16.7%	50.0%
N	347	10	59	57	220	63	73	61	43	50	30	26
		学部系統										
	歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
①働きかけていない	0.0%	0.0%	4.9%	0.0%	0.0%	4.0%	12.7%	0.0%	0.0%	50.0%	14.3%	7.7%
②どちらかといえば働きかけていない	0.0%	30.0%	14.8%	37.1%	0.0%	28.0%	29.4%	23.1%	9.1%	0.0%	42.9%	12.8%
③どちらかといえば働きかけている	0.0%	40.0%	37.7%	31.4%	100.0%	48.0%	42.2%	61.5%	50.0%	50.0%	42.9%	61.5%
④働きかけている	100.0%	30.0%	42.6%	31.4%	0.0%	20.0%	15.7%	15.4%	40.9%	0.0%	0.0%	17.9%
N	3	10	61	35	2	50	102	13	22	2	7	39

6)一定の知識・技能等が身についているかどうかに基づき成績評価すること

	全体	定員充足率				偏差値						
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5
①働きかけていない	2.9%	0.0%	1.7%	1.8%	3.6%	0.0%	2.7%	1.6%	2.3%	5.9%	10.0%	0.0%
②どちらかといえば働きかけていない	11.5%	30.0%	8.5%	7.0%	12.7%	11.1%	11.0%	16.4%	7.0%	5.9%	16.7%	15.4%
③どちらかといえば働きかけている	45.4%	40.0%	50.8%	54.4%	42.1%	60.3%	50.7%	45.9%	39.5%	35.3%	36.7%	34.6%
④働きかけている	40.2%	30.0%	39.0%	36.8%	41.6%	28.6%	35.6%	36.1%	51.2%	52.9%	36.7%	50.0%
N	348	10	59	57	221	63	73	61	43	51	30	26
		学部系統										
	歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
①働きかけていない	0.0%	0.0%	3.3%	2.9%	0.0%	2.0%	4.9%	0.0%	0.0%	50.0%	0.0%	0.0%
②どちらかといえば働きかけていない	0.0%	0.0%	1.6%	8.6%	0.0%	23.5%	15.7%	15.4%	4.5%	0.0%	28.6%	7.7%
③どちらかといえば働きかけている	0.0%	50.0%	37.7%	51.4%	50.0%	39.2%	50.0%	30.8%	45.5%	0.0%	42.9%	59.0%
④働きかけている	100.0%	50.0%	57.4%	37.1%	50.0%	35.3%	29.4%	53.8%	50.0%	50.0%	28.6%	33.3%
N	3	10	61	35	2	51	102	13	22	2	7	39

問6(A). 貴学部では、教員の教育にけるエフォートに一定の規準を設けていますか。

	全体	定員充足率				偏差値						
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5
①設けていない	93.1%	100.0%	98.3%	87.7%	92.7%	96.9%	91.7%	93.3%	93.0%	90.0%	90.0%	96.2%
②設けている	6.9%	0.0%	1.7%	12.3%	7.3%	3.1%	8.3%	6.7%	7.0%	10.0%	10.0%	3.8%
N	346	10	59	57	219	64	72	60	43	50	30	26
		学部系統										
	歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
①設けていない	100.0%	90.0%	93.5%	88.6%	100.0%	98.0%	94.2%	100.0%	90.0%	100.0%	83.3%	87.2%
②設けている	0.0%	10.0%	6.5%	11.4%	0.0%	2.0%	5.8%	0.0%	10.0%	0.0%	16.7%	12.8%
N	3	10	62	35	2	51	103	12	20	2	6	39

問6(B). また、設けている場合、その割合はどの程度ですか。

	全体	定員充足率				偏差値							
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5	
平均値	58.9%		65.0%	62.5%	57.5%	52.5%	61.3%	66.3%	60.0%	32.5%	73.3%	40.0%	
中央値	50.0%		65.0%	57.5%	45.0%	52.5%	57.5%	65.0%	40.0%	32.5%	70.0%	40.0%	
最小値	30.0%		65.0%	35.0%	30.0%	40.0%	30.0%	35.0%	40.0%	30.0%	50.0%	40.0%	
最大値	100.0%		65.0%	100.0%	100.0%	65.0%	100.0%	100.0%	100.0%	35.0%	100.0%	40.0%	
標準偏差	25.9			29.0	26.9	17.7	30.7	29.3	34.6	3.5	25.2		
N	19	-	1	4	14	2	4	4	3	2	3	1	
		学部系統											
		歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
平均値				73.3%	67.5%		30.0%	65.0%		35.0%		40.0%	60.0%
中央値				70.0%	67.5%		30.0%	45.0%		35.0%		40.0%	50.0%
最小値				70.0%	35.0%		30.0%	40.0%		30.0%		40.0%	35.0%
最大値				80.0%	100.0%		30.0%	100.0%		40.0%		40.0%	100.0%
標準偏差				5.8	46.0			32.0		7.1			24.7
N	-	-	-	3	2	-	1	5	-	2	-	1	5

問6(C). 対象によって違いがある場合には、以下の空欄に自由にお書きください。

- ・若手層(60%)、中堅層(70%)、ベテラン層(80%) (80%以上100%未満、35、薬学)
- ・年間コマ数制限(80%以上100%未満、42.5、保健系)
- ・「すべては学生のため」の方針の上、大学運営を行なっている。(100%以上、37.5、社会科学系)
- ・教育教員(100%)、教育研究教員(50%)、研究教員(30%) (100%以上、40、理・工学系)
- ・全員が、35か40%のどちらかを選択している(100%以上、40、教育学)
- ・若手層(50%)、中堅層(60%) (100%以上、42.5、理・工学系)
- ・若手層30~50%、中堅層・ベテラン層70~50% (100%以上、42.5、社会科学系)
- ・講師以上50~60%、助教・助手30~40% (100%以上、45、その他)

問7(A). 貴学部における教員の教育にかけるエフォートは、理想的にはどの程度だとお考えですか。

	全体	定員充足率				偏差値							
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5	
平均値	54.4%	65.0%	54.4%	55.3%	53.8%	54.3%	57.2%	54.5%	53.1%	53.6%	54.6%	51.0%	
中央値	50.0%	60.0%	50.0%	50.0%	50.0%	50.0%	60.0%	50.0%	50.0%	50.0%	50.0%	50.0%	
最小値	25.0%	40.0%	30.0%	25.0%	25.0%	25.0%	25.0%	30.0%	30.0%	30.0%	40.0%	30.0%	
最大値	100.0%	100.0%	90.0%	80.0%	85.0%	90.0%	80.0%	85.0%	100.0%	80.0%	80.0%	70.0%	
標準偏差	13.0	18.5	12.3	13.9	12.6	12.8	13.9	13.4	15.3	11.8	10.1	10.2	
N	298	8	54	48	188	57	59	54	40	39	24	25	
		学部系統											
		歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
平均値	55.0%	50.0%	58.0%	52.1%	50.0%	53.4%	54.5%	55.4%	53.2%	50.0%	50.0%	54.5%	
中央値	60.0%	50.0%	57.5%	50.0%	50.0%	50.0%	50.0%	60.0%	50.0%	50.0%	50.0%	50.0%	
最小値	45.0%	30.0%	30.0%	25.0%	50.0%	30.0%	25.0%	35.0%	30.0%	50.0%	40.0%	30.0%	
最大値	60.0%	70.0%	85.0%	80.0%	50.0%	75.0%	100.0%	80.0%	70.0%	50.0%	60.0%	75.0%	
標準偏差	8.7	12.6	14.0	13.5	0.0	11.4	13.8	15.1	13.4	0.0	10.0	11.6	
N	3	6	50	29	2	43	89	12	19	2	5	38	

問7(B). 対象によって違いがある場合には、以下の空欄に自由にお書きください。

- ・少人数教育(結果として)となっているため、個々の学生の特質を把握してもらえたら、及び指導教育も個別対応が理想(実現は難しいと思いますが)。(50%未満、BF、その他)
- ・海外研修の担当になったり、大学院博士課程を担当するかですぐいぶんかわってくる。いちがいに言えない。(50%以上80%未満、BF、人文科学系)
- ・全教員の1/3は保育士、幼稚園、小学校などの現場出身者であり、それらの教員は100%教育と考えてよいだろう。その他の教員の半分は同じくほぼ100%、それ以外の教員は80%くらいと思われる。(50%以上80%未満、BF、教育学)
- ・若手層40%、中堅層60%、ベテラン層80%が希望する%です。(50%以上80%未満、35、保健系)
- ・●●●●●における業務を担当する場合は、これを含めて60%程度(50%以上80%未満、35、保健系)
- ・研究が重要(50%) (50%以上80%未満、35、理・工学系)
- ・大学教育は研究を基盤に行なわれるものであるので教育への取り組みが50%を超えるべきではないと思○する(50%以上80%未満、35、社会科学系)
- ・教育機関である以上、教職員は学生の指導を行うことは義務である。ただし、医系大学の場合、教育以外に診療、研究等、職務は多岐に渡る為、教育エフォートに幅がある事になると考えられる。(50%以上80%未満、40、歯学)
- ・若手層(50%)、中堅層(60%)、ベテラン層(70%) (80%以上100%未満、35、薬学)
- ・若手層20%、中堅層30%、ベテラン層40% (80%以上100%未満、42.5、理・工学系)
- ・臨床心理学系教員60%、人文系教員70% (100%以上、BF、人文科学系)
- ・若手40%～ベテラン70%程度(100%以上、35、社会科学系)
- ・若手教員の昇格基準に教育エフォートが含まれていない。また、その評価も難しい。(100%以上、35、社会科学系)
- ・教育、研究と2分すれば<50%+α>程度。教育、研究、運営と3分すれば<35%+α>程度。(100%以上、35、社会科学系)
- ・研究の時間も重要である。学生の想談を受ける時間も必要。(100%以上、37.5、保健系)
- ・助教50%、講師40%、准教授40%、教授30% (100%以上、37.5、保健系)
- ・対応が必要な学生には多くの時間を使って指導しており、あわせて、学生支援会議で検討している(リメディアル)。(100%以上、37.5、保健系)
- ・国試がある学部のため、エフォートは100%を超える教員がほとんどである。本来的に言えば、若手には70%くらいで研究の時間確保を図ってあげたい所である。役職者はエフォートを下げざるを得ない。(100%以上、37.5、保健系)
- ・資格に関わる実習がある学科は教育にかけるエフォートは多くなる。(100%以上、37.5、人文科学系)
- ・科研費等をとっている教員(50%)がいるので、研究もそれなりに行なっているが、学生に対応している教育に重心がかかる。(100%以上、37.5、その他)

- ・若手は、教育と研究を合せ75～80%（100%以上、37.5、その他）
- ・助教・講師60%、准教授70%、教授80%（100%以上、40、保健系）
- ・若手70、中堅50、ベテラン50（100%以上、40、保健系）
- ・注記：調査では約50%程度であるが、「卒業研究指導」を研究/教育のいずれかとするか、各人の判断の統一はない。研究と判断し、卒研以外の教育に約50%という現状と思う。（100%以上、40、理・工学系）
- ・若手層は、自身の研究に力を入れるべきであり、相対的には教育にかかるエフォートは低下せざるを得ない。逆に、ベテラン層は、自身の研究を踏まえて、これを学生に伝える努力をすべきであろう。（100%以上、40、社会科学系）
- ・教授（75%）、准教授・講師（60%）、助教（50%）、助手（40%）（100%以上、42.5、薬学）
- ・講師、准教授、教授の職位によっても異なる。（100%以上、42.5、保健系）
- ・研究を主に担当、教育を主に担当、研究、教育を共に担当で異ってくる。上記は主に授業の担当コマ数で区分する。（100%以上、42.5、理・工学系）
- ・教育にかかるエフォートと研究にかかるエフォートは半々ぐらいが望ましいと思うが、現状は学務が過重で教育、研究とも十分な時間、労力を割くことができていない。（100%以上、42.5、人文科学系）
- ・若手層50～60%、中堅層30～〇%、ベテラン層20～30%（100%以上、42.5、社会科学系）
- ・資格系学部であるので、教育活動に時間が取られ、研究活動に費やす時間が少ないのが、むしろ問題である。（100%以上、42.5、教育学）
- ・教授60～70%、准教授・講師50%前後、助教30%以下（100%以上、45、薬学）
- ・教育と研究についてはいずれも等しく努力を求め（50%/50%）。大学管理運営、社会貢献等については、専門分野や本人の適性もあるため、一概に言えない。（100%以上、45、社会科学系）
- ・難しい質問です。教育、研究、診療、どれも大切です。（60・20・20%）（100%以上、47.5、歯学）
- ・教育60%、研究30%、その他10%（100%以上、47.5、保健系）
- ・若手層40～50%、中堅層50～60%、ベテラン層70～80%（100%以上、47.5、家政学）

問8(A). 貴学部には、教育活動のみを職務とする教育専従教員（講師以上）はおられますか。

	全体	定員充足率				偏差値							
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5	
①いない	84.8%	60.0%	86.4%	75.9%	87.8%	82.8%	80.6%	88.5%	90.9%	84.3%	83.3%	84.6%	
②いる	15.2%	40.0%	13.6%	24.1%	12.2%	17.2%	19.4%	11.5%	9.1%	15.7%	16.7%	15.4%	
N	349	10	59	58	221	64	72	61	44	51	30	26	
		学部系統											
		歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
①いない	33.3%	100.0%	85.5%	85.7%	100.0%	78.4%	85.4%	100.0%	95.5%	100.0%	71.4%	78.9%	
②いる	66.7%	0.0%	14.5%	14.3%	0.0%	21.6%	14.6%	0.0%	4.5%	0.0%	28.6%	21.1%	
N	3	10	62	35	2	51	103	13	22	2	7	38	

問8(B). (「②いる」と回答した場合の)恒常的なポスト

	全体	定員充足率				偏差値						
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5
平均値	5.0名	1.0名	9.0名	2.5名	5.8名	5.7名	5.2名	1.0名	1.3名	7.6名	1.3名	10.0名
中央値	2.0名	1.0名	5.0名	2.0名	2.0名	3.5名	3.0名	1.0名	1.0名	3.0名	1.0名	7.0名
最小値	0.0名	1.0名	1.0名	0.0名	0.0名	2.0名	0.0名	1.0名	1.0名	0.0名	1.0名	3.0名
最大値	30.0名	1.0名	23.0名	10.0名	30.0名	17.0名	23.0名	1.0名	2.0名	30.0名	2.0名	20.0名
標準偏差	7.3	0.0	8.9	2.8	8.9	5.8	7.3	0.0	0.6	12.7	0.6	8.9
N	32	2	6	11	13	6	9	3	3	5	3	3
		学部系統										
	歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
平均値	2.0名		14.0名	1.5名		1.5名	3.0名		1.0名		3.0名	6.0名
中央値	2.0名		17.0名	1.0名		1.0名	3.0名		1.0名		3.0名	6.0名
最小値	1.0名		0.0名	0.0名		1.0名	1.0名		1.0名		2.0名	2.0名
最大値	3.0名		30.0名	4.0名		3.0名	6.0名		1.0名		4.0名	10.0名
標準偏差	1.4		11.5	1.9		0.8	1.8				1.4	5.7
N	2	-	7	4	-	6	8	-	1	-	2	2

問8(C). (「②いる」と回答した場合の)恒常的でないポスト

	全体	定員充足率				偏差値						
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5
平均値	9.2名	5.5名	2.3名	7.4名	12.6名	5.9名	3.0名	3.5名	1.0名	24.2名	1.0名	5.0名
中央値	3.0名	5.5名	2.0名	5.0名	3.0名	3.5名	3.0名	3.5名	1.0名	4.0名	1.0名	5.0名
最小値	0.0名	1.0名	1.0名	1.0名	0.0名	1.0名	1.0名	1.0名	1.0名	0.0名	1.0名	5.0名
最大値	131.0名	10.0名	4.0名	20.0名	131.0名	20.0名	5.0名	6.0名	1.0名	131.0名	1.0名	5.0名
標準偏差	26.3	6.4	1.5	7.3	35.6	6.4	1.6	3.5		52.4		
N	24	2	4	5	13	8	5	2	1	6	1	1
		学部系統										
	歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
平均値			2.0名	46.0名		2.6名	5.1名					4.5名
中央値			1.0名	6.0名		3.0名	4.0名					3.5名
最小値			0.0名	1.0名		1.0名	0.0名					1.0名
最大値			5.0名	131.0名		5.0名	20.0名					10.0名
標準偏差			2.6	73.7		1.7	5.9					4.4
N	-	-	3	3	-	5	9	-	-	-	-	4

問9. 貴学部には、研究活動を(ほぼ)行っていない、事実上の教育専任教員はどの程度おられますか。印象で結構ですので、貴学部の教員全体(講師以上)に占めるおおよその割合をお書きください。

	全体	定員充足率				偏差値							
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5	
平均値	10.0%	9.5%	13.6%	12.8%	8.5%	14.5%	9.5%	9.8%	9.9%	6.3%	9.7%	10.5%	
中央値	5.0%	5.0%	10.0%	6.3%	2.3%	10.0%	5.0%	5.0%	3.0%	1.0%	0.0%	5.0%	
最小値	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
最大値	100.0%	30.0%	100.0%	80.0%	70.0%	100.0%	50.0%	50.0%	80.0%	50.0%	70.0%	70.0%	
標準偏差	14.7	12.1	18.5	15.9	13.0	17.7	11.3	12.3	17.6	10.2	18.7	16.7	
N	325	10	56	52	206	57	68	56	43	51	24	25	
		学部系統											
		歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
平均値	0.0%	13.0%	13.0%	9.6%	1.0%	6.0%	11.2%	8.9%	9.9%	5.0%	5.8%	9.8%	
中央値	0.0%	4.5%	7.0%	5.0%	1.0%	2.0%	5.0%	6.0%	1.0%	5.0%	0.0%	2.0%	
最小値	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
最大値	0.0%	50.0%	70.0%	50.0%	2.0%	30.0%	100.0%	30.0%	66.0%	10.0%	30.0%	50.0%	
標準偏差	0.0	17.5	17.2	14.0	1.4	8.2	16.4	10.3	15.8	7.1	12.0	13.1	
N	2	10	57	33	2	47	99	12	20	2	6	34	

問10. 貴学部では、教員の活動を評価する際に、もっとも重視されるのはどのような活動ですか。

1)採用の際

	全体	定員充足率				偏差値							
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5	
①教育活動	30.5%	50.0%	29.4%	45.8%	26.1%	31.5%	39.7%	27.1%	51.5%	19.5%	16.7%	11.1%	
②研究活動	68.8%	50.0%	70.6%	54.2%	72.7%	68.5%	60.3%	72.9%	48.5%	78.0%	79.2%	88.9%	
③大学管理・運営に関する活動	0.7%	0.0%	0.0%	0.0%	1.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2.4%	4.2%	0.0%	
④社会貢献・連携に関する活動	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
N	282	6	51	48	176	54	63	48	33	41	24	18	
		学部系統											
		歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
①教育活動	50.0%	22.2%	52.2%	25.9%	0.0%	18.2%	25.0%	63.6%	35.3%	0.0%	33.3%	25.8%	
②研究活動	50.0%	77.8%	45.7%	74.1%	100.0%	81.8%	75.0%	36.4%	58.8%	100.0%	66.7%	74.2%	
③大学管理・運営に関する活動	0.0%	0.0%	2.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	5.9%	0.0%	0.0%	0.0%	
④社会貢献・連携に関する活動	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
N	2	9	46	27	2	44	84	11	17	2	6	31	

2) 任期更新／昇任人事の際

	全体	定員充足率				偏差値							
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5	
①教育活動	25.6%	16.7%	27.1%	37.8%	22.5%	28.3%	39.3%	31.8%	14.7%	15.8%	12.5%	16.7%	
②研究活動	70.7%	83.3%	66.7%	62.2%	73.4%	66.0%	57.4%	65.9%	76.5%	81.6%	87.5%	83.3%	
③大学管理・運営に関する活動	3.7%	0.0%	6.3%	0.0%	4.0%	5.7%	3.3%	2.3%	8.8%	2.6%	0.0%	0.0%	
④社会貢献・連携に関する活動	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
N	273	6	48	45	173	53	61	44	34	38	24	18	
		学部系統											
		歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
①教育活動	50.0%	11.1%	40.9%	34.6%	0.0%	6.5%	23.8%	50.0%	6.3%	0.0%	33.3%	37.9%	
②研究活動	50.0%	88.9%	54.5%	65.4%	100.0%	91.3%	71.3%	50.0%	81.3%	100.0%	50.0%	62.1%	
③大学管理・運営に関する活動	0.0%	0.0%	4.5%	0.0%	0.0%	2.2%	5.0%	0.0%	12.5%	0.0%	16.7%	0.0%	
④社会貢献・連携に関する活動	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
N	2	9	44	26	2	46	80	10	16	2	6	29	

3) 一定期間ごとの評価の際

	全体	定員充足率				偏差値							
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5	
①教育活動	46.7%	66.7%	51.2%	59.1%	41.3%	65.2%	50.9%	51.2%	55.2%	20.6%	35.0%	25.0%	
②研究活動	39.3%	16.7%	30.2%	29.5%	45.3%	17.4%	35.1%	31.7%	31.0%	61.8%	65.0%	68.8%	
③大学管理・運営に関する活動	12.7%	16.7%	18.6%	9.1%	12.0%	17.4%	14.0%	14.6%	10.3%	14.7%	0.0%	6.3%	
④社会貢献・連携に関する活動	1.2%	0.0%	0.0%	2.3%	1.3%	0.0%	0.0%	2.4%	3.4%	2.9%	0.0%	0.0%	
N	244	6	43	44	150	46	57	41	29	34	20	16	
		学部系統											
		歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
①教育活動	50.0%	50.0%	58.5%	52.2%	0.0%	50.0%	36.8%	70.0%	43.8%	0.0%	60.0%	42.9%	
②研究活動	50.0%	50.0%	29.3%	39.1%	100.0%	42.1%	47.1%	20.0%	25.0%	100.0%	0.0%	39.3%	
③大学管理・運営に関する活動	0.0%	0.0%	9.8%	4.3%	0.0%	7.9%	16.2%	10.0%	31.3%	0.0%	40.0%	14.3%	
④社会貢献・連携に関する活動	0.0%	0.0%	2.4%	4.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	3.6%	
N	2	8	41	23	2	38	68	10	16	2	5	28	

問11(A). 貴学部では、教員の教育活動への積極的な取組を促すために、以下のような取組を行っていますか。

1) 給与(賞与等含む)の増額/減額

	全体	定員充足率				偏差値							
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5	
①行っていない	83.7%	90.0%	86.4%	67.9%	86.7%	78.1%	79.2%	84.7%	81.4%	92.0%	93.1%	84.6%	
②行っている	16.3%	10.0%	13.6%	32.1%	13.3%	21.9%	20.8%	15.3%	18.6%	8.0%	6.9%	15.4%	
N	344	10	59	56	218	64	72	59	43	50	29	26	
		学部系統											
		歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
①行っていない	66.7%	88.9%	85.2%	75.8%	100.0%	92.2%	88.1%	69.2%	72.7%	50.0%	71.4%	79.5%	
②行っている	33.3%	11.1%	14.8%	24.2%	0.0%	7.8%	11.9%	30.8%	27.3%	50.0%	28.6%	20.5%	
N	3	9	61	33	2	51	101	13	22	2	7	39	

2) 個人研究費の増額/減額

	全体	定員充足率				偏差値							
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5	
①行っていない	83.1%	100.0%	87.9%	69.1%	84.9%	75.8%	85.9%	83.3%	81.0%	88.2%	80.0%	92.3%	
②行っている	16.9%	0.0%	12.1%	30.9%	15.1%	24.2%	14.1%	16.7%	19.0%	11.8%	20.0%	7.7%	
N	343	10	58	55	219	62	71	60	42	51	30	26	
		学部系統											
		歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
①行っていない	100.0%	80.0%	82.0%	84.4%	100.0%	92.2%	81.4%	76.9%	76.2%	50.0%	85.7%	84.2%	
②行っている	0.0%	20.0%	18.0%	15.6%	0.0%	7.8%	18.6%	23.1%	23.8%	50.0%	14.3%	15.8%	
N	3	10	61	32	2	51	102	13	21	2	7	38	

3) 業務の負担減/負担増

	全体	定員充足率				偏差値							
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5	
①行っていない	83.3%	80.0%	82.8%	83.6%	83.5%	80.6%	84.7%	84.7%	76.2%	88.0%	80.0%	88.5%	
②行っている	16.7%	20.0%	17.2%	16.4%	16.5%	19.4%	15.3%	15.3%	23.8%	12.0%	20.0%	11.5%	
N	342	10	58	55	218	62	72	59	42	50	30	26	
		学部系統											
		歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
①行っていない	66.7%	88.9%	85.2%	78.8%	100.0%	90.2%	84.2%	84.6%	76.2%	100.0%	71.4%	76.3%	
②行っている	33.3%	11.1%	14.8%	21.2%	0.0%	9.8%	15.8%	15.4%	23.8%	0.0%	28.6%	23.7%	
N	3	9	61	33	2	51	101	13	21	2	7	38	

問11(B). また、行っている場合、それは教員の取組にどの程度見合うものですか。

1) 給与(賞与等含む)の増額/減額

	全体	定員充足率				偏差値						
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5
①見合わない	18.2%	0.0%	0.0%	29.4%	17.2%	14.3%	20.0%	22.2%	12.5%	33.3%	0.0%	25.0%
②どちらかといえば見合わない	30.9%	0.0%	37.5%	35.3%	27.6%	35.7%	26.7%	33.3%	37.5%	0.0%	50.0%	25.0%
③どちらかといえば見合う	38.2%	100.0%	37.5%	29.4%	41.4%	42.9%	33.3%	33.3%	37.5%	33.3%	50.0%	50.0%
④見合う	12.7%	0.0%	25.0%	5.9%	13.8%	7.1%	20.0%	11.1%	12.5%	33.3%	0.0%	0.0%
N	55	1	8	17	29	14	15	9	8	3	2	4
		学部系統										
	歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
①見合わない	0.0%	0.0%	33.3%	12.5%		25.0%	16.7%	0.0%	0.0%	0.0%	50.0%	25.0%
②どちらかといえば見合わない	0.0%	0.0%	22.2%	37.5%		50.0%	25.0%	50.0%	80.0%	0.0%	0.0%	12.5%
③どちらかといえば見合う	0.0%	100.0%	33.3%	25.0%		0.0%	41.7%	50.0%	20.0%	100.0%	50.0%	62.5%
④見合う	100.0%	0.0%	11.1%	25.0%		25.0%	16.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
N	1	1	9	8	-	4	12	4	5	1	2	8

2) 個人研究費の増額/減額

	全体	定員充足率				偏差値						
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5
①見合わない	12.1%		14.3%	17.6%	9.1%	20.0%	10.0%	10.0%	12.5%	0.0%	0.0%	50.0%
②どちらかといえば見合わない	32.8%		42.9%	41.2%	27.3%	40.0%	40.0%	20.0%	25.0%	50.0%	33.3%	0.0%
③どちらかといえば見合う	43.1%		42.9%	23.5%	51.5%	40.0%	40.0%	50.0%	25.0%	33.3%	66.7%	50.0%
④見合う	12.1%		0.0%	17.6%	12.1%	0.0%	10.0%	20.0%	37.5%	16.7%	0.0%	0.0%
N	58	-	7	17	33	15	10	10	8	6	6	2
		学部系統										
	歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
①見合わない		0.0%	9.1%	0.0%		0.0%	15.8%	0.0%	20.0%	0.0%	100.0%	16.7%
②どちらかといえば見合わない		100.0%	9.1%	40.0%		75.0%	31.6%	100.0%	20.0%	0.0%	0.0%	16.7%
③どちらかといえば見合う		0.0%	63.6%	40.0%		0.0%	52.6%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	66.7%
④見合う		0.0%	18.2%	20.0%		25.0%	0.0%	0.0%	60.0%	0.0%	0.0%	0.0%
N	-	2	11	5	-	4	19	3	5	1	1	6

3)業務の負担減／負担増

	全体	定員充足率				偏差値							
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5	
①見合わない	7.4%	0.0%	11.1%	22.2%	2.9%	0.0%	18.2%	0.0%	10.0%	0.0%	0.0%	33.3%	
②どちらかといえば見合わない	24.1%	50.0%	22.2%	55.6%	14.7%	45.5%	27.3%	28.6%	20.0%	16.7%	0.0%	0.0%	
③どちらかといえば見合う	42.6%	0.0%	44.4%	22.2%	50.0%	54.5%	27.3%	28.6%	20.0%	50.0%	83.3%	66.7%	
④見合う	25.9%	50.0%	22.2%	0.0%	32.4%	0.0%	27.3%	42.9%	50.0%	33.3%	16.7%	0.0%	
N	54	2	9	9	34	11	11	7	10	6	6	3	
		学部系統											
		歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
①見合わない	0.0%	0.0%	11.1%	0.0%		20.0%	0.0%	0.0%	25.0%		50.0%	0.0%	
②どちらかといえば見合わない	0.0%	0.0%	11.1%	14.3%		20.0%	31.3%	50.0%	0.0%		50.0%	42.9%	
③どちらかといえば見合う	0.0%	100.0%	44.4%	57.1%		20.0%	50.0%	50.0%	25.0%		0.0%	42.9%	
④見合う	100.0%	0.0%	33.3%	28.6%		40.0%	18.8%	0.0%	50.0%		0.0%	14.3%	
N	1	1	9	7	-	5	16	2	4	-	2	7	

問12. 問11で挙げた取組以外で、教員の教育活動への積極的な取組を促すための取組を行われていましたら、具体的にお書きください。

- ・FD研修(50%未満、35、社会科学系)
- ・FD活動を促進するための活動を行っている。(50%未満、40、薬学)
- ・FD活動。月一回学部のFD活動がある。(50%未満、40、人文科学系)
- ・学生の状況などを取り上げる「プレスト」の情報交換会等。情報共有だけでなく、共同の対応策、学びの効果を高める方法等をさぐる。(50%未満、40、社会科学系)
- ・e-learningの授業(50%以上80%未満、BF、保健系)
- ・年1回、各教員が作成した資料に基づき、所属長(学科長等)が面談を行い、課題や次年度の目標について話し合いをしている。また、さらにその結果に基づき、学長、副学長とも面談を行っている。(50%以上80%未満、BF、理・工学系)
- ・FD研修会(年1～2回)(50%以上80%未満、BF、人文科学系)
- ・地域貢献活動(団体・企業からの受託研究)、夏期・〇休休み期間の集中〇〇の実施(50%以上80%未満、BF、社会科学系)
- ・産学協力のもとプロジェクト活動(単位あり)(50%以上80%未満、BF、社会科学系)
- ・定期的なFD研修(50%以上80%未満、BF、社会科学系)
- ・優良教員の表彰制度があり、年各学部一名ずつを表彰。(50%以上80%未満、BF、教育学)
- ・授業評価の高い先生を数名えらび、表彰している。(50%以上80%未満、BF、その他)
- ・年1回、各教員が作成した資料に基づき、所属長(学科長等)が面談を行い、課題や次年度の目標について話し合いをしている。また、さらにその結果に基づき、学長、副学長とも面談を行っている。(50%以上80%未満、BF、その他)
- ・地域貢献を兼ねて専門的講義活動を推進している。新しい教育方法の導入などをすすめ、アクティブラーニングなどによる学修定着を考慮し、成果を計っている。カリキュラム構築上の各領域を併せた検討会常時開く。(50%以上80%未満、35、保健系)
- ・FD(50%以上80%未満、35、理・工学系)
- ・学生による授業評価の高い教員の表彰制度。(50%以上80%未満、35、人文科学系)
- ・科研費取得のための研修は実施していますが、問11にあるように処遇に結びつくような取組はございません。(50%以上80%未満、35、人文科学系)
- ・授業アンケート、FD活動、教員評価(教育と研究、学内外貢献含む)による評価(50%以上80%未満、35、人文科学系)
- ・教育改革学長奨励賞制度(学部1名/前期後期)(50%以上80%未満、35、その他)
- ・学生による授業評価をおこないその評価結果にもとづいて、教員から授業の自己評価を求めている。(50%以上80%未満、37.5、歯学)
- ・毎年、年度末に、①教育活動②研究活動③学内外活動の自己申告(根拠資料を付けて)してもらい、学科主任等が評価するシステムを導入。昇任人事の際に活用。(50%以上80%未満、37.5、理・工学系)
- ・学内に「教育改革推進研究奨励費」(応募)を設け、先動的な教育活動に対して奨励金を支給し、支援を行っている(50%以上80%未満、37.5、家政学)

- ・全学FD、学科FDを年間を通じて行っている。学科における積極的な教育プロジェクトについて、予算をつける。(100%以上、40、その他)
- ・学生の授業評価結果の掲示。(100%以上、42.5、薬学)
- ・FD活動、①良い取り組みを紹介する講演会、②授業評価アンケートを題材にした教員のふりかえりと意見交換(100%以上、42.5、薬学)
- ・教育業績を業績として認める。FD研修会などへの参加実績を推奨する。(100%以上、42.5、保健系)
- ・教員と学生の共同研究などにおいて、学部棟中央に設置されている学習支援センターを有効に活用している。(100%以上、42.5、保健系)
- ・全学的、キャンパス内のFD活動。(100%以上、42.5、保健系)
- ・専門領域内での教育研究。(100%以上、42.5、保健系)
- ・全体(学部教員)の中での研究ポイントのクラスのフィードバック(100%以上、42.5、保健系)
- ・教員は教育活動を含む大学での活動を申告し、それをポイント化してそのポイントに応じて研究費を支給している。(100%以上、42.5、保健系)
- ・未だ行なっているが、教育活動や学生からの評価を教員評価に取り入れ、何らかの報酬制度を設けようとしている(100%以上、42.5、保健系)
- ・FD研修を年に数回(講演、ワークショップ等)、教員相互の授業見学会を実施し、〇での教育活動改善の手がかりとしている。(100%以上、42.5、人文科学系)
- ・FD研究会、授業参観、シラバスチェック(100%以上、42.5、人文科学系)
- ・数年来のFD活動を通じて、教員側の教育意識、教育方法は十二分に整っている。授業評価アンケートはほぼ100%実施、諸研修会への参加率も高い(出欠をとるからか?)。補講は完璧に実行、クラスの備品もすべて整っている。わが大学では強制手段をとらなくとも、若手教員(国際学会への参加や英文論文を執筆できる優秀なスタッフ)を中心によくやっていると思う。問題は学生(偏差値40代)の側にある。他大学でも同じ状況なのでは?(100%以上、42.5、社会科学系)
- ・教育活動への取組を促すという点では、FD活動による多様な教育方法の紹介等を行っているのみです。(100%以上、42.5、社会科学系)
- ・他大学での実践例を報告して頂き、啓発を行っている。(100%以上、42.5、社会科学系)
- ・昇任人事(100%以上、42.5、社会科学系)
- ・全学的な取り組みとして、教育活動の教員評価(学生の授業アンケート及び教員の自己評価、授業をVTRで撮りそれを観ての評価の3点から)に基づき各学部から1名の教育活動優秀者を学部長が推薦。学長が表彰(報奨金付き)する取り組みを行っている。(毎年2名)(100%以上、42.5、教育学)
- ・FD研修会、アンケートへのリフレクションペーパー提出、授業の相互参観(100%以上、42.5、その他)
- ・定期的な研究、教育活動に対する発表の場を設けている。教員評価で教育分野への貢献を評価している。(100%以上、45、薬学)
- ・学生による授業評価と教員のFD研修(100%以上、45、保健系)
- ・FD(皆、積極的です)(100%以上、45、保健系)
- ・キャリア教育やPBLに取り組む授業に対して経費補助を行っている。(100%以上、45、理・工学系)
- ・FD講演会・FDフォーラムへの参加、授業フィードバックの実施、授業参観の参加と実施(100%以上、45、理・工学系)
- ・授業における取り組みや課題に関する情報・意見の交換のために、学部内で全教員が参加するミニ・フォーラムを定期的に開催しています。(100%以上、45、人文科学系)
- ・有用な教育活動であれば、外部講師等の費用、報酬、その他を支給することがある。(100%以上、45、社会科学系)
- ・優秀教員の表彰をしている。(評価は学生評価及び自己点検評価及び学科長、学部長の評価により決めている。)(100%以上、45、社会科学系)
- ・全学で課題解決型アクティブラーニング授業を提供することを目指す。学生ポートフォリオを導入とGPAの活用を計かる。担当科目の50%をルーブリック評価で行う。(100%以上、45、家政学)
- ・教務補佐、TAを積極的に活用する。(100%以上、45、体育学)
- ・FD委員会によるFDワークショップ、FD講演会、研究授業を実施している(100%以上、47.5、薬学)
- ・(1)「教員評価」の「教育領域」の項目に、学生指導や教育上の工夫に努力していることを“自己判断加点”できる項目を設け、積極的にとり組むことを促している。(2)教員相互の授業参観の制度を導入し、自らの授業の改善の学びを促している。(100%以上、47.5、保健系)
- ・広義の“SD”マップ(FDマップ)による段階的な教育力の育成(100%以上、47.5、保健系)
- ・FDの開講(100%以上、47.5、保健系)
- ・FD活動に関するイベント(100%以上、47.5、理・工学系)
- ・FDワークショップを定期的実施(100%以上、47.5、理・工学系)
- ・FD(100%以上、47.5、農学系)
- ・●●●●●●賞(全学)(100%以上、47.5、人文科学系)
- ・優れた授業を行った教員を表彰する(100%以上、47.5、人文科学系)
- ・FD研修会(年1回開催)のテーマは、ほぼ教育活動にかかわるものを設定。高等学校模擬授業への積極的参加を促し、高校生の現実への理解を深めるように心掛けている(100%以上、47.5、人文科学系)
- ・全学、学部単位のFD研修会実施(それぞれ年2回)(100%以上、47.5、人文科学系)

- ・学部で教育活動のための助成金制度を設けている。(100%以上、47.5、社会科学系)
- ・全学的な催しとして、ユニークな教育活動を収集し、冊子にしたりしている。(100%以上、47.5、家政学)
- ・大学教育再生加速プログラム(AP)に採択されており、アクティブラーニング(AL)マスター教員数名により教育改善の取組を推進している(100%以上、47.5、教育学)
- ・教育方法の改善の為の競争的研究資金制度がある。(100%以上、47.5、教育学)
- ・2017年度から教育面におけるTeacher of the Yearを学科から推薦する制度が始まった。(100%以上、47.5、その他)
- ・留学制度(期間は短期(3~6ヶ月)、長期(1年))(不明、不明、不明)

Ⅲ. 教育の質保証(学習成果として定めた知識の理解度や技能の習得度を、一定以上確保すること)についてうかがいます。

問13(A) 貴学部では、卒業生に最低限身につけさせるべき知識・技能・態度等について、明確で具体的な基準(例えば、建学の精神や教育理念、DP等の内容をより明確で具体的なレベルにまで落とし込んだような基準)が学内向けに設定されていますか。

1)所属学部で学ぶ上で必要となる基礎学力

	全体	定員充足率				偏差値						
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5
①設定されていない	48.5%	55.6%	54.2%	40.4%	49.1%	53.1%	47.2%	52.5%	36.4%	50.0%	41.4%	60.0%
②設定されている	51.5%	44.4%	45.8%	59.6%	50.9%	46.9%	52.8%	47.5%	63.6%	50.0%	58.6%	40.0%
N	344	9	59	57	218	64	72	61	44	48	29	25
学部系統												
	歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
①設定されていない	50.0%	11.1%	28.3%	51.4%	100.0%	60.8%	58.4%	46.2%	50.0%	100.0%	57.1%	38.5%
②設定されている	50.0%	88.9%	71.7%	48.6%	0.0%	39.2%	41.6%	53.8%	50.0%	0.0%	42.9%	61.5%
N	2	9	60	35	2	51	101	13	22	2	7	39

2)基礎的な教養・知識・技能

	全体	定員充足率				偏差値						
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5
①設定されていない	48.3%	66.7%	50.8%	40.4%	49.1%	53.1%	47.2%	50.8%	44.2%	46.9%	34.5%	60.0%
②設定されている	51.7%	33.3%	49.2%	59.6%	50.9%	46.9%	52.8%	49.2%	55.8%	53.1%	65.5%	40.0%
N	344	9	59	57	218	64	72	61	43	49	29	25
学部系統												
	歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
①設定されていない	50.0%	10.0%	27.1%	57.1%	100.0%	60.8%	56.4%	53.8%	50.0%	100.0%	42.9%	38.5%
②設定されている	50.0%	90.0%	72.9%	42.9%	0.0%	39.2%	43.6%	46.2%	50.0%	0.0%	57.1%	61.5%
N	2	10	59	35	2	51	101	13	22	2	7	39

3) 専門分野の基礎的な知識・技能

	全体	定員充足率				偏差値						
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5
①設定されていない	42.4%	55.6%	45.8%	31.6%	44.0%	48.4%	40.3%	41.0%	39.5%	40.8%	34.5%	56.0%
②設定されている	57.6%	44.4%	54.2%	68.4%	56.0%	51.6%	59.7%	59.0%	60.5%	59.2%	65.5%	44.0%
N	344	9	59	57	218	64	72	61	43	49	29	25
学部系統												
	歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
①設定されていない	50.0%	10.0%	18.6%	40.0%	100.0%	56.9%	53.5%	38.5%	50.0%	100.0%	42.9%	33.3%
②設定されている	50.0%	90.0%	81.4%	60.0%	0.0%	43.1%	46.5%	61.5%	50.0%	0.0%	57.1%	66.7%
N	2	10	59	35	2	51	101	13	22	2	7	39

4) 学習習慣や学習レディネス

	全体	定員充足率				偏差値						
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5
①設定されていない	67.1%	75.0%	59.3%	59.6%	71.2%	66.7%	64.8%	65.0%	81.0%	64.0%	60.7%	72.0%
②設定されている	32.9%	25.0%	40.7%	40.4%	28.8%	33.3%	35.2%	35.0%	19.0%	36.0%	39.3%	28.0%
N	340	8	59	57	215	63	71	60	42	50	28	25
学部系統												
	歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
①設定されていない	50.0%	60.0%	54.2%	65.7%	100.0%	76.5%	79.6%	46.2%	54.5%	100.0%	71.4%	57.9%
②設定されている	50.0%	40.0%	45.8%	34.3%	0.0%	23.5%	20.4%	53.8%	45.5%	0.0%	28.6%	42.1%
N	2	10	59	35	2	51	98	13	22	2	7	38

5) 社会に出しても恥ずかしくない態度

	全体	定員充足率				偏差値						
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5
①設定されていない	63.2%	55.6%	64.4%	54.4%	65.9%	65.1%	62.5%	59.3%	66.7%	58.0%	60.7%	80.0%
②設定されている	36.8%	44.4%	35.6%	45.6%	34.1%	34.9%	37.5%	40.7%	33.3%	42.0%	39.3%	20.0%
N	340	9	59	57	214	63	72	59	42	50	28	25
学部系統												
	歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
①設定されていない	50.0%	40.0%	44.1%	68.6%	100.0%	72.0%	76.5%	61.5%	50.0%	100.0%	71.4%	53.8%
②設定されている	50.0%	60.0%	55.9%	31.4%	0.0%	28.0%	23.5%	38.5%	50.0%	0.0%	28.6%	46.2%
N	2	10	59	35	2	50	98	13	22	2	7	39

問13(B). また、設定されている場合、それはどの程度の教員に共有されていますか。印象で結構ですので、貴学部の教員全体に占めるおおよその割合をお書きください。

1) 所属学部で学ぶ上で必要となる基礎学力

	全体	定員充足率				偏差値						
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5
平均値	75.1%	87.5%	70.8%	78.6%	74.7%	72.0%	76.5%	73.3%	74.2%	82.0%	67.5%	86.3%
中央値	80.0%	85.0%	75.0%	80.0%	80.0%	80.0%	80.0%	80.0%	80.0%	80.0%	80.0%	80.0%
最小値	0.0%	80.0%	30.0%	30.0%	0.0%	20.0%	30.0%	5.0%	30.0%	20.0%	0.0%	70.0%
最大値	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
標準偏差	23.4	9.6	22.3	20.9	24.8	23.3	21.0	26.4	21.9	18.9	33.8	11.9
N	169	4	26	33	105	30	36	29	26	23	16	8
		学部系統										
	歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
平均値	100.0%	90.0%	76.5%	70.0%		75.3%	72.8%	74.3%	81.8%		56.7%	73.9%
中央値	100.0%	90.0%	80.0%	80.0%		80.0%	80.0%	90.0%	90.0%		60.0%	80.0%
最小値	100.0%	80.0%	5.0%	25.0%		15.0%	0.0%	20.0%	50.0%		50.0%	20.0%
最大値	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%		60.0%	100.0%
標準偏差		9.3	24.7	25.8		24.5	22.8	29.9	19.4		5.8	24.1
N	1	8	40	17	-	18	40	7	11	-	3	23

2) 基礎的な教養・知識・技能

	全体	定員充足率				偏差値						
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5
平均値	74.2%	83.3%	67.1%	78.5%	74.5%	74.0%	71.4%	75.0%	74.7%	80.2%	67.8%	78.8%
中央値	80.0%	80.0%	70.0%	80.0%	80.0%	80.0%	70.0%	80.0%	80.0%	80.0%	75.0%	80.0%
最小値	0.0%	80.0%	20.0%	30.0%	0.0%	20.0%	30.0%	20.0%	50.0%	20.0%	0.0%	50.0%
最大値	100.0%	90.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
標準偏差	22.2	5.8	23.7	19.2	22.8	22.8	21.5	24.4	19.9	18.4	30.0	13.6
N	171	3	28	33	106	30	36	30	23	25	18	8
		学部系統										
	歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
平均値	100.0%	90.0%	76.6%	67.3%		70.8%	71.7%	75.0%	84.5%		57.5%	72.2%
中央値	100.0%	100.0%	80.0%	80.0%		80.0%	80.0%	75.0%	90.0%		55.0%	70.0%
最小値	100.0%	70.0%	20.0%	25.0%		30.0%	0.0%	40.0%	50.0%		50.0%	20.0%
最大値	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%		70.0%	100.0%
標準偏差		12.2	22.3	25.8		19.9	22.8	20.7	18.6		9.6	24.3
N	1	9	41	15	-	18	42	6	11	-	4	23

3) 専門分野の基礎的な知識・技能

	全体	定員充足率				偏差値						
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5
平均値	75.9%	72.5%	68.4%	83.4%	75.6%	71.8%	76.6%	74.9%	74.8%	80.9%	74.4%	82.2%
中央値	80.0%	80.0%	70.0%	90.0%	80.0%	80.0%	80.0%	80.0%	80.0%	80.0%	80.0%	80.0%
最小値	0.0%	40.0%	20.0%	30.0%	0.0%	20.0%	20.0%	25.0%	30.0%	20.0%	0.0%	60.0%
最大値	100.0%	90.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
標準偏差	21.9	22.2	24.1	19.6	21.6	23.6	22.1	22.0	20.2	19.0	29.4	12.0
N	191	4	31	38	117	33	41	36	25	28	18	9
		学部系統										
	歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
平均値	100.0%	91.1%	81.7%	71.4%		74.0%	72.2%	87.5%	83.6%		62.5%	65.6%
中央値	100.0%	100.0%	80.0%	80.0%		80.0%	80.0%	95.0%	90.0%		60.0%	60.0%
最小値	100.0%	80.0%	20.0%	25.0%		30.0%	0.0%	50.0%	50.0%		50.0%	20.0%
最大値	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%		80.0%	100.0%
標準偏差		10.5	19.2	23.6		20.6	22.7	18.3	16.9		12.6	25.8
N	1	9	46	21	-	20	45	8	11	-	4	25

4) 学習習慣や学習レディネス

	全体	定員充足率				偏差値						
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5
平均値	71.4%	70.0%	61.1%	78.6%	72.8%	66.5%	70.2%	67.6%	68.8%	77.9%	77.3%	84.0%
中央値	75.0%	70.0%	57.5%	80.0%	80.0%	70.0%	70.0%	70.0%	80.0%	80.0%	80.0%	80.0%
最小値	10.0%	60.0%	20.0%	50.0%	10.0%	20.0%	30.0%	10.0%	20.0%	20.0%	20.0%	80.0%
最大値	100.0%	80.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
標準偏差	23.5	14.1	23.6	18.1	24.8	26.6	22.2	25.5	26.4	20.7	24.1	8.9
N	106	2	22	22	59	20	23	21	8	17	11	5
		学部系統										
	歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
平均値	100.0%	87.5%	73.0%	65.8%		65.5%	70.5%	77.1%	75.0%		55.0%	70.0%
中央値	100.0%	90.0%	70.0%	75.0%		75.0%	80.0%	70.0%	80.0%		55.0%	70.0%
最小値	100.0%	70.0%	10.0%	20.0%		15.0%	20.0%	60.0%	20.0%		50.0%	20.0%
最大値	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%		60.0%	100.0%
標準偏差		15.0	24.2	26.9		26.9	22.0	16.0	24.6		7.1	25.9
N	1	4	25	12	-	10	19	7	10	-	2	15

5) 社会に出しても恥ずかしくない態度

	全体	定員充足率				偏差値						
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5
平均値	77.8%	77.5%	61.8%	85.4%	79.8%	75.7%	69.7%	79.8%	77.7%	86.3%	78.2%	85.0%
中央値	80.0%	85.0%	57.5%	85.0%	80.0%	80.0%	70.0%	80.0%	80.0%	90.0%	80.0%	80.0%
最小値	8.0%	40.0%	20.0%	50.0%	8.0%	20.0%	8.0%	25.0%	50.0%	50.0%	20.0%	80.0%
最大値	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
標準偏差	21.6	26.3	27.3	12.8	20.2	23.6	27.1	17.8	19.4	14.8	25.6	10.0
N	120	4	20	24	71	21	25	24	14	20	11	4
		学部系統										
	歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
平均値	100.0%	95.0%	80.4%	67.3%		71.7%	74.7%	92.0%	83.6%		65.0%	74.7%
中央値	100.0%	100.0%	80.0%	80.0%		80.0%	80.0%	100.0%	90.0%		65.0%	80.0%
最小値	100.0%	80.0%	20.0%	20.0%		30.0%	8.0%	70.0%	50.0%		50.0%	30.0%
最大値	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%		80.0%	100.0%
標準偏差		8.4	19.9	27.7		20.4	22.2	13.0	20.1		21.2	23.2
N	1	6	31	11	-	12	23	5	11	-	2	17

問14. 貴学部では、教育の質保証にどの程度積極的に取り組んでおられますか。

	全体	定員充足率				偏差値						
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5
①積極的に取り組んでいない	2.9%	0.0%	1.7%	3.4%	3.2%	3.2%	0.0%	3.3%	2.3%	3.9%	6.7%	3.8%
②どちらかといえば積極的に取り組んでいない	23.2%	20.0%	20.7%	25.9%	23.4%	31.7%	28.8%	26.2%	9.1%	15.7%	30.0%	11.5%
③どちらかといえば積極的に取り組んでいる	52.4%	60.0%	56.9%	43.1%	53.2%	46.0%	50.7%	45.9%	68.2%	56.9%	46.7%	57.7%
④積極的に取り組んでいる	21.5%	20.0%	20.7%	27.6%	20.3%	19.0%	20.5%	24.6%	20.5%	23.5%	16.7%	26.9%
N	349	10	58	58	222	63	73	61	44	51	30	26
		学部系統										
	歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
①積極的に取り組んでいない	33.3%	10.0%	4.8%	2.9%	0.0%	2.0%	2.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
②どちらかといえば積極的に取り組んでいない	0.0%	0.0%	11.3%	28.6%	0.0%	33.3%	34.3%	0.0%	13.6%	50.0%	14.3%	17.9%
③どちらかといえば積極的に取り組んでいる	33.3%	50.0%	45.2%	48.6%	100.0%	54.9%	49.0%	38.5%	63.6%	50.0%	71.4%	66.7%
④積極的に取り組んでいる	33.3%	40.0%	38.7%	20.0%	0.0%	9.8%	13.7%	61.5%	22.7%	0.0%	14.3%	15.4%
N	3	10	62	35	2	51	102	13	22	2	7	39

問15. 貴学部では、教育の質保証がどの程度実現できているとお考えですか。

	全体	定員充足率				偏差値							
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5	
①かなり実現できていない	2.9%	0.0%	3.4%	5.3%	2.3%	4.7%	2.8%	0.0%	2.3%	4.0%	0.0%	8.0%	
②どちらかといえば実現できていない	44.1%	70.0%	60.3%	33.3%	41.6%	56.3%	54.9%	47.5%	38.6%	28.0%	44.8%	16.0%	
③どちらかといえば実現できている	46.4%	20.0%	34.5%	54.4%	48.4%	37.5%	39.4%	44.3%	47.7%	58.0%	48.3%	64.0%	
④かなり実現できている	6.7%	10.0%	1.7%	7.0%	7.8%	1.6%	2.8%	8.2%	11.4%	10.0%	6.9%	12.0%	
N	345	10	58	57	219	64	71	61	44	50	29	25	
		学部系統											
		歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
①かなり実現できていない	33.3%	0.0%	1.7%	2.9%	0.0%	0.0%	6.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
②どちらかといえば実現できていない	0.0%	50.0%	31.7%	42.9%	50.0%	56.0%	55.9%	38.5%	22.7%	50.0%	28.6%	36.8%	
③どちらかといえば実現できている	66.7%	50.0%	55.0%	48.6%	50.0%	38.0%	34.3%	46.2%	50.0%	50.0%	71.4%	63.2%	
④かなり実現できている	0.0%	0.0%	11.7%	5.7%	0.0%	6.0%	2.9%	15.4%	27.3%	0.0%	0.0%	0.0%	
N	3	10	60	35	2	50	102	13	22	2	7	38	

問16. 問15で③あるいは④と回答された方におたずねします。教育の質保証の実現のためにどのような取組を行っていますか。特に効果的な取組について具体的にお書きください。

- ・現在開設●年目でもあるが、教員間のコミュニケーションがよくとれているうえに、教授会のほか、月2回集まって、様々な問題が話し合われている。(50%未満、40、人文科学系)
- ・補習の充実などの個別指導。テストの結果したい、求めるレベルの結果が出るまで、再試を行うこと。一流の企業などでの実習、理論と実践とのバランスを重視するカリキュラム。公の場での授業の成果の発表、アクティブラーニングの重視(授業のインタラクティブなモードなど)(50%未満、40、社会科学系)
- ・教員どおしのpeer review。学生による評価アンケート。iPadを学生全員に貸与している(予習復習に役立つ、講義内容を確認できる)。教員の講義内容をあとで、見ることができるシステム(ビデオ収録)。(50%以上80%未満、BF、保健系)
- ・国家試験対策科目の設定(必修)(50%以上80%未満、BF、保健系)
- ・本学では、学生自らが自身の学修目標を設定し、達成度評価を行い、学修改善を行う姿勢を身につけさせる教育体制の構築に力を入れて取り組んでいる。これは、学修研鑽を行う学生のPDCAサイクルと教育実践を行う教員のPDCAサイクルを相互に回し、学修成果、成績評価、改善記録等を可視化し、学修改善、教育改善等に活かす体制整備によって実現している。それには、ラーニング・ポートフォリオ、ティーチング・ポートフォリオが大きな役割を果たしている。これらの活動によって教育の質保証を実現させようとしている。(50%以上80%未満、BF、理・工学系)
- ・FD研修会を年に1～2回開催し、検討している。授業最後に授業ごとに学生アンケートを実施し、本学が設けている「身につける力」の項目(七項目中二項目)にも回答させ、結果をPDCAで次の授業にいかす材料としている。(50%以上80%未満、BF、人文科学系)
- ・特に教職に関する科目において、協同学習を取り入れている。①毎回、予習課題として設定された内容を家庭において考えてくる(個人思考)②授業では予習課題として考えた内容を協同学習により班の意見としてまとめる(グループ思考)③各班の意見を発表し、自分の班の考えと比較しながら聞く。(全体思考)④自分の考えの深化、修正を行う(個人思考)、の流れを基本としたアクティブラーニングの取組。(50%以上80%未満、BF、人文科学系)
- ・日本語教育の徹底、1年から2年に必修。単位外での課外授業。3年生のゼミ必修。コース毎の履修プランにそった教育。企業・団体の寄付講座(14～15回講義・単位として認める)(社会人による講義)。ビジネス教育(社会連携、実学教育、資格教育、海外留学、キャリア支援)など。(50%以上80%未満、BF、社会科学系)
- ・2年生時に自分づくりゼミ論文、4年生時に卒業論文の提出は義務化されており、進級、卒業の要件になっている。(50%以上80%未満、BF、社会科学系)
- ・卒論指導、研究発表会、その他、ゼミ指導や各教員の授業等々、各自が強い責任感を持ってやっています。結局は普通にやるべきことをやっている地道な活動が大切です。そして、確実に効果を上げて来ています。教育に王道はありません。あるとすれば、この地道な活動をきちんとやること、これこそが王道です。(50%以上80%未満、BF、社会科学系)
- ・学内研修(50%以上80%未満、BF、社会科学系)
- ・毎回の授業の終わりに、小テストまたは小レポートを課して理解度を確認している。全教員が実際に実行しているとは思えないが、50%程度は実行しているのではないかと思われる。ジェネリックスキルと称して、建学の精神や教育理念、学ぶ姿勢、社会人としての振る舞いを学ぶ授業をおいている。ほとんどの学生が教育実習または保育実習を行うが、学力や学ぶ姿勢に問題ある学生は履修制限により次のステップに進めない。(50%以上80%未満、BF、教育学)
- ・PROGや基礎学力調査などで、アセスメントを行って各学年での成長度合いを分析している。また、オリジナルのアセスメント、学習時間調査などでより具体的に学習時間や意欲などを分析し、成長の記録を視覚化したものを面談時に用いて、ふり返りをさせている。(50%以上80%未満、BF、その他)
- ・各科目において授業評価アンケートをおこなっている。(50%以上80%未満、BF、その他)

- ・教員による授業点検評価。学生による授業評価アンケート。(100%以上、40、芸術系)
- ・教科書の共通化、卒業試験の実施(100%以上、40、その他)
- ・個別に自己評価を行い、点数化している。その内容は大学で集計され、人事考課として評価される。(100%以上、40、その他)
- ・少人数ゼミ。外部評価者による達成度評価並びにフィードバック(OSCE)。卒業生からの教育に対するフィードバックを受け、学内教育の改善に生かす。(100%以上、42.5、保健系)
- ・1.教育、研究における多面的なFD研修。2.教育方法学や教育心理学で著明な実績を有する外部講師による研修およびワークショップ。3.IT、ICTの活用。4.地域からの協力(2つの自治体と地域連携協定を締結している)→これが大きな効果を有する(学習の動機付け、教育活動(実践的))。5.障害者団体との協力関係により、障害者当事者の協力が得られている。6.教育提携病院との協力体制が極めて有効に作用している。7.●●中心地よりJRで50分所用し、まわりは田畑である。●●●●の自然豊かな環境が学生の学習集中度アップに貢献している。8.学部の中に学会を設置している。研究活動が教育活動と連動している。学生も参加するため、学生の研究活動へのモチベーションも高い。9.研究、教育業績を厳格に評価した上で昇格人事を行っている。まだ、効果的な取組みがありますが…。(100%以上、42.5、保健系)
- ・本学部は保険医療職の国家資格取得を目指す人材育成であることから、教育課程がほぼ定まっている。このことから、教育課程の順序性及び基礎学力の有り様は明確であり、教員一同充分自覚している。また、成績に問題ある学生には、個人的あるいはグループとしての指導も行き届いていると考えている。(100%以上、42.5、保健系)
- ・実質的学年制(留年制度)、国家試験合格率を担保しなくてはならない状況であるため。学生評価の教員へのフィードバックと部分的開示。(100%以上、42.5、保健系)
- ・年に数回のFDを開催して、CP、DPを教育内容に反映させるよう話し合いを行っている。(100%以上、42.5、保健系)
- ・シラバスの公開とそれに基づいた授業の自己評価の公開。ファカルティディベロップメントのための研修会開催。学生による授業評価アンケートの公開。(100%以上、42.5、保健系)
- ・国家試験による国家資格を取得する学部なので、国家試験合格率である程度判断できる。各専攻により違いはあるにせよ、比較的高い国家試験合格率を達成している。これは一年次より、初年時教育の重要性を教員間で共通な認識を持ち、能動的な授業となるよう努力してもっている。国試対策授業も重要視しており、4年次には外部の講師も招き対策を行っている。ICTの利用も推進している。(100%以上、42.5、保健系)
- ・各科目成績評価、GAP制(100%以上、42.5、保健系)
- ・授業の成績評価基準の明確化。授業検討会等による各科目の成績評価状況や指導方法などの共有化。その他FD活動の活性化。低学年時の欠席状況(全学必修科目、教養や語学系科目)の集計、連続欠席の学生情報を学科へ展開。指導教員から学生へ連絡、指導する体制の確立。(100%以上、42.5、理・工学系)
- ・自己点検・評価の実施、FD研修の実施、FDシンポジウムの実施、授業評価の実施、上記実施を含めたPDCAサイクルの構築(100%以上、42.5、理・工学系)
- ・JABEEや国家試験等で結果を出している。授業回数、内容評価、授業の外部評価、参観を行っている。(100%以上、42.5、理・工学系)
- ・私大改革総合支援事業で問われていることがらは全て行っている。しかしながら、それらが実際にどの程度効果があるか、疑問なしとしない。調査結果にも以前にくらべ、著しく改善されたという印象はない。制度的な意味では質保証の取組は実現しているが、実質はどうか。(100%以上、42.5、人文科学系)
- ・学修評価テストを導入、年次による調査、学生ポートフォリオの実施。(100%以上、42.5、人文科学系)
- ・資格の取得の推奨(100%以上、42.5、社会科学系)
- ・学生への授業改善アンケート結果に基づく教員の改善努力。FD懇談会(学生(学生の要望や苦情の受入れ、教授会で検討)と教員、教務委員等の話し合いの場)を開催。(100%以上、42.5、社会科学系)
- ・教員のFD活動(100%以上、42.5、社会科学系)
- ・アクティブラーニング、グループワーク、フィールドワーク(100%以上、42.5、社会科学系)
- ・FD活動や教授会を含む日々の情報交換・共有(100%以上、42.5、社会科学系)
- ・全学で行うFD(年に数回)および学部で行うFD(年2~3回)(100%以上、42.5、社会科学系)
- ・3のPolicyの策定、ナンバリング、カリキュラムポリシーの策定、ルーブリックの検討、PDCAの実施など(100%以上、42.5、社会科学系)
- ・授業アンケートの実施、少人数授業の開講(100%以上、42.5、教育学)
- ・毎年教員個人の教育活動について自己点検評価をおこなっている。(100%以上、42.5、教育学)
- ・授業アンケートの実施、教員の自己点検など(100%以上、42.5、体育学)
- ・アンケート調査(100%以上、42.5、その他)
- ・毎年度末に教員評価を研究、教育、職務の3分野で行ない、その結果に対してフィードバックをかけている。必要に応じて学部長との面談を行っている。(100%以上、45、薬学)
- ・看護技術チェックリスト、看護実践能力到達度評価を用い、単元ごとにチェックと評価を行い、必要に応じた学習支援等を行っている。(100%以上、45、保健系)
- ・国試合格率のデータをもとに学習面での問題のある学生に個別指導を行っている。(100%以上、45、保健系)
- ・大学教育として、大学の3つのディプロマシーに添って教育目標、達成度を示すようにしている。具体的には授業・演習・実習の3段階を経て4年間で目標達成できるようにカリキュラムを組んでいる。臨地実習は学生の自己成長へとつながっており、重きをおいている。しかし、実習指導に関わる教員は負担が大きいと感じている。(100%以上、45、保健系)
- ・国試結果(各問の解答率の検討)を領域ごとに行う。週一回のミーティングにて話し合う。年一回、技術評価(OSCE)を実施し、計画、考察を行う。(100%以上、45、保健系)
- ・国試の全国模試の成績による評価(100%以上、45、保健系)
- ・教育単位ごとに、学生が身に付けた専門力についての到達度調査を行い、その結果を踏まえて各ポリシー・カリキュラムの見直しにつなげるという自己点検評価・改善に取り組んでいる。専門力の到達度調査は、「学生に何を身に付けさせることができたか」という観点から、学生の学修到達度を総合的に評価する試みであり、独立試験問題や資格試験問題等に基づいて実施している。(100%以上、45、理・工学系)

- ・学科また学科内の専攻においても差がある。(50%未満、35、人文科学系)
- ・学生の多様性(学力、態度・習慣)(50%未満、35、社会科学系)
- ・ともすれば、国家試験合格への教育に偏重しており、教育の質保証及び学問の本質を伝え切ること不安が残っている。(50%未満、40、薬学)
- ・特になし。ただし、学生は学力等の差があつて、効果的に対応する必要がある。(50%未満、40、社会科学系)
- ・低レベルの学生(50%以上80%未満、BF、保健系)
- ・問15において、教育の質保証は「どちらかといえば実現できている」と回答した。ここでその妨げについて敢えて記述するとすれば、教職員の業務の負荷の大きさが挙げられる。教育、研究、大学運営、社会貢献等の諸活動の中で、いかに時間を効率良く使っていくかが重要である。(50%以上80%未満、BF、理・工学系)
- ・入学学生のレベル、学習習慣、意識の欠除、教員の意欲。(50%以上80%未満、BF、人文科学系)
- ・教員の大学運営業務が多く、手が回らない。評価や報告書の作成義務が年々増加、十分に教育の質保証にまで十分な時間と労力を割けない。(50%以上80%未満、BF、人文科学系)
- ・多様な分野を含む学部であるため、到達基準を具体的に設けることが困難。(50%以上80%未満、BF、人文科学系)
- ・教員の意識改革の遅れ(50%以上80%未満、BF、社会科学系)
- ・全学的に経費削減のため教員数が設置基準上最小となり、その中には教育専任教員もいるため、校務負担が過重になっている。研究活動をゼロにして、ようやく健康を保持できる状態の役職者もいる。その中で教育の質にまで気を配ることができない。(50%以上80%未満、BF、社会科学系)
- ・質保証のレベル設定ならびにその運用に関するコンセンサスがとれていない。(50%以上80%未満、BF、社会科学系)
- ・教育業績と研究業績など教員評価の基準があいまい。教育に多くの時間を割けれない、教員の絶対数の不足。(50%以上80%未満、BF、社会科学系)
- ・学生の質が管理が難しいくらいに分散している。(50%以上80%未満、BF、社会科学系)
- ・業務の多さ、論文や科研費等の獲得へのプレッシャー、先生によっては、教育よりも研究の方に重きを置く人も出てきています。特に若い人は。その結果、他大学へステップアップしようという行動になります。(50%以上80%未満、BF、社会科学系)
- ・実態のない入試。学力のない日本人学生と日本語力がない留学学生が混在の授業が多いこと。(50%以上80%未満、BF、社会科学系)
- ・学生定員の確保、学生の基礎学力、教職員の不足(50%以上80%未満、BF、社会科学系)
- ・高校での指導不足(50%以上80%未満、BF、家政学)
- ・入学の段階で、決定的に学力、学習するのに必要な意欲、身体性を十分に持ち合わせない学生が多い。大学教育として、そうしたマイナス面の教育活動を行うとしても、入学前までの長い学校生活で身につけてきた身体性や仲間関係のつくり方、自己表現力、コミュニケーション力を回復、修正することには限界がある。軽度の発達障害をもち、保護者も学生本人もそのことに対する自覚がなく、高校生活までに適切な対応がなされてこなかった学生が少なからず存在し、彼らに対する相談、カウンセリング支援を行っているが、大学としては限界がある。(50%以上80%未満、BF、教育学)
- ・指定校推薦で明らかに学力や学ぶ姿勢に問題がある生徒を推薦してくる高校があること。根本的には定員を満たしていないため。(50%以上80%未満、BF、教育学)
- ・小規模校ゆえ、各教員の持ちコマ数が多い上、大量の学務を抱え、研究も含め、いづれの問題においても時間的、体力的余裕のない教員が多いこと。(50%以上80%未満、BF、芸術系)
- ・学内の業務、広報業務(高校訪問)などに時間がとられて、教育や研究に時間がまわせない。(50%以上80%未満、BF、その他)
- ・教員全体の意識改革が進んでいない。危機意識のある先生が少ない。(50%以上80%未満、BF、その他)
- ・問15において、教育の質保証は「どちらかといえば実現できている」と回答した。ここでその妨げについて敢えて記述するとすれば、教職員の業務の負荷の大きさが挙げられる。教育、研究、大学運営、社会貢献等の諸活動の中で、いかに時間を効率良く使っていくかが重要である。(50%以上80%未満、BF、その他)
- ・入学時の学力低下と学習意欲をもたない学生の存在(50%以上80%未満、35、薬学)
- ・●●年に開設された新設学部であるため、●●名の(助教以上)の教員各自が、年4~6回のFD研修会を実施しているが、現在まで過去の教育経験や臨床経験また、古くは自分が受けた教育から離れられず、教育の質保証の実現ができない。私の経験ではこの点については開学から5年以上たつたないと、全教育のコンセンサスが得にくくギクシャクするものであるから、今後の努力により一方向ですすめることが出来ると考える。看護教員は自尊心が強い(不安や自身のなさのウラかも?)ので未知のものにはなじみが遅い欠点もある。(50%以上80%未満、35、保健系)
- ・一部教員の無理解。(50%以上80%未満、35、理・工学系)
- ・教員のポテンシャル(50%以上80%未満、35、理・工学系)
- ・単位認定基準の不統一(50%以上80%未満、35、理・工学系)
- ・具体的な施策に欠けるため。(50%以上80%未満、35、人文科学系)
- ・各教員の独立性が非常に高く、他の教職員によるチェックが働かない。(50%以上80%未満、35、人文科学系)
- ・教員の意識はある程度あるが、授業の成果や学生への様々な対応の効果に結びついていかない面があります。(50%以上80%未満、35、人文科学系)
- ・文科省の指導による外形的な対策はなされているが、それが本当の意味で質保証へとつながっているかはあやしい。シラバスへの予復習の記載、GPAの活用、CAP制、相対評価的な成績評価、外部テストの導入…。これらを導入することが目的化して、管理主義的な学生指導になりつつある。また、「質」を数値のみでとらえる傾向がある。(50%以上80%未満、35、人文科学系)
- ・学生の確保が優先〜定員割れ(50%以上80%未満、35、人文科学系)

- ・教員数の少なさ。教育、研究を補助するラボラン〇〇や事務職員の少なさ。平たくいうと「ヒトとカネ」(80%以上100%未満、42.5、家政学)
- ・教職員の意識改革の困難さ(100%以上、BF、理・工学系)
- ・教育に関しては基本的に個々の教員の責任という一般的考え方が存在(100%以上、BF、社会科学系)
- ・アドミッションポリシーとディプロマポリシーが一致することの困難さ。経営的側面とのバランス。教員の教育イメージと実際の教育現場の状況(端的に、学生の意欲と学力)とのギャップ。(100%以上、BF、社会科学系)
- ・入学者の基礎学力が、大学教育の想定レベルに達していない。(100%以上、BF、社会科学系)
- ・「質」の意味(定義)が各自、捉え方が様々である。一般的に学力の向上が必要であることは全員が理解している。(100%以上、BF、社会科学系)
- ・入学時点までに達成できている学習水準の低さ。(100%以上、BF、社会科学系)
- ・入学する学生の基礎学力や学習習慣にバラツキがあること、したがって、通常の授業を行ってもついていけない学生が生じることになるが、このような学生に対する補習授業・指導を実施するには教員数が少ないこと、これらの要因が教育の質保証の実現の妨げになっているものと思われる。(100%以上、BF、社会科学系)
- ・各教員の意識(100%以上、BF、社会科学系)
- ・入学時点における基礎学力の欠除。(100%以上、BF、その他)
- ・授業や研究以外の諸業に追われ、多忙すぎる。質保証への意識はそれなりにあるが、具体的な方法について、教員それぞれの利害関係から、合意がなかなかはかれない。(100%以上、35、人文科学系)
- ・教育に関わる努力が大学から全く評価されないこと。(100%以上、35、人文科学系)
- ・法人側が経営の観点から、なるべく落第は出さないでほしいという要望を強く打ち出し、落第率を教育評価に<事実上(形式上は否定している)>反映させているから。(100%以上、35、人文科学系)
- ・教員のあいだのコミュニケーションが足りない。(100%以上、35、人文科学系)
- ・諸事への対応の多さ、マンパワーの流出(100%以上、35、社会科学系)
- ・検証方法の適切性(客観的な)。入学時に求める能力と実態の乖離。外部テストを導入して楔確認しているが、全体をカバーできていない(受験しない学生)。(100%以上、35、社会科学系)
- ・「妨げ」になっている要因はなし。制度としてきちんと推進する気運になかったことが大きい。来年度から鋭意取組んでいくこととしている。(100%以上、35、社会科学系)
- ・教員相互の教育面での競争がない(昇格基準では評価対象として重視されていないこともこの原因か?)(100%以上、35、社会科学系)
- ・現状、教員個々人の努力によってなされており、問13レベルの具体的到達基準内容の詳細が設定されていない。公的資格・免許の養成課程のため、その理解、取得状況が質の実現の判断とされている。(100%以上、35、社会科学系)
- ・カリキュラムと教員の専門の整合性が必ずしもとれていない。(100%以上、35、社会科学系)
- ・①教員間の認識のズレと意欲差、②ガバナンス、③予算、④支援する職員の不足(100%以上、35、社会科学系)
- ・本学の教育の質保証としては社会人基礎力を評価することが必要であるが、社会の共通認識として使える評価方法や評価指標が確立されていない。(100%以上、35、社会科学系)
- ・教員間の合意形成プロセスを大切にしており、特にバリアはない。(100%以上、35、社会科学系)
- ・各ゼミ毎に一任されており、全体としての評価が乏しい(100%以上、35、社会科学系)
- ・定員充足の観点と入学者の質を確保する観点とのコンフリクトがある。(100%以上、35、家政学)
- ・ICT活用に充分対応できる教員がまだ多くはないこと(100%以上、35、その他)
- ・教育の質を計る客観的評価基準が無い。(100%以上、35、その他)
- ・学生数が多い(学科により差)為、教員の日常的な業務負担が大きい(多忙)。経済的理由でアルバイトをしている学生が多く、自学自習の時間が確保しにくい。(100%以上、35、その他)
- ・授業担当教員のうち、非常勤講師の占める割合が低くないため、学部の教育方針を十分に共有できないこと。(100%以上、37.5、保健系)
- ・一般論ですが、大切なのは個々の教員の質と意識の問題だと思います。(100%以上、37.5、保健系)
- ・学生確保として、低学力者の一定数の入学は否めない。進路に迷いのあるまま入学してくる学生も少数ながらいること。(100%以上、37.5、保健系)
- ・小中高と写実的な物の考え方を行わせているため、物事を論理的に考えることができていない。(100%以上、37.5、保健系)
- ・入学生の学力のバラツキ。集中力、持続力のない学生が多い(学習の習慣がない)→医療系にも関わらず、教育方法に悩んでいる。(100%以上、37.5、保健系)
- ・教職員のコミュニケーション不足が発生した場合。それぞれの教育観について固執が認められた場合。(100%以上、37.5、保健系)
- ・教員の異動(100%以上、37.5、保健系)
- ・これまで学生個別に対応し、なるべく引き上げるという教育を行ってきたように思うので、一定のラインまで全員を上げるという方法は、現在のしくみや考え方に合っていないため、必要性はわかってもなかなか実現できない。意識の問題が大きいのか。(100%以上、37.5、理・工学系)
- ・専任教員数の減少(100%以上、37.5、理・工学系)
- ・教員の教育の質に関する関心や意識の低さ、教育環境に対する法人の意識や金銭的保証が少ないこと、であろう。また、発達障害学生に対する、また合理的配慮に対する理解が乏しいと云えそうである。(100%以上、37.5、人文科学系)
- ・①学習成果の可視化を行う上での基準となる項目の設定。②個々の学生のデータ集積と分析及びフィードバックを行う担当者の不在。(100%以上、37.5、人文科学系)

- ・来たる超少子化時代に向けて、教員の補充人事を行ってもらえないため、現場の教員が疲弊しきっており、理想とするような授業を準備できない時がある。同様の理由で、施設の更新がままならず、例えばテレビスタジオの設備などでは数人で1台の機器のシェアを余儀なくされている。(本学は理系中心の大学であるため、文系は何かと軽視される風潮がある)(100%以上、37.5、人文科学系)
- ・①質保証に必要な取り組みに関する教員間の認識のズレと意欲差、②大学のガバナンス、③予算、④支援する職員の不足(100%以上、37.5、人文科学系)
- ・教員数の削減により、教員のあらゆる面での負担が大きくなっており、改善にとり組む余裕がなくなっている。(100%以上、37.5、社会科学系)
- ・退職間近の教授達による教育の手抜き。退職間近の教授達に対して物申せる人物の不在。教育への貢献に対する評価基準がないこと。(100%以上、37.5、社会科学系)
- ・教員間で取り組みの格差が大きい。学生側の意識も低いため、質保証と受験者・入学者確保とのバランスをどのようにとるか、社会的な評価が定着するまでの不確実性の問題もある。(100%以上、37.5、社会科学系)
- ・保証すべき学力の内容について、合意が難しい。(100%以上、37.5、社会科学系)
- ・現在FD等により検討中。(100%以上、37.5、社会科学系)
- ・カリキュラムを工夫しても、教員から学生に対して積極的に働きかけも、どうしてもそれに反応しない学生が存在する。諦めの気持ちを持つ学生を動かすのはむづかしいと感じている。(100%以上、37.5、社会科学系)
- ・質保証の定義、参照基準不足(100%以上、37.5、社会科学系)
- ・小規模大学であるため、校務が多忙を極め、教育に十分な時間を割り当てることができない教員が少なくない。(100%以上、37.5、家政学)
- ・経済的余裕の無い学生が多く、アルバイトに専念して予習・復習は勿論のこと遅刻や欠席がちとなっている。(100%以上、37.5、家政学)
- ・教員、職員の不足。労働時間強化→研究に時間とれない熱心な教員とそうでない教員の意識差(100%以上、37.5、教育学)
- ・基礎学力の欠如した学生や学習習慣や学習レディネスの欠如した学生が多いため、教育の質を保証するところまで到達できないのが現状である。(100%以上、37.5、その他)
- ・大学の教学方針を決めるトップ(学部長を越えたところ)が教学内容を十分に理解しておらず、学部はその教育内容を十分に発揮できない。(100%以上、37.5、その他)
- ・質の基準を学生にどのように適合させるかは、毎年、学生によっても厳密に同一とは定められないこと。(100%以上、37.5、その他)
- ・授業の成績評価の考え方のばらつき。教員の忙しさから、きめこまかいフィードバックが欠如であること。(100%以上、37.5、その他)
- ・教育の質保証についてのPDCAのうち、計画に基づき実施はしているが、その検証を行って、次の改善策につながるまでは正直、実現していない。(100%以上、37.5、その他)
- ・一定の教員の流出と流入が毎年あり、その層はいつも入れかわる。そのため、教員の質が一定に保たれない。大学に研究を優先する考え方が根強い(学長の考え)(100%以上、40、保健系)
- ・1.入学している学生の多様性(知識や基礎学力)に対応するだけの教員(人材)の不足及び教員の認識不足も否めないこと。2.教員1人当りの授業担当コマ数(教授7コマ、准教授以下8コマ)が多く、講義に追われているのが現状であること。3.学習に問題を抱えている学生達を専門(専任)に支援する仕組みがないこと。(100%以上、40、保健系)
- ・教員の業務が多い(実習場が遠方の為)為、研究がなかなか継続できない。(100%以上、40、保健系)
- ・教員の不足。(100%以上、40、保健系)
- ・教員の高齢化(または高齢者の割合が多い)(100%以上、40、保健系)
- ・教育の質の分析作業の遅れが要因と考える。これからの目標としてIR活動の活発化によりPDCAサイクルによる教育の質保障を実施していく。(100%以上、40、保健系)
- ・質の基準を厳格にした場合、卒業要件を満たすことのできない学生が一定数生じることが懸念される。現在は各コースで自主基準を設け、コース教育としての点検は行っているが、個々の学生の評価の妥当性については検証していない。「卒業」を合/否ではなく、GPAなどに対応する格付が可能であれば、質保証対応を進めやすいように思われるが、社会的に受け入れられない。(100%以上、40、理・工学系)
- ・個々の科目では実施できるが、全ての科目に対応させるシステム化が遅れている。(100%以上、40、理・工学系)
- ・特にありません。取り組むのが比較的遅かったので、全学的に現在進行中です。(100%以上、40、人文科学系)
- ・どのような形で「教育の質保証」を「評価」するかの合意形成が難しい。そもそもこうした「計画」があり得るのが疑問。(100%以上、40、人文科学系)
- ・問10に示したように、本学においては教員評価の基礎を研究能力と業績に求めることが確立しているため、どうしても教育にかけるエフォートは低くならざるを得ない。(100%以上、40、社会科学系)
- ・学務負担の大きさと不均衡、偏在。教育活動に対する熱意の不均質性。一部、教育・研究能力の不足。(100%以上、40、社会科学系)
- ・各教員の理想の違い。(100%以上、40、社会科学系)
- ・多様な入試を行っているため、基礎的な学力に関して、学生のバラツキがあること。ゼミナールに於て少人数教育を初年次から行っているが、学生個々の学力の差を埋めるには、課外での取り組みの必要性を感じてはいる。しかし、その取り組みを実現するための体制が取れていないこと。(100%以上、40、社会科学系)
- ・新設の学部なので、ネームバリューもなく実績はこれからなので入学定員の確保を最優先課題としているため、学生のレベルの幅が大きく各々のレベルにあった教育が困難。(100%以上、40、家政学)
- ・短大から移行した教員の中に力量不足の者がおり、自覚も不足していること。(100%以上、40、教育学)
- ・各教員の学生との関わり方。(100%以上、40、教育学)
- ・教員不足、予算不足(100%以上、40、教育学)
- ・大学全体の改組や種々の改革に伴う作業が多く、おしなべて教育には誠意にとりくむ教員が多い中で、それをシステム化するための時間的余力がない。(100%以上、40、その他)
- ・学生の多様化(100%以上、40、その他)
- ・現在、当学部は良い方向に向い、学生の質向上と自己実現(就職)なども可能となっている(100%以上、40、その他)

- ・理念に対する無理解(100%以上、45、社会科学系)
- ・限られた委員会で議論し、決定事項として報告され、実施するように指示されるため、各教員の意気込みに温度差がある。それぞれの実施案に雛形や事例を示すことで、各教員の独自性もそこに付加できるので前向きで実施に踏み切れると思われる。(100%以上、45、家政学)
- ・問13の「具体的な基準」の設定及びその共有がなされていない。(100%以上、45、教育学)
- ・質保証の具体的な基準を作成しようという意識が薄い。授業は担当教員に任せるという意識が強い。(100%以上、45、体育学)
- ・e-ラーニング、アクティブラーニング等、様々な教育方法はあるが、十分活用できていない。実習設備や機械機器等の定期的な更新や新たな機能習得のため、機器の新規購入が必要になっても、莫大な経費がかかるため、一度に行えないこと。(100%以上、47.5、歯学)
- ・大学及び理事会の薬学教育に対する理解不足。適切な改善を行うことが大学の経営を理由に認められないことが多くある。例えば、学費の値上げや定員数を減すなどがある。(100%以上、47.5、薬学)
- ・管理栄養士はじめ各学科の教育の柱になる資格関連の必修科目が多く、自学自修の時間を充分確保させることが難しい。そのため、文科省が示す単位の実質化は、CAP制を設定してはいても、ほぼ困難である。(100%以上、47.5、保健系)
- ・横のつながりが薄い(専門領域間の壁)(100%以上、47.5、保健系)
- ・実習指導の負担→カリキュラム改正を検討中。研究時間の確保ができない。(100%以上、47.5、保健系)
- ・研究活動、学務とのバランスの中で、全体的に教員の負荷が高く、そもそも十分な時間が割けない。(100%以上、47.5、理・工学系)
- ・教員数の少なさ(100%以上、47.5、理・工学系)
- ・教員がアドミニストレーションに時間をとられていること。(100%以上、47.5、理・工学系)
- ・質保証に対する総括的評価が定まっていない(100%以上、47.5、農学系)
- ・学習成果を評価する直接的指標を作るのが難しいこと。評価にかかるコストを今以上増やせないこと(時間的にも労力的にも、今が精一杯)。評価基準を統一することの難しさ(英語担当教員の間でさえ、統一テストで評価することに抵抗がある)。(100%以上、47.5、人文科学系)
- ・授業アンケートの教員評価への活用(100%以上、47.5、人文科学系)
- ・教員の多忙化。経営効率を優先させる経営者の方針により、専任事務職員のリストラチャーが進み、この10年で教員の事務負担がほぼ倍増、●●などは文学部長と教職、司書、学芸員、教育センター長兼務の状態が4年、学部長と初年次教育部内長兼務が4年で肺炎になっても入院まならず、点滴でのりきらざるを得ない状況である。(100%以上、47.5、人文科学系)
- ・多忙(委員会、入試業務他等)(100%以上、47.5、人文科学系)
- ・義務教育課程にて学修すべき量・質の著しい劣化。(100%以上、47.5、社会科学系)
- ・様々な書類作成(自己点検、アンケート調査)(100%以上、47.5、社会科学系)
- ・学生数が極めて多いこと。(100%以上、47.5、社会科学系)
- ・日本の大学制度の実情から、事実上、留年、卒業延期がさせにくい。(100%以上、47.5、家政学)
- ・教員の多忙化、学生の多忙化(100%以上、47.5、教育学)

問18. 大衆化した大学における教育の質保証に関する以下のような意見について、どのようにお考えになりますか。貴学部における教育の質保証の現状等をふまえた上でお答えください。

1) 教育の質保証に積極的に取り組まなければならない

	全体	定員充足率				偏差値							
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5	
①反対	0.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.9%	1.6%	1.4%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
②どちらかといえば反対	4.4%	11.1%	3.4%	1.8%	5.0%	4.8%	5.6%	4.9%	2.4%	4.0%	3.4%	3.8%	
③どちらかといえば賛成	35.6%	0.0%	33.9%	26.8%	39.9%	34.9%	23.6%	36.1%	41.5%	42.0%	41.4%	42.3%	
④賛成	59.5%	88.9%	62.7%	71.4%	54.1%	58.7%	69.4%	59.0%	56.1%	54.0%	55.2%	53.8%	
N	343	9	59	56	218	63	72	61	41	50	29	26	
		学部系統											
		歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
①反対	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
②どちらかといえば反対	0.0%	0.0%	1.6%	6.3%	0.0%	8.0%	4.9%	0.0%	0.0%	0.0%	28.6%	2.6%	
③どちらかといえば賛成	33.3%	40.0%	21.3%	46.9%	50.0%	36.0%	40.8%	15.4%	33.3%	0.0%	28.6%	43.6%	
④賛成	66.7%	60.0%	77.0%	46.9%	50.0%	56.0%	52.4%	84.6%	66.7%	100.0%	42.9%	53.8%	
N	3	10	61	32	2	50	103	13	21	1	7	39	

2) 教育の質保証を実現するためには、出口管理の強化を行うべきである

	全体	定員充足率				偏差値							
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5	
①反対	2.9%	0.0%	5.1%	1.8%	2.8%	6.3%	2.8%	3.3%	0.0%	4.0%	0.0%	0.0%	
②どちらかといえば反対	17.5%	11.1%	16.9%	12.5%	19.4%	20.6%	12.5%	16.7%	19.5%	14.0%	20.7%	26.9%	
③どちらかといえば賛成	44.2%	66.7%	45.8%	44.6%	42.9%	46.0%	48.6%	40.0%	36.6%	44.0%	55.2%	38.5%	
④賛成	35.4%	22.2%	32.2%	41.1%	35.0%	27.0%	36.1%	40.0%	43.9%	38.0%	24.1%	34.6%	
N	342	9	59	56	217	63	72	60	41	50	29	26	
		学部系統											
		歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
①反対	0.0%	0.0%	1.6%	0.0%	0.0%	6.0%	4.9%	0.0%	4.8%	0.0%	0.0%	0.0%	
②どちらかといえば反対	0.0%	10.0%	11.5%	22.6%	50.0%	26.0%	14.6%	15.4%	9.5%	0.0%	42.9%	23.1%	
③どちらかといえば賛成	66.7%	40.0%	36.1%	41.9%	50.0%	34.0%	50.5%	53.8%	42.9%	100.0%	42.9%	51.3%	
④賛成	33.3%	50.0%	50.8%	35.5%	0.0%	34.0%	30.1%	30.8%	42.9%	0.0%	14.3%	25.6%	
N	3	10	61	31	2	50	103	13	21	1	7	39	

3) 教育の質保証を実現するためには、第三者機関によって「何を」「どこまで」というような基準が定められるべきである

	全体	定員充足率				偏差値						
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5
①反対	19.5%	11.1%	19.0%	16.1%	21.0%	19.4%	16.7%	20.3%	22.0%	16.3%	25.0%	23.1%
②どちらかといえば反対	45.6%	44.4%	60.3%	33.9%	44.9%	54.8%	45.8%	42.4%	39.0%	44.9%	46.4%	42.3%
③どちらかといえば賛成	25.1%	11.1%	19.0%	33.9%	25.2%	21.0%	30.6%	25.4%	26.8%	26.5%	14.3%	26.9%
④賛成	9.8%	33.3%	1.7%	16.1%	8.9%	4.8%	6.9%	11.9%	12.2%	12.2%	14.3%	7.7%
N	338	9	58	56	214	62	72	59	41	49	28	26
		学部系統										
	歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
①反対	0.0%	10.0%	11.9%	15.6%	0.0%	24.5%	24.3%	15.4%	23.8%	0.0%	28.6%	18.9%
②どちらかといえば反対	66.7%	30.0%	30.5%	50.0%	50.0%	49.0%	46.6%	53.8%	38.1%	100.0%	57.1%	59.5%
③どちらかといえば賛成	0.0%	30.0%	42.4%	31.3%	50.0%	22.4%	20.4%	30.8%	19.0%	0.0%	0.0%	16.2%
④賛成	33.3%	30.0%	15.3%	3.1%	0.0%	4.1%	8.7%	0.0%	19.0%	0.0%	14.3%	5.4%
N	3	10	59	32	2	49	103	13	21	1	7	37

4) 教育の質保証を実現するためには、大学の種別化・機能分化を行うべきである(例えば、第一種大学/第二種大学、など)

	全体	定員充足率				偏差値						
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5
①反対	33.3%	22.2%	32.2%	27.3%	35.8%	24.2%	34.7%	37.3%	29.3%	32.7%	34.5%	50.0%
②どちらかといえば反対	41.0%	44.4%	44.1%	36.4%	41.4%	50.0%	38.9%	39.0%	48.8%	34.7%	41.4%	30.8%
③どちらかといえば賛成	19.2%	22.2%	16.9%	21.8%	18.6%	17.7%	18.1%	15.3%	22.0%	28.6%	13.8%	15.4%
④賛成	6.5%	11.1%	6.8%	14.5%	4.2%	8.1%	8.3%	8.5%	0.0%	4.1%	10.3%	3.8%
N	339	9	59	55	215	62	72	59	41	49	29	26
		学部系統										
	歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
①反対	33.3%	22.2%	21.3%	53.1%	50.0%	32.0%	28.7%	46.2%	42.9%	100.0%	28.6%	42.1%
②どちらかといえば反対	33.3%	55.6%	44.3%	25.0%	50.0%	42.0%	47.5%	23.1%	23.8%	0.0%	42.9%	44.7%
③どちらかといえば賛成	33.3%	11.1%	26.2%	21.9%	0.0%	14.0%	18.8%	23.1%	23.8%	0.0%	14.3%	10.5%
④賛成	0.0%	11.1%	8.2%	0.0%	0.0%	12.0%	5.0%	7.7%	9.5%	0.0%	14.3%	2.6%
N	3	9	61	32	2	50	101	13	21	1	7	38

5) 教育の質保証を実現するためには、教員の研究にかけるエフォートはできる限り小さくすべきである

	全体	定員充足率				偏差値						
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5
①反対	36.7%	11.1%	21.1%	41.1%	40.8%	29.5%	31.9%	37.7%	36.6%	42.0%	37.9%	53.8%
②どちらかといえば反対	43.4%	77.8%	50.9%	28.6%	43.6%	44.3%	44.4%	49.2%	43.9%	38.0%	41.4%	34.6%
③どちらかといえば賛成	17.3%	11.1%	24.6%	25.0%	13.8%	23.0%	18.1%	9.8%	19.5%	18.0%	20.7%	11.5%
④賛成	2.6%	0.0%	3.5%	5.4%	1.8%	3.3%	5.6%	3.3%	0.0%	2.0%	0.0%	0.0%
N	341	9	57	56	218	61	72	61	41	50	29	26
		学部系統										
	歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
①反対	0.0%	50.0%	32.8%	50.0%	0.0%	40.0%	40.2%	38.5%	23.8%	100.0%	28.6%	26.3%
②どちらかといえば反対	66.7%	40.0%	45.9%	28.1%	100.0%	36.0%	39.2%	46.2%	57.1%	0.0%	71.4%	55.3%
③どちらかといえば賛成	33.3%	10.0%	18.0%	15.6%	0.0%	20.0%	18.6%	15.4%	14.3%	0.0%	0.0%	18.4%
④賛成	0.0%	0.0%	3.3%	6.3%	0.0%	4.0%	2.0%	0.0%	4.8%	0.0%	0.0%	0.0%
N	3	10	61	32	2	50	102	13	21	1	7	38

6) 教育の質保証を実現するためには、教育活動のみを職務とする教育専従教員が必要である

	全体	定員充足率				偏差値						
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5
①反対	19.9%	11.1%	15.5%	14.3%	22.9%	16.1%	13.9%	26.2%	19.5%	20.0%	20.7%	30.8%
②どちらかといえば反対	31.3%	33.3%	17.2%	41.1%	32.1%	25.8%	33.3%	34.4%	34.1%	24.0%	37.9%	30.8%
③どちらかといえば賛成	33.9%	22.2%	37.9%	33.9%	33.5%	33.9%	36.1%	24.6%	34.1%	44.0%	31.0%	34.6%
④賛成	14.9%	33.3%	29.3%	10.7%	11.5%	24.2%	16.7%	14.8%	12.2%	12.0%	10.3%	3.8%
N	342	9	58	56	218	62	72	61	41	50	29	26
		学部系統										
	歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
①反対	0.0%	0.0%	29.5%	15.6%	0.0%	16.0%	20.4%	7.7%	28.6%	100.0%	28.6%	15.8%
②どちらかといえば反対	33.3%	30.0%	27.9%	37.5%	50.0%	30.0%	33.0%	38.5%	19.0%	0.0%	28.6%	31.6%
③どちらかといえば賛成	66.7%	60.0%	29.5%	28.1%	50.0%	34.0%	34.0%	38.5%	33.3%	0.0%	28.6%	36.8%
④賛成	0.0%	10.0%	13.1%	18.8%	0.0%	20.0%	12.6%	15.4%	19.0%	0.0%	14.3%	15.8%
N	3	10	61	32	2	50	103	13	21	1	7	38

7) 十分な支援を行ったとしても一定の基準を満たせない学生は出てきてしまうため、教育の質保証は厳格に考えるべきではない

	全体	定員充足率				偏差値						
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5
①反対	15.6%	44.4%	17.2%	18.2%	13.4%	18.0%	16.7%	13.1%	14.6%	14.3%	10.3%	23.1%
②どちらかといえば反対	45.3%	44.4%	39.7%	54.5%	44.2%	41.0%	43.1%	47.5%	39.0%	53.1%	48.3%	46.2%
③どちらかといえば賛成	29.7%	11.1%	31.0%	14.5%	34.1%	26.2%	29.2%	29.5%	39.0%	24.5%	41.4%	23.1%
④賛成	9.4%	0.0%	12.1%	12.7%	8.3%	14.8%	11.1%	9.8%	7.3%	8.2%	0.0%	7.7%
N	340	9	58	55	217	61	72	61	41	49	29	26
		学部系統										
	歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
①反対	33.3%	10.0%	23.3%	9.7%	0.0%	18.0%	17.5%	0.0%	4.8%	0.0%	0.0%	15.8%
②どちらかといえば反対	66.7%	70.0%	48.3%	51.6%	100.0%	38.0%	35.0%	84.6%	47.6%	0.0%	57.1%	44.7%
③どちらかといえば賛成	0.0%	10.0%	25.0%	29.0%	0.0%	26.0%	35.9%	7.7%	38.1%	100.0%	28.6%	36.8%
④賛成	0.0%	10.0%	3.3%	9.7%	0.0%	18.0%	11.7%	7.7%	9.5%	0.0%	14.3%	2.6%
N	3	10	60	31	2	50	103	13	21	1	7	38

IV. 貴学部の現状についてうかがいます。

問19. 貴学部の現状はどのような状況にありますか。

1) 教育改革の進捗状況(競争するような学部と比較して)

	全体	定員充足率				偏差値						
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5
①遅れている	4.4%	11.1%	10.2%	3.5%	2.8%	11.1%	2.7%	4.9%	2.4%	4.1%	0.0%	0.0%
②どちらかといえば遅れている	13.5%	22.2%	13.6%	10.5%	14.0%	11.1%	16.4%	14.8%	12.2%	8.2%	18.5%	15.4%
③どちらともいえない	33.4%	33.3%	35.6%	33.3%	33.0%	34.9%	30.1%	27.9%	36.6%	38.8%	33.3%	38.5%
④どちらかといえば進んでいる	32.6%	33.3%	30.5%	29.8%	33.5%	28.6%	39.7%	31.1%	34.1%	26.5%	33.3%	30.8%
⑤進んでいる	10.6%	0.0%	3.4%	15.8%	11.6%	9.5%	5.5%	13.1%	9.8%	16.3%	7.4%	15.4%
⑥わからない	5.6%	0.0%	6.8%	7.0%	5.1%	4.8%	5.5%	8.2%	4.9%	6.1%	7.4%	0.0%
N	341	9	59	57	215	63	73	61	41	49	27	26
		学部系統										
	歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
①遅れている	0.0%	10.0%	1.7%	3.0%	0.0%	6.0%	6.8%	0.0%	5.0%	0.0%	0.0%	2.6%
②どちらかといえば遅れている	0.0%	10.0%	8.5%	15.2%	50.0%	14.0%	13.6%	7.7%	15.0%	100.0%	28.6%	15.4%
③どちらともいえない	0.0%	30.0%	42.4%	33.3%	0.0%	40.0%	31.1%	23.1%	30.0%	0.0%	14.3%	33.3%
④どちらかといえば進んでいる	66.7%	40.0%	27.1%	27.3%	50.0%	30.0%	33.0%	69.2%	25.0%	0.0%	42.9%	30.8%
⑤進んでいる	33.3%	10.0%	15.3%	12.1%	0.0%	4.0%	8.7%	0.0%	20.0%	0.0%	14.3%	12.8%
⑥わからない	0.0%	0.0%	5.1%	9.1%	0.0%	6.0%	6.8%	0.0%	5.0%	0.0%	0.0%	5.1%
N	3	10	59	33	2	50	103	13	20	1	7	39

2) 受験者数の推移(5年程度前と比較して)

	全体	定員充足率				偏差値						
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5
①減少している	11.4%	44.4%	16.9%	14.3%	7.9%	22.2%	11.1%	13.1%	2.4%	4.0%	11.1%	11.5%
②どちらかといえば減少している	22.9%	44.4%	39.0%	23.2%	17.6%	20.6%	31.9%	24.6%	12.2%	20.0%	25.9%	19.2%
③どちらともいえない	23.8%	11.1%	18.6%	21.4%	25.9%	15.9%	22.2%	19.7%	34.1%	30.0%	33.3%	15.4%
④どちらかといえば増加している	18.8%	0.0%	11.9%	26.8%	19.4%	15.9%	19.4%	19.7%	26.8%	18.0%	11.1%	19.2%
⑤増加している	22.3%	0.0%	11.9%	14.3%	28.2%	25.4%	15.3%	18.0%	24.4%	28.0%	18.5%	34.6%
⑥わからない	0.9%	0.0%	1.7%	0.0%	0.9%	0.0%	0.0%	4.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
N	341	9	59	56	216	63	72	61	41	50	27	26
		学部系統										
	歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
①減少している	0.0%	0.0%	8.3%	6.1%	50.0%	18.0%	10.9%	0.0%	19.0%	100.0%	28.6%	10.3%
②どちらかといえば減少している	66.7%	50.0%	30.0%	21.2%	0.0%	30.0%	16.8%	30.8%	14.3%	0.0%	14.3%	15.4%
③どちらともいえない	0.0%	30.0%	25.0%	18.2%	50.0%	16.0%	23.8%	46.2%	23.8%	0.0%	0.0%	30.8%
④どちらかといえば増加している	0.0%	20.0%	16.7%	27.3%	0.0%	12.0%	21.8%	23.1%	14.3%	0.0%	42.9%	15.4%
⑤増加している	33.3%	0.0%	16.7%	27.3%	0.0%	24.0%	25.7%	0.0%	28.6%	0.0%	14.3%	28.2%
⑥わからない	0.0%	0.0%	3.3%	0.0%	0.0%	0.0%	1.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
N	3	10	60	33	2	50	101	13	21	1	7	39

3) 中退率の推移(5年程度前と比較して)

	全体	定員充足率				偏差値						
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5
①悪化している	1.2%	0.0%	1.7%	3.5%	0.5%	3.2%	1.4%	1.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
②どちらかといえば悪化している	9.1%	12.5%	11.9%	15.8%	6.5%	14.3%	9.6%	8.2%	5.0%	8.0%	7.1%	7.7%
③どちらともいえない	46.5%	75.0%	50.8%	31.6%	48.4%	50.8%	43.8%	39.3%	47.5%	48.0%	53.6%	50.0%
④どちらかといえば改善している	24.6%	12.5%	20.3%	24.6%	25.8%	15.9%	31.5%	24.6%	27.5%	26.0%	21.4%	19.2%
⑤改善している	14.9%	0.0%	11.9%	19.3%	15.2%	12.7%	12.3%	18.0%	20.0%	14.0%	10.7%	19.2%
⑥わからない	3.8%	0.0%	3.4%	5.3%	3.7%	3.2%	1.4%	8.2%	0.0%	4.0%	7.1%	3.8%
N	342	8	59	57	217	63	73	61	40	50	28	26
		学部系統										
	歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他
①悪化している	0.0%	0.0%	1.6%	0.0%	0.0%	0.0%	2.0%	0.0%	4.8%	0.0%	0.0%	0.0%
②どちらかといえば悪化している	0.0%	20.0%	14.8%	3.0%	0.0%	12.0%	6.9%	7.7%	0.0%	0.0%	0.0%	12.8%
③どちらともいえない	33.3%	70.0%	54.1%	33.3%	100.0%	50.0%	47.5%	30.8%	38.1%	0.0%	57.1%	41.0%
④どちらかといえば改善している	33.3%	10.0%	14.8%	36.4%	0.0%	16.0%	26.7%	46.2%	19.0%	100.0%	42.9%	28.2%
⑤改善している	33.3%	0.0%	8.2%	24.2%	0.0%	16.0%	12.9%	15.4%	33.3%	0.0%	0.0%	17.9%
⑥わからない	0.0%	0.0%	6.6%	3.0%	0.0%	6.0%	4.0%	0.0%	4.8%	0.0%	0.0%	0.0%
N	3	10	61	33	2	50	101	13	21	1	7	39

4) 就職実績の推移(就職先等、5年程度前と比較して)

	全体	定員充足率				偏差値							
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5	
①下がっている	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
②どちらかといえば下がっている	0.3%	0.0%	1.7%	0.0%	0.0%	0.0%	1.4%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
③どちらともいえない	25.3%	50.0%	22.4%	21.8%	26.2%	33.3%	19.7%	15.0%	18.4%	33.3%	40.0%	26.9%	
④どちらかといえば上がっている	32.2%	37.5%	36.2%	27.3%	31.9%	31.7%	36.6%	35.0%	31.6%	22.9%	28.0%	34.6%	
⑤上がっている	39.2%	12.5%	37.9%	47.3%	38.6%	34.9%	42.3%	40.0%	47.4%	39.6%	32.0%	34.6%	
⑥わからない	3.0%	0.0%	1.7%	3.6%	3.3%	0.0%	0.0%	10.0%	2.6%	4.2%	0.0%	3.8%	
N	332	8	58	55	210	63	71	60	38	48	25	26	
		学部系統											
	歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他	
①下がっている	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
②どちらかといえば下がっている	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2.6%
③どちらともいえない	0.0%	90.0%	38.6%	18.2%	0.0%	22.4%	24.2%	0.0%	21.1%	0.0%	0.0%	0.0%	20.5%
④どちらかといえば上がっている	0.0%	10.0%	17.5%	30.3%	50.0%	40.8%	33.3%	41.7%	26.3%	100.0%	71.4%	38.5%	
⑤上がっている	100.0%	0.0%	31.6%	51.5%	50.0%	36.7%	41.4%	58.3%	47.4%	0.0%	28.6%	35.9%	
⑥わからない	0.0%	0.0%	12.3%	0.0%	0.0%	0.0%	1.0%	0.0%	5.3%	0.0%	0.0%	2.6%	
N	3	10	57	33	2	49	99	12	19	1	7	39	

問20. 貴学部の現状についての問題意識は、どの程度の教員に共有されていますか。印象で結構ですので、貴学部の教員全体に占めるおおよその割合をお書きください。

	全体	定員充足率				偏差値							
		50%未満	50%以上 80%未満	80%以上 100%未満	100%以上	BF	35	37.5	40	42.5	45	47.5	
平均値	67.0%	61.4%	67.9%	67.1%	66.8%	67.0%	66.4%	69.9%	61.9%	70.4%	62.2%	67.6%	
中央値	70.0%	80.0%	70.0%	70.0%	70.0%	75.0%	70.0%	75.0%	60.0%	70.0%	70.0%	70.0%	
最小値	10.0%	10.0%	25.0%	20.0%	10.0%	10.0%	20.0%	20.0%	30.0%	10.0%	20.0%	30.0%	
最大値	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	90.0%	100.0%	
標準偏差	21.6	32.4	22.2	22.9	20.9	23.6	21.0	21.5	22.9	21.2	20.1	19.0	
N	330	7	56	55	211	60	70	59	40	48	27	25	
		学部系統											
	歯学	薬学	保健系	理・工学系	農学系	人文科学系	社会科学系	家政学	教育学	体育学	芸術系	その他	
平均値	86.7%	82.5%	65.6%	62.3%	65.0%	65.1%	64.9%	70.0%	74.5%	50.0%	77.5%	68.6%	
中央値	90.0%	90.0%	70.0%	70.0%	65.0%	70.0%	70.0%	75.0%	80.0%	50.0%	82.5%	75.0%	
最小値	80.0%	50.0%	20.0%	30.0%	50.0%	10.0%	20.0%	40.0%	25.0%	50.0%	50.0%	10.0%	
最大値	90.0%	100.0%	100.0%	100.0%	80.0%	100.0%	100.0%	90.0%	100.0%	50.0%	90.0%	100.0%	
標準偏差	5.8	17.2	22.1	21.4	21.2	22.1	21.9	18.6	19.7		15.4	22.4	
N	3	10	59	32	2	49	98	12	21	1	6	36	

Quality Assurance for Undergraduate Programs at Low-prestige Universities

Koichi Kuzuki
(Kagawa University)

This paper explores actual situations of quality assurance for undergraduate programs at low-prestige universities and some factors that promote the realization of quality assurance, based on a questionnaire survey designed to verify the progress of various efforts towards the realization of quality assurance. The main findings are as follows.

The analysis of chapter 3 testing four hypotheses found that the second hypothesis was found to be true: setting clear and concrete attainment targets at the time of their graduation, sharing these targets among faculty members are more effective for these universities to realize their quality assurance. The third hypothesis was also found to be true: encouraging faculty members to take effective actions to achieve these targets work for the better quality assurance. However, the first and fourth hypotheses, respectively providing extraordinary learning opportunities for students with learning problems, and taking any action to reinforce incentives for educational activities, may not be the factors that promote the realization of quality assurance.

In addition to the test of the four hypotheses, the findings of chapter 3 point out more serious conditions that the enrollment limit exceeds the number of applicants and more students with learning problems are factors that impede the realization.

広島大学高等教育研究開発センター 国際共同研究推進事業 ディスカッションペーパーシリーズについて

ディスカッションペーパーシリーズは、国際共同研究関連の研究成果を、速報性を重視し暫定的にまとめたものです。

本事業の推進にあたり、以下の資金提供を受けた。記して感謝したい。

- ・文部科学省機能強化経費「大学における教育研究の生産性向上に関する国際共同研究」
- ・文部科学省特別教育研究経費（戦略的研究推進経費）「21世紀知識基盤社会における大学・大学院の改革の具体的方策に関する研究－2007年骨太方針をふまえて－」
- ・文部科学省・独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究(A)(16H02067)）
「大学へのファンディングの変化と大学経営管理改革に関する国際比較研究」

執筆者：葛城 浩一（香川大学） 宇田 響（広島大学大学院）

International Joint Research Programs Discussion Paper Series
国際共同研究推進事業「大学における教育研究の生産性向上に関する国際共同研究」
ディスカッションペーパーシリーズ No. 12
戦略的研究プロジェクトシリーズⅡ
「21世紀知識基盤社会における大学・大学院の改革の具体的方策に関する研究」

ボーダーフリー大学における
学士課程教育の質保証の実現可能性
－学部長調査報告書－

2019(平成31)年3月29日 発行
2019(令和元)年6月25日 修正

 **広島大学高等教育研究開発センター**
〒739-8512 広島県東広島市鏡山 1-2-2
電話 (082) 424-6240
<http://rihe.hiroshima-u.ac.jp/>
